
メダロット2 ~カブトversion~

鞍馬山のカブトムシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メダロット2 〜カブトversion〜

【Nコード】

N5683V

【作者名】

鞍馬山のカブトムシ

【あらすじ】

僕は天領イッキ、小学三年生。

一学期が始まって間もないある日、ママにレトルトカレーを買ってくるよう一万円を手渡されて、コンビニに行くと、ヒカル兄ちゃんが叱られていた。僕はヒカル兄ちゃんの横、インスタント食品のコーナーを人差し指で指した。すると、何を勘違いしたのかヒカル兄ちゃんは…。

ひよんな勘違いから、メダロッターとなった少年イッキとメダロットたちの笑いと涙(?)と友情の物語、ここに始動!

【メダロットとは】（前書き）

概ねクワガタバージョンと展開は同じですが、入手メダル・パーツ、一部のストーリー展開が異なります。

【メダロットとは】

【メダロットとは？】

2001年度に発売されてから、2022年度まで広く世界の市場を席卷する日本独自の完全オリジナルロボット技術の最高峰、それがメダロット。

メダロットはコンピューターの頭脳ではなく、「メダル」を頭脳として動く、これまでのロボット学の常識を打ち破ったロボット。

メダルで動くロボット、だから略して「メダロット」

メダロットは「ティンペット」と呼ばれる骨組みをベースとして、様々なパーツを組み合わせるにより、無限の力を引き出すことができる。

メダロットの利用範囲は子供の遊び相手に止まらず、医療、果ては軍事利用にまでメダロットは普及している。

また、一部「レアメダル」という物があり、現在メダロット社（株）から発売されているメダルの殆どは、この幾枚かの「レアメダル」をコピーして製造されている。と、インターネットではこのような情報が流れている。

ブローグ きっかけは勘違い

キーン、コーン、カーン、コーン！

始業式の終了を告げるチャイムが鳴る。

形式ばった校長先生の長い挨拶に、生徒一同はやや疲労気味。

三年生の列にいるちょんまげ頭の少年も、周りの生徒と同じく校長の挨拶が終わったことに、ほっと胸を撫で下ろしていた。

僕は天領イッキ、小学三年生。歳は九歳。自分でいうのも何だけど、チョンマゲ頭を除いて、これといった特徴が無い。更にメダロットを持ってないという点が、僕の存在の薄さに拍車をかけている。まあ、それというのも…。

イッキ年の自己紹介はまだまだ続きそうなので、ここで打ち切る。それに、自己紹介は最初の一行部分だけであり、後半はメダロットに対する願望と、メダロットを持ってない愚痴と決まっているから。

教室で暑苦しいオトコヤマ先生のホームルームも済むと、イッキはいつも通り靴箱に向かい、下履きから上履きに履き替えて、帰宅しようとしたら、

「イッキ！」

と、元気一杯な女の子がイッキの名前を高々と叫んだ。

イッキは声の主のほうを振り向くと、パシャ！という音と共に眩しい閃光が目を襲ったので、イッキは立ちくらんだ。

「何するんだよ、アリカ」

イッキは閃光を放った少女に文句を言った。イッキにそう文句を言われても、アリカと呼ばれた少女は悪びれる装い全く見せず、ただ、ニコニコと屈託ない笑みを浮かべている。

肩辺りでボーイッシュに切り揃えた茶色がかった髪、ぱつちりくりくりとした二重の瞼に、意外にも整った目鼻立ち。少女は純白のワンピースやドレスなどがとても似合いそうだが、白シャツの上に着込む機能重視の紫のオーバーオールと、屈託ない笑みの裏で相手を抜け目なく観察しているような目が、無言で周囲に少女が「女の子らしい」服装を拒んでいるかのような印象を与える。

アリカは見せつけるように、イツキの眼前にカメラを突き出したので、イツキは思わず顔だけ一歩退いた。

「イツキ！ねえ、これ見て！貯めた小遣いで変えたのよ」

この子はアリカ、僕の幼馴染。六歳の頃、父親にカメラを貸してもらい、撮った写真を両親に褒められたことがきっかけで、ジャーナリストを志すようになった。初めはジャーナリストという響きがかっこいいから憧れていただけのようだったが、去年、偶然にもスリ師の犯行の瞬間を撮るといって、正に決定的なジャーナリズムな場面を撮ったことにより、単なる憧れから、本格的にジャーナリストを目指すようになった。

男っぽい姉御肌のアリカ、そのアリカにイツキはよく引つ張り回される。

「何を変えたんだよ？」

「んもう！わかんないの？ほら、レンズよ、レ・ン・ズ！」

「レンズが変わって、どうしたっていうの？」

「…はあー。あんなねえ、メダロット以外のこともちよつとは興味持ちなさいよ。前のレンズは古くて、写りに何かしら不調があったけど、今度のは違うわよ。望遠・広角の二種類対応、微妙な光量調節も可能で、状況に応じて撮影が可能。まあ、瞬間的なところを撮るのが難しいけど、そこはジャーナリストの感と腕でカバーするわ」「つまり、何が言いたいわけ？」

「だから！バージョンアップした私のニューカメラ被写体第一号として、あんたを撮ってあげたのよ。ちょっと嬉しいとか思わない？」
そう言われても、素直に喜べない。不意打ちな状況で撮られたの

で、間の抜けたポーズに顔が写っていることが容易に想像できるからだ。

「じゃ、これで…」

この適当にあしらう感じの言葉が良くなかった。背後のアリカが不快のオーラを発していることを感じたイツキは、まるで地雷原を歩くかのようにそそくさと学校から出た。

イツキが去った後、アリカは小さく独り言をつぶやいた。

「…せっかく、記念として撮ってあげたのに…」

イツキの家は、ベッドタウンである御神籤町にはよくある二階建ての家に住んでいる。周囲の家と異なる点は、屋根が赤く塗られているぐらい。

イツキは帰宅すると、早速、母親のチドリから、今晚のお献立レトルトカレーを買ってくるよう言いつけられた。ママの手には、はたきが握られていた。

「ママ。僕、今帰ったばかりなんだけど」

イツキは両親のことをママ、パパと呼ぶ。

「そんなこと言わずに行ってきたらちょうだい。私はお掃除で忙しいの。ちようちよお金も崩したいところだったし。今回は大サービスとして、お釣りの二百円をあげるから」

イツキママことチドリは、髪型からして何となくアリカに似ている。だが、アリカと違ってこちらは女性を意識しており、髪の毛も緩やかにウェーブがかかっている。

イツキママはご近所でも美人な良妻として評判である。大概の子供は親が褒められるのを聞いても、「何で、あんなおばさんやおじさんが褒められるの?」と思うが、いざ、自分の親の良い噂を聞くと、やはり嬉しいものである。

帰ったばかりで面倒臭いが、二百円の餌に釣られて、イツキはマ

マの一万円を半分折って短パンのポケットに突っ込むと、近所のコンビニへと出かけた。

歩いて十分程度のところ、そこにセブントウエルブのコンビニがある。因みにメダロットは大型デパートばかりではなく、イッキが産まれる少し前から、コンビニでも売られるようになった。

普通、コンビニといえば、入店したら店員が笑顔で「いらっしゃいませ」と挨拶するものだが、イッキが入店すると、挨拶ではなく怒号が叫ばれていた。

「バッカもーん！給料ドロボー！間抜け！消費税三十パーセント人間！」

大量のお叱りの罵声が、若い店員を襲う。若い店員はロン毛で、額のところで髪を大きく左右に分けている。

店長にこっぴどく叱られている彼の名は、アガタ・ヒカル、大学生。彼はどうやらあまり真面目に勤務するほうではないらしい。彼のシフトは週三日分のようなのだが、三日に最低でも一度は店長から厳しくお小言をもらっている様子を目撃される。

店長は温厚な人柄だが、ヒカル店員の仕事ぶりには目に余るものがあるようだ。

今日は特に激しい。

いつもなら、店長は耳打ちでお小言を言うのだが、客が入っても気にせず怒号を叫ぶのは珍しいことだ。カウンターの店員も手をこまねいている。

「誰が！だ・れ・が！こんな高いおニューパーツを仕入れると言った！これの旧式型番を一体注文しろと、三度も言ったぞ」

「店長、それも三度め」

ああ、どうやらヒカル青年は、雰囲気や状況を読み取れないタイプの人間のようだ。自らの手で油を注いだヒカル青年、店長のお説

教もいつもより長く、イツキも呆然とそれを見つめるだけ。

「一か月の間、お前の時給は九百五十円から八百五十円だ！それと、何としてでもこれを片付けるよ」

反省しているように見えて、内心どこ吹く風だったヒカル青年だが、最期の台詞はズシンときたようだ。店長はそれに気づいたのか、鼻を鳴らすと、レジのお姉さんに「済まんが、今日は君とあいつで頑張ってくれ」と言い残して、店から出た。

横目でちらとイツキを見て、片手できまり悪げに頭を掻くヒカル。彼の右手には、KBT型メタルビートルのパーツ一式が入った箱が抱えられていた。イツキは週刊メダロットを毎週欠かさず見ているので、メダロットの知識だけなら、誰にも負けないつもりだ。

ヒカルが持つているメタルビートルは、現在市場で出回っているメタルビートルとは異なる。旧型のメタルビートルの配色は主に鈍い橙色なのに対し、新型のメタルビートルの配色は明るめの黄色が占める。旧型と異なるのは配色だけでなく、装甲全般に頭部・両腕の攻撃力などが改良された。

シアンドッグに並ぶ、メダロットの最有力候補の商品にこのメタルビートルが名を連ねている。

「まいったな……。試しにあいつに着けてやろうと思ったのに……」
誤魔化すように頭を掻くをヒカルをよそに、イツキはヒカルの横、インスタント食品コーナーの棚を指した。

「あの、その……」

もしも、イツキがこのとき叱られたばかりのヒカルを全く気遣うことなく「そのレトルトカレーを買いたいです」とでも言えば、イツキは無事にカレーを手に入れることができたはず。

ヒカルはイツキ少年を見た。イツキ少年が指指す方向は自分の右手に抱えられている物、片手には、一万円札が一枚握られていた。ヒカルは目を輝かせて、イツキの元に近寄った。

「はいはい、わかりました！これですね、これ！いやー、これに目を付けるとは、以前から思っていたけど、君は本当に目の付け所が

いいね」

目の付け所がいいねと言われたが、メダロットはまだ一度も購入したことは無い。

「いや、だから、その…」

「分かっている、分かっている。初めからこんな高いパーツを扱えるかどうか不安なんだろう？大丈夫、人間その気になれば、何でもできる」

「えーとですね…僕は…」

「よし、今なら出血大サービスとして、ティンペットもお付けしちゃおう！今、こんな珍しいメダロットを近所に持っているのは君だけになる。きっと、目立つよー？」

断ることもできた。しかし、今この機会を逃したら、意志の弱い僕ではしばらくどころか一生をメダロットを持ってそうに無い。

何より、メタルビートルは男の子の憧れであるカブトムシをモチーフとしたメダロット。イッキはカブトムシが大好きであり、一号機目は絶対にメタルビートルと決めていた。

そして、おまけにティンペットも付けられると聞いて、イッキの心の善が悪に押されてしまった。

ヒカル青年の押しにやられた面もあるが、一番の原因はメダロットに対する欲求を抑えられなかった自分の心。

コンビニから出たイッキ少年の腕には、レトルトカレーの代わりに新型メタルビートルのパーツ一式とティンペットが抱えられていた。

コンビニを出る前は心は天にも昇らんばかりの気持ちだったが、コンビニを出た途端、その気持ちは雲散霧消した。

後には、やってしまったという後悔ばかり。ママにどうやって言い訳しよう。今更、「やっぱり要らないです」とは言い辛い。それ

以上に、抱えている物を手放したくない気持ちがまさっていた。

家に帰りたくないと思ったが、帰る場所はそこしかないの、やはり自宅に帰るしかない。

溜め息をつく、何となくメタルビートルのパーツをじっと眺めた。まるで、それが起動して、ママから叱られる自分をかばってくれるように期待するかのような目付き。

ある程度歩き、溜め息をつき、パーツを眺める。そんな動作をすれば帰る時間も遅くなり、ママの堪忍袋の尾をますます切らせてしまつことを、イッキは気付いているのだろうか。

1・俺の名前：

暗いなあー？ここ、どこ？ていうか、俺って誰？

たまに目が覚めると、こんなことを自問自答した。目が覚めると言っても、俺にはそもそも目とか無いけど…。

ここは確かに暗いけど、不思議と居心地の悪さとかは感じない。

ある日、動きを感じた。ざくざく、ざくざく、土を掘る音。彼には五感機能どころか体すら無いので何も感じないが、何かが起きる兆しを感じていた。

ざく、かつ！

スコップが金属物に当たったので、掘る手つきが慎重になる。両手の刷毛とスコップで少しずつ土をどかし、まだ、僅かに泥を被るそれが無事なことを喜ぶ。

掘った者の手の中には、金色の六角形状のコインのような物がある。コインの表には、何らかの幼虫と思しきものが描かれていた。

やれやれ、あの人の気紛れも困ったものだ。こんな貴重な物を、まだ年端もいかぬ子供に託して見るとは。

あの人は、あの子供に何かを感じると言った。それを突っ込むとはぐらかすような笑みで「何かは何かじゃ！」と答えた。この返答には呆れてしまったが、どこか憎めない。

それはひとえに、私があの人を尊敬しているからだろう。

メダロットを愛し、メダロットに並みならぬ情熱を注ぐあの人。知的で大胆、それでいて、決して驕り高ぶる態度は一切見せず、ときに今日のような突拍子も無いことを思い付き、子供のようににはしゃぐあの人。そして、火急のときには何をすべきか行動できるあの人。

そんな人だからこそ、私は慕っている。

今から約三十分後にここを通るとある男性に、二つの物を渡す手はずになっている。

あの人は少年にこれらの品を託す理由をもう一つ付け加えた、「可能性」と。

可能性か。果たして、彼が一体どのような行動見せてくれるのか、見届けさせてもらおう。

家に帰ると言い訳する暇もなく、イツキは母親のチドリに叱られて、しばらく二階の自室で反省するよう言い渡された。

部屋に入ると、イツキを慰めるようにフォックステリアの愛犬「ソルティ」が「くうーん」と甘えるように鳴いて、イツキの足元にすり寄ってきた。

「慰めてくれるのかい？ソルティ」

足元にすり寄るソルティの頭を撫でると、ソルティは尻尾を大きくふりふりした。

イツキは自室に入ったときあることに気がついた。メダロットの頭脳であるメダル、それと、メダロットを操作するメダロットが無いことに。

とりあえず組み立ててみたが、肝心のメダルが無いので動くわけも無い。母親にきつく叱られた後でのこの事実、イツキは今日一番の深い嘆きの溜め息を吐いた。

二時間の間、ソルティをかまうなり漫画を見るなりして、時間を潰した。

「ただいまー！」

玄関から間延びした男性の声、パパだ。

イツキのパパの名前はジョウゾウ、歳は今年で三六歳。だが、薄く無精髭をはやした顔と黒縁丸眼鏡のせいで、実年齢以上に見られ

ることがよくある。つい最近では、五十歳と間違われたほどだ。

十分後、パパが部屋に入ってきた。

「イツキ、母さんから話は聞いたぞ」

イツキはぎくりと背筋を伸ばした。叱られる。息子の気持ちを察したのか、ジヨウゾウはイツキの気を落ち着かせるために、優しく微笑んだ。

「まあ、そう固くなるな。パパだって、子供のときは一回や二回ぐらい、お使いのお金を使ったことがある。しかし、今回は少々規模がでかかったな」

少々どころではない。百円や二百円ならいざ知らず、一万円ともなれば、家計にダメージを与える金額だと分かる。

「反省したか？」

「うん…二重の意味でね」

イツキは今日起きたことを簡潔にパパに話した。

「はっはっ！そうか、あの青年か。それにしても、興奮と後悔のあまり、肝心な物を二つも忘れるとは間抜けな話だな」

がつくりと肩を落とすイツキ。ジヨウゾウは元気を出せとぼんぼんと肩を叩くと、息子の顔を覗いた。

「反省したか？」

「うん」

「もつしないか？」

「うん、こんな馬鹿なことは二度としないよ」

「じゃあ、テストで必ず良い点取ってくるか？」

最後の問いに、それはちよつと、とイツキは首を捻った。

「最後のは冗談だ。というわけで、お前にスペシャルビッグボーナスをやるう」

父親のスペシャルビックボーナスとやらを見せつけられた瞬間、イツキはあんぐりと口を開けて、絶句した。パパの右手にはメダル、左手にはメダロッチがあるからだ。

「ば…パパ、これは!？」

「いやー、実はな。いつも通りの道を歩いていると、突然、空から笑い声がしてな。上を見上げたが、特に怪しい物は見当たらない。で、顔を下げると、道路に光る物があつて近づいて見ると、この二つがあつた。恐る恐る拾つたら、また、笑い声が聞こえた。それでな、『な、何だ？強盗か？だとしたら、盗む相手を間違えているぞ』と言うと、その正体不明の奴は『ご安心なされ、今宵はご子息に贈り物を届けに参つた。プレゼントキャンペーンで、ご子息はメタルビートル購入者二千人目となり、その祝いとして弊社からプレゼントを持って馳せ参じ参りました。好きな方法でその二つの品をご子息にお渡しなされ。あと、これからもメダロット社の製品購入をよろしくと伝えてくだされ』と。そうして、正体不明の奴は姿を見せずに消えた」

正直、パパが嘘をついているのではないかと疑つた。しかし、パパが持っているメダルは間違ひなくカブトメダル。クワガタメダルとは違い、カブトメダルは幼虫が右のほうを向いている。

パパが息子のプレゼントとして、イツキがメダロットをする上で不足していたメダルとメダロットの両方を買ってきた。更にそのメダルは、メタルビートルと相性ばっちりのカブトメダル。偶然にしては出来すぎている。

因みにメダロットとは、メダロットに指示を送る時計のような形をした機械のことである。

こんなことを知っている人物は一人しか思い浮かばないが、その考えは捨てた。その人物の普段の行動や姿勢を考えると、こんなことをするとは到底考えられない。

「怪しいとは思つたが、もう疲れているし、一旦、帰宅してから確認しようと思つたら、ママからお前がメダロットを購入をしたことを聞いてな。大丈夫だろうという結論に至つた。というわけで、イツキ。ほら、試しにメダルを装着してみなさい」

イツキはパパからメダルとメダロットを受け取つた。軽いはずなのに、ずしりとした重みが伝わってくる。

深呼吸を一回、二回。ばくばく、ばくばく、胸の鼓動が抑えられない。

ついにきた…。ついにきたんだ。僕が、メダロットになる日がきたんだ。

まずはメダロットを腕に装着し、次にメタルビートルの背後に回る。メダル装着部を押さえるピンを外し、いざ、メダルを窪みに装着。メダルは装着すると同時に、自動的に外れないよう固定された。イッキはじつとメタルビートルを見守り、パパも何故か緊張な面持ち、ソルティは呑気にあくび。

三十秒後。メダロットから、全身稼働可能。エネルギー充填マックス。メダロットを始動しますか？というアナウンスが流れた。メダロットの画像には、「YES/NO」の表示がある。

イッキは迷わず「YES」を押した。また因みに、押さずとも、声で「YES」と言っても動く。

ぷしゅー。僅かな煙が排出され、メタルビートルの目に光りが宿る。

うわわ！何！何が起こったの！？眩しいだけんど！

それはほんの一瞬のこと。すぐに目は光に慣れた。手を動かす。

手…？手なんて無かったはずなのに、何で、俺は手を動かせるのでも、現に俺は手を…。いや、手だけじゃねえ、頭や足も動かせる。

「やつ…たあぁー！！！！！！」

誰かが叫ぶ。俺にはそのうるさい叫びが、歓喜のあまりのものと理解した。

「どこ…どこ…？」

メタルビートルの声は、生意気さを感じさせる少年のような声。

それでいて、どこか頼もしさを感じた。少年はメタルビートルが声を発したことに驚いたが、本人もそのことに驚いていた。

「ここ？ここは僕の家」

ガキがそう言うと、すかさず隣の大きい野郎が、

「イツキ、お前が建てたわけじゃないだろ。正確には、パパとママとイツキとソルティの家だ」

ワン！と、四つん這いに寝そべる生物が同意するように吠えた。

大きい者は、今度は私を見て申した。

「あと、今日から君が住まう家でもある」

俺は無言で頷いた。

「ところで、イツキ。名前は決めているのか？それとも、機体名称で呼ぶのか？」

「名前はもう決めてあるんだ。伝説のメダロッターと呼ばれる人の愛機の名前」

俺より少しばかり大きな小さい奴は、俺を見て、満面の笑みでこう呼んだ。

「メタビー！今日からお前の名前は、メタビーだ。よろしくな！メタビー！」

……メタビー……

俺の現状理解が追い付いてないせいかもしれないが、「メタビー」という名前は妙に俺の胸に良く響いた。

「……メタビー……それが、俺の名前……」

ちっこい奴が俺に左手を差し出した。

三つ、はつきりと分かることがある。俺はこの「体」にとっても馴染んでいること。二つ目は、次々と情報が流れて、私は瞬間的に一定の物事を理解できることを「理解」したこと。そして、三つ目は、俺はこの阿呆面アバウメな奴と「友達」になるんだということ。

俺はこいつが差し出した手を握り返した。

2・ファーストロボトル

起動してから二日、メタビーはそれなりに家族の一員として馴染み始めていた。

念願のメダロットを手に入れてご満悦のイツキ。ただ、一つ不満を述べれば、メタビーは少々生意気すぎる。一応、両親の前では務めて礼儀正しいが、僕の前ではぐうたらと寝転がって、漫画を読みふけったりする。あまりにも冷めた性格はどうかと思うが、できれば、もうちょつと落ち着いたところが欲しかった。

まだ、たった二日しか経ってない。そうすぐに、全く見も知らぬ者たちと暮らす環境に馴染める者はいない。

時間が経てば、メタルビートルことメタビーの別の一面が垣間見られるはず。

今日、イツキはメタビーを連れて、毎週足繁く通っているメダロット研究所に行く。メダロット研究所長、アキハバラ・アトムことメダロット博士に自分のメダロットをお披露目するためだ。

今日、イツキは俺をとあるところに連れて行くと言った。

とあるところって何だ？と聞いても、イツキは答えをはぐらかした。着いてからのお楽しみというわけか。

道中、イツキは女の子と出会った。傍目から見ても、イツキの友人だということは理解できる。女の子横には、女学生のような姿をしたメダロットが付き従っていた。自分以外のメダロットは初めて見た。俺の視線に気付いたのか、その子は俺を見てお辞儀をしたんで、俺もつられてお辞儀を返した。

「あっ！イツキもメダロットを買ったんだ」

少女は初めて私の存在に気が付いた。イツキは鼻高々に、

「うん、そう。名前はメタバビーっていうんだ。かつこいいだろ」

「メタバビー！？あんだ、大胆な名前を付けるわね」

少女は私を見て微笑み、自らと、自らが所持するメダロットの名を告げた。

「私は甘酒アリカ、ジャーナリスト志望の小学三年生。で、こっちはSLR型メダロット・セーラーマルチことプラス」

「よろしくね、メタバビーさん」

「おう、よろしく！俺、こいつの家で居候させてもらっているメタバビーっていうんだ！」

へえーと呟いて、アリカという少女は俺とイツキを見比べた。

「随分なやんちゃ坊主ね。イツキ、あんたにや手に負えないんじゃない」

「な、何だよ。人がどういうメダロットを持つのが、人の自由だろうが」

「それもそうね。ところであんた？メダロット研究所に行くんでしょ？」

イツキは慌ててアリカと名乗った女の子の口を塞ごうとしたが、もう遅い。

「メダロット研究所？」と俺は呟いた。

アリカは口を塞ごうとしたイツキの手を払うと、俺にメダロット研究所の説明をしてくれた。

簡潔にまとめれば、メダロット研究所はメダロットの生みの親である「メダロット博士」と呼ばれる人がいるとのこと。イツキが俺に目的地の名を告げなかった訳は、メダロット研究所とメダロット博士なる人物を紹介したとき、俺がどのような反応を見せるかという期待。そして、そのことを説明できる一種の優越感に浸れる自分つまり、これら二つの目的があるから、イツキの奴は俺に目的地を告げなかったというわけか。

当のイツキは舌打ちしていた。

「ちえっ。メタバビーを驚かそうと思ったのに」

「ねえ、イツキ。私も付いて行っていいでしょ？博士から、何かネタになるような話が聞けるかもしれないし」

「別に、どっちでもいいんじゃない？」

こうして、メダロット研究所へ向かう道中の連れに、アリカとブラスが加わった。

小高い丘の上に、メダロット研究所は建っていた。真っ白な六階建ての建物で、メダロット研究所と書かれた看板に、正門にある男性ティンペットと女性ティンペットの銅像以外には飾り気は見当たらず。別段、特徴の無い形のビルだった。

イツキたちが顔馴染みなのもあるが、メダロット研究所は一部の研究棟を除き、一般にも開放されている。

受付のコンパニオンガールをモチーフとしたCMP型メダロットのティンクルことキティちゃんが、四人を博士が居る個人研究室まで案内してくれた。

先だって、イツキが博士の研究室のインターホンを押した。

「はい、アキハバラ・アトムですが」

インターホンの向こうから、元気の良いおじいさんが話しかけてきた。

「こんにちわ、博士。天領イツキです。今日は友達も連れてきました。入っても構いませんか？」

「おお、イツキ君か。よろしい、友達と一緒に入りなさい」

個人研究室の扉が自動的に開いた。

メダロット界の権威でもあるメダロット博士の部屋。外見から考えるに、きつと、訳のわからない機械に、沢山のケーブルやら変な液体が入った瓶が所狭しに置かれていると思いきや、案外そうでもない。

博士の研究室は小さっぱりとしており、立派な文机が二つにコン

コンピューターが二台、研究用に置かれているメダロットが眠る三台のカプセルに、他は天井ほどの高さがある書棚が東西南北に一つずつ配置されているだけ。大量の機械やらビーカーなどは見当たらない。何故、実際に博士の部屋を訪れたことが無い人がそういう想像をするかといえば、最初に述べた博士の外見にある。

常になんまりと笑っている口元、大きな黒いサングラスにつるぴかの頭頂部、後頭部周囲の髪をヤンキー風に逆立たせて、一見してマッドサイエンティストを彷彿させる。

でも、本当はメダロットに情熱を注ぐ、子供心を持ち合わせた優しい茶目っ気のあるおじいさんだ。

イツキ、アリカ、ブラス、メタビーと、順にメダロット博士と挨拶を交わした。

メダロット博士は早速メタビーに目を付けた。

「イツキ君、今日わしのところへ来た目的はこれだな？」

「あの、迷惑でしたか？」

メダロット博士はにかつと、子供っぽく微笑んだ。

「迷惑どころか大歓迎じゃ。我が社の製品を持った子供の生の意見を聞けるチャンスが増えた」

この寛容深い性格とちよつとしたことをアイデアに結び付けるところが、博士を現在の地位に就けた

のかもしれない。もっとも、メダロット博士は地位とかには固執しない人だが。

「ところでメタルビートル君、君の名前は？それとも、機体名称のままかね？」

いきなり話をふられてメタビーは戸惑ったが、睨むようにメダロット博士を見上げて、

「俺あ、メタルビートルことメタビーってえ名だ。俺のマスターのイツキが考えた名としちゃ、中々上出来のほうだろおっさん？」

メタビーはいつも以上に生意気だった。どうやら、メダロット博士なる老人がただ者ではないことを感じとり、彼なりに緊張して、

少々江戸っ子弁風の挨拶をさせたようだ。

「がっはっはっは！こら、また随分躰がなつてないな」

「ううん。メタビーの奴、初めからこんな調子なんだ」

「一つ一つのメダルには、それぞれ個性がある。その個性と上手く付き合うことも、メダロッターに求められるものじゃぞ」

何度も聞いたアドバイスだが、イツキは真面目に「はい」と応えた。次に博士は、アリカとブラスを尋ねた。

「アリカ君、それと、ブラス君だったね」

「覚えていてくれてありがとうございます」とブラス。

博士は先んじてアリカの話題を喋った。

「目的は記事のネタだね。もしも、わしの条件を聞いてくれるなら、イツキ君たちと一緒にある物を見せてもよいぞ」

「条件つて…まさか」

アリカは無い胸を両腕で抱いた。

「これこれ！わしが変態スケベ親父的な言動を話すような奴に見えるか？」

博士はまずそんなことを言う人ではないが、変態っぽさを感じる頭をしている。

「イツキ君、君はロボトルの経験はまだか？」

「はい」

「アリカ君、条件とはイツキ君とロボトルをすることじゃ」

この条件に、アリカとイツキの兩人は面食らった。ロボトルとは、ロボットバトルの略称である。イツキはためらいがちだが、アリカは乗り気になったようだ。目が、獲物を追い求める記者の目になった。

二人は肩を突き合わせて、怪しい笑みで密談した。

一分以内に密談は終了した。

「イツキ君、メタビー君、ブラス君、付いて来たまえ。今から、ロボトルテスト試験場へ行くぞ」

ロボットテスト試験場はメダロット研究所の地下にある、新開発されたメダロットの性能をテストする場所。

今、この場所に二体のメダロットがいる。

右はアリカの愛機、セーラーマルチのプラス。左はイツキの愛機、メタルビートルことメタビー。

試験場は真四角の正方形の部屋で、直径は五十メートル、天井の高さ十メートル。周りは分厚い防弾ガラスに囲われていて、どの角度からも戦いの様子を眺められるように設計されている。

アリカは自信满满、対するイツキは自信無さげだ。イツキは今日が初めてのロボット。ロボットをすることは考えていたが、今ではなく、一週間ほど様子を見てからロボットするつもりだった。

とはいえ、後には引き下がれない。ここまで来たら、もうやってやれという気持ちになった。

それでも、緊張で体が震える。初ロボットがこんな整った設備、しかも、自分よりロボット歴一年先輩のアリカと戦おうなんて、夢にも思わなかった。

「イツキ君、そう固くなるな。勝っても負けてもこの試合ではパーツの取り合い無しだし、壊れたところはわしが責任持って治す。何よりも、今日は君の記念すべき初ロボット、悔いが無いよう全力でぶつかってみたまえ」

アキハバラが固くなったイツキを宥める。メダロット越しから、メタビーもイツキに声をかけた。

「イツキ、もっと気楽にやろうぜ。おっさんの言う通り、今日は派手にぶちかまそうぜ！」

アリカがとつととおっぱじめるわよ、と叫ぶ。

固くなっていてもしょうがない。やれるだけのことをやるだけ。イツキは挑むように一歩前進した。

満足したように博士は頷くと、博士は試験場のマイクを握った。

「合意と見てよろしいか？」

「はい！」とイッキ。

「いつでもオツケーよ」とアリカ。

博士は一拍置いて、

「それでは、ロボトルファイター！」

二体の射撃タイプの撃ち合い。防弾ガラス越しからでも、銃撃音の激しさが耳に響く。

初めはメタビーがやや有利に思えたが、下手な弾は所詮下手、いくら撃つても当たらない。

セーラーマルチの頭部には、「索敵」という能力がある。「隠蔽」によつて姿を消した敵を発見するときに使われるが、こつした攻撃が当たらない、当たりにくい状況にある敵に対し、特殊なレーダーとコンピューターが動作や角度を素早く計算し、機体の攻撃命中率を上昇させる能力が索敵。

だがしかし、セーラーマルチは索敵を使わずとも、パリティバルカンとライフル系攻撃のショートショットを確実に命中させていた。いくらセーラーマルチの攻撃力が高くなっても、こつ、何発も入らなくては持たない。

メタビーのはただ撃っているだけであり、プラスの緩急を上手く突いた攻撃にてこずっている。

作戦もくそも無い。こうなれば、特攻あるのみ。

「メタビー！お前の下手な射撃じゃいくら撃つても当たらない。こうなれば、必殺のミサイルを撃つんだ」

「…何！？仕方ねえ、乗った！」

メタビーは両足をしっかりと踏ん張り、両角から二発の反応弾を発射した。左右から挟むように、二発の反応弾がプラスを襲つ。

「甘いわね」アリカが口端を釣り上げた。

三メートル手前の距離で、両腕の機銃で二発の反応弾を撃ち落としました。

どどがーん！

二発のミサイルが爆発し、試験場内部が煙で見えなくなる。

「私のほうがロボットル歴は長いんだからね！その程度の戦法なんて通用しないわよ！ブラス、索敵モードオン」

自分が勝利したかのように、アリカはブラスに索敵するよう指示を出す。

しかし、アリカはイツキの無茶な戦法を見抜けなかった。

きゃあー！ブラスの悲鳴がメダロットチへと届く。

「ブラス！？どうしたの」

悲鳴の後、再び激しい銃撃音が室内で唸る。換気システムで煙が排出されると、ブラスが膝をついていて、メタビーが立っていた。

イツキは勝ったと思ったが、そうではなかった。膝を付くブラスが左腕のショットショットを放つ、メタビーは微動だにせずそれを受けて、ピン！と、メタビーの背中からメダルが飛び出すのが見えた。

「勝者、甘酒アリカ&ブラス！」

メダロット博士が高らかに勝利を少女と一機に告げる。

イツキはがつくりと膝を付いた。負けた。

「あんたはよく戦ったほうだよ。初陣にしちゃ、今日の戦い方は中々だったわ。それに、メタルビートルの必殺であるミサイルを囮として、視界が効かなくなったブラスに殴り掛かるなんて、結構派手な戦い方だったわよ」

向こう側からこちらに来て、イツキはアリカを慰めるように労わったが、イツキは落胆したままだ。

「あーあ。まさか、記念すべき初戦で負けるなんて…」

「あー、もう！くよくよよしなさい！ほら、しゃっきとしなさい。あんたはとつとメタビーちゃんのメダルでも拾ってあげなさい」

アリカに一喝されて、イツキは慌ててメタビーのメダルをメダロ

ツチに装着した。研究員と共に運び出したメタビーのボディは、穴だらけだった。

アリカは腰を下ろして視線をブラスの高さまで下げて、ブラスを労わる。

「ご苦労様、ブラス！案外、苦戦しちゃったね」

「ええ、そうね。メタビーさんが殴り掛かったときは、びっくりして思わず悲鳴を上げちゃった」

アリカとブラスは互いを健闘しあった。

メダロットは本体に装着せずとも、メダロットに装着すれば意志疎通が可能である。因みに、現在市販されているメダロットは、最大三つのメダルを収容可能。

メタビーは一向に喋る気配がしない。いくら呼びかけても、メタビーは返答しない。

「メタビー…。ごめん、俺が下手な指示を出したばかりに」

「…いや…お前のせいだけじゃない。俺の実力不足のせいだ」

生意気なメタビーも、今ばかりは神妙な態度を取っている。気まぐずい二人の間に、メダロット博士が割って入った。

「よしよし、イツキ君もメタビー君もようやった。イツキ君、後はわしに任しなさい」

そう言うと、メダロット博士は研究員の一人を呼んだ。眼鏡をかけて、頭を七三に分けた長身痩躯で色白肌の男性が立った。

「彼の名は白玉君。白玉君、この子たちをあそこまで案内してくれんか？」

白玉は唇をきつと結んだまま、無愛想に頷いた。

メタビーのボディをこのまま置いて行っていいものかどうか迷うイツキは、メダロットを覗いた。イツキの視線を感じたメタビーは、「行けばいいだろ。大丈夫、あのおっさんは信用できるようだし。それに、俺はこの状態だから、必然的にお前に付いていくことになる。ちよつどいいさ、俺も『あそこ』が何なのか気になるし」

白玉という研究員に案内されてきたのは、「アキハバラ・ナエ個人研究室」という表札が掲げられた部屋だった。

「いいか、ナエさんの邪魔をするんじゃないぞ。絶対にだ！」

ドスの利いた声音で脅し文句を言っつて、白玉は元来た道を戻った。アキハバラ・ナエは、アキハバラ・アトムの孫娘。年齢は十九歳だが、その歳にして、既にメダロット界の権威である。祖父であるアトムと違い、穏やかで、緩やかにカーブがかかった黒い長髪が魅力的な女性だ。子供であるイツキから見ても、ナエは美人だとわかる。

インターホーンを押すと、「祖父から話は聞いております。イツキさん、アリカさん、どうぞ入ってください」と、大人びた女性の声。それでいて、まだ子供っぽさも残る声、そこがまた可愛らしい。

イツキはもちろん、博士には馴れ馴れしい態度だったアリカも、ナエに対してはかしまった面で一例し、あのメタビーすら、ナエにはメダロット越しから礼儀ぶった挨拶をした。

「どうも初めまして。俺、イツキのメダロットでメタルビートルことメタビーと言います。よろしく願います」

たおやかに二重の瞳を細め、ナエは二人とメダロットの一人に品良く微笑み返した。

初見のとき、イツキはナエがメダロット博士の孫娘とは到底信じられなかった。今もそうだが。

「さ、これが祖父があなたたちに見せると約束したものです」

ナエは、イツキとアリカに、カプセルに収納された四体のメダロットをそれぞれ紹介した。

初口ボトルでアリカに負けてショックを受けていた僕とメタビー

だったが、ナエさんとアリカを交えての談笑をしていたら、すっかり元気になっていた。メタビーの調子良い態度を見て思ったけど、メダロットも綺麗な人には弱いのだろうか。

一時間後、メタビー・ブラスの修復が完了したと、博士からナエさんの研究室に連絡がきた。

その頃には、ちょうど四人交えての談笑も終わっていた。

博士とナエさんは正門で僕らを見送ってくれた。

イツキ、メタビー、アリカ、ブラスの四人は、肩を並べて歩いた。それにしても、二日間で僕の世界が大きく広がったように思えた。初のメダロット、初のロボット。そのロボットによって感じた、今までに無い高揚した気分、その後の反省。たったこれだけのことで、とにかく驚きと新しい発見の連続が続いて、それが楽しくてしょうがない。

どのくらい楽しいかって？家族皆で旅行や遊びに行ったとき何かとは比べ物にならないや。

発見といえば、ナエさんが紹介した「エレメンタルシリーズ」という四体の女性型メダロット。まだ、マスコミにも完全極秘なメダロットを見られるなんて。二度目だけど、ほんと、驚きの連続だよ。因みにアリカが博士と交わした約束とは。例のエレメンタルシリーズの発売発表日が来たら、どこよりも早く、アリカの「甘酒新聞」に載せて公表していいとのことだった。

「うっふっふ。熟成した情報を見たとき、大衆が一体どのような反応を見せるか気になるわ」

僕とのロボットに勝利し、その上、超特ダネとなるネタを掴んだアリカはハイテンションな状態だった。

まだ、始まったばかり。今日の敗北は、いわば、これから来るであろう艱難辛苦の練習の様な物。

あの子とメダロットの性格をかんがみたら、不安が全く無いわけではないが、まあ、多分何とかなるだろう。なんぜ、あの子にまだ沢山の時間が残されているのだから。

仮に外れたら、そのときはそのときだ。

2・ファーストロボット(後書き)

戦闘結果がクワガタバージョンとは異なります。

3・一人の日常(前書き)

閑話休題。メダロット「メタビー」がメインの回、ゲームには無い完全オリジナル。

3・一人の日常

俺がこの家に住みついて今日で一週間。

チドリママは買い物、ジウゾウパパは仕事、イツキは学校。んで、俺は留守番。

イツキの両親には義理を通して、一応、片付けにソルティの餌をやっておいた。

この一週間の間に、アリカとの初ロボットを含めて計四回ロボットした。ぶっちゃけ、本音を漏らすと自信が無かったが、首の皮一枚のところまで三回のロボットには勝利した。

イツキの指示もそうだが、俺の射撃の腕もまだまだだな。

やることねえから、俺は漫画を読んだ。読んでるのはイツキママの少女漫画だ。女向けの読み物なんて、と見下していたが、読んでみるとページをめくる手が止まらない。

まじになって、悲痛な主人公の恋が叶うことを応援した。若干のご都合主義は良いとして、純日本人のはずなのに髪が金髪だったり目が青や紫色の人物などがいた。日本人の舶来コンプレックスというやつだな。そこら辺はつつこまないよう心掛けた。

わん、わん！

ソルティが散歩を催促する。ママは、ソルティが散歩を催促したときに限り、外出をしても良いと言っていた。一日中漫画を読んでいるのもあれだし、ちったあ体を動かすか。

適当に戸締りをしてから、しっかりと施錠した。カチリと良い音を立てたから、多分、ちゃんと閉まっているはず。

釘からソルティを縛る綱を解き、俺は散歩に出かけた。

ばったりと、お隣の甘酒おばちゃんとお会った。

「あら…あなた。確か名前は…」

「メタビーです」

平素に名前を告げた。

「ああ、そう。イツキ君のメダロットだったわね、確か。犬のお散歩、よね。どう見ても」

「はあ…。ママから留守番を言われたんですけど、ソルテイが散歩を催促したら、ちょっとぐらい出掛けても良いって言っていたから」
「あら、そう。じゃ、お散歩を楽しんでいらっしやいメタビーちゃん」

甘酒おばちゃんは、我が子に話かけるように俺をメタビーちゃんと呼んだ。チドリママが俺のことを話す際に、必ずちゃんづけするらしい。お陰で、ここら辺では俺のことをちゃんづけで呼ばないのは精々四人ぐらいしかいない。

構やしないが、この前イツキと同じ年ぐらいのガキから「よっ！メタビーちゃん」と小馬鹿にされたときは、そいつにミサイルをぶち込みたい衝動を必死に堪えた。

俺はソルテイと国道に出た。信号に差し掛かる。赤信号だったので、待つ。車道側の信号が青に替わったとき、俺より一メートル横に離れた奴が、歩道側はまだ赤にも関わらず歩き出した。

イツキにそのことを聞いてみたら、イツキは無視するに限ると答えた。僕とメタビーが注意したところで、ああいう大人は無視するか、生意気なガキとガラクタだと逆切れする。専らこの二つのパターンが占めており、素直に聞く耳持つ奴は稀らしい。

子供に注意されても恥ずかしいと思わないなんて、ある意味大人じゃ下の部類に入るな。なよなよしい奴だけど、少なくとも、イツキはまだそういう奴ら何かよりかは百倍ましだな。

この御神籤町には、広い河原に面した歩道がある。

俺はここに来ると、精神が高揚する。何とか、走りたくてしようがなくなる。俺と一頭は無我夢中に駆けた。機械の体だが、一種の爽快感というものを感じた。途中、ソルティはもう勘弁してくれと、息を切らした。情けない犬だな。でも、これ以上無理をさせるのも可哀想なので、俺は走りたい気持ちを抑えて、緩めな歩調にした。

帰り道、セブントウエルブが目についた。

このコンビニには、俺の体をイッキに売りつけた駄目店員がいる。そいつは、のべんくらりと店外で体を伸ばしていた。俺が店長なら、とつくのとうに首にしているね。

そして、俺を見たら間の抜けた声で「ん、どうも」と挨拶した。インターネットで覚えた言葉を使えば、日本オワタ。

店内を見たら、無表情に男がエロ本を立ち読みしていた。女の裸や下着の写真を見て興奮するのは、欲求不満状態だからかな。実は一度、そういう本を立ち読みしたことがある。何が面白くて分からず、あの店員に聞いてみたら、女子高生があいつを白い目で見た。さすがに、あときはちょっとばかり悪いことをしたなと思った。

コンビニも過ぎて、次は家から歩いて五分ぐらいのところにある公園に来た。

園内には、萩野香織とその友達と思しき園児にメダロットが一体いた。そいつはカメレオンみたいな姿をしている。すると、そいつがギョロリと片目を俺に向けた。

「よう、確か『メタビーちゃん』だっけ？」

かー！見も知らねえ奴からメタビーちゃんと呼ばれるなんて、ママは一体どれほどの人に俺のことを話したんだ。

「そういうお前こそ、何なんだってばよ！」

メタビーはカメレオンっぽいメダロットに突っかった。

「そう怒鳴るなってば。別に悪口の意味合いで呼んだわけじゃねえ。俺、ナチュラルカラーっていうメダロット。見てのとおり、カメレオン型メダロットさ。俺の主人は爬虫類とかが好きなんだ。つい

でに、俺は機体名称がそのまま名前になっている」

「見たことない奴だな」

「そりゃそうさ、俺はこの公園から歩いて四十分ぐらいのところに住んでいる。俺が勝手に出歩いて遊んでも、特に咎められたりはない。名誉のために言っておくが、山彦は決していい加減な奴じゃないぞ。ちよつと、マイペース過ぎる一面はあるが」

俺と奴が話していると、香織ちゃんが間に入ってきた。

「ねえ、メタビーちゃん。一緒に砂の山作って、トンネルも開けよう」

ソルティが香織に擦り寄る。人懐っこいソルティは、見知っている人間を見ると、遊んでもらいたがる。俺はこいつと香織ちゃんたち遊ぶことにした。たまにゃ、ガキっぽく我を忘れることも必要さ。まあ、俺まだ一歳にすらなっていないけど。

よしよし、兄ちゃんがリードしてやるう。そう思っていたのに、いつの間にか夢中に砂山を作り、トンネルを掘っていた。しっかりと泥で補強して、完成。我ながら、良い出来だ。ナチュラルカラーのことを香織ちゃんはナツちゃんと呼んでいるので、俺もそう呼ぶことにした。

「たまには子供になってみるもんだな、ナツ」

「ああ。それにしても、子供のようにはしゃいでいるお前の姿。結構、微笑ましかったぞ」

事実だから、怒鳴れない。ナツもはしゃいではいたが、怪しい奴がないか周囲の様子を見ていたりした。こういう、寛容でちよつと冷静に物事を見られる一面は、俺に欠けているところだな。

俺は香織ちゃんたちとナツに別れを告げた。

急いで帰宅して、偽装工作に取り掛かった。ボロ雑巾で、俺は自分とソルティの体に付着する泥を拭いた。

拭き終わる頃、聞き慣れた我が家の車のエンジン音が近づく。危なかった、この家では自分を含め、ママには頭が上がらない。泥で汚れた姿を見られたら、どう叱られるか知れたものではない。

「メタビーちゃん、お留守番ご苦労さま」

俺はママの荷物を持って家に入った。何とか、泥で汚れたことはばれずに済んだ。

3・一人の日常（後書き）

CMO型カメレオンメダロット・ナチュラルカラー

カメレオンらしく、隠蔽の能力で景色に同調して敵の攻撃から身を守る機体。オリジナルメダロットではない。

後、萩野香織という子の名前は、「はぎのかおり」という名称のお米が由来です。

4・校内ロボット大会【前編】（前書き）

スクリーンズ初登場。ちょっと子悪党な感じですよ。

戦闘と台詞以外は全く同じなので、両バージョンのどちらかを先に読めば、片方の最初の文章は飛ばしても構いません。

4・校内ロボット大会【前編】

四月中旬。ギンジョウ小学校最大の行事、ギンジョウ小学校校内ロボット大会が行われる。

イツキとメタビーは、このロボット大会に向けて四人の人間にロボットを挑んだ。実力はまだまだ未熟。メタビーの性能に頼って勝っている面が大きい。イツキは何となくロボットにおける戦略、ここぞというときの勘と勢いの乗り方が分かってきたような気がした。

アリカは、イツキのロボットの嵌り具合に呆れた表情をしてみせた。

「そりゃ、私だってロボットはするけど。去年から今年にかけてのロボット回数は、通算十八回ぐらいのものよ」

イツキは自分が中途半端な人間と知っている。その自分が、こんなにも熱く物事に取り組めるのは初めてかもしれない。だが、イツキがロボットに熱中するのはそれだけではない。

それにはまず、ロボット以外についても詳しい説明をしなければならぬ。

メダロットを持つ者が、必ずしもロボットをすることは限らない。精々十人に一人ぐらいの割り合いであり、それも、あくまでメダロットの体を動かしてやるうというのが大半。

ロボットには二種類ある。

一つはスポーツとして、自分の手持ちのメダロットの体を動かす目的で行われるもの。前のイツキとアリカのロボットはこの部類に入る。

二つ目は、真剣ロボット。これは、互いのメダロットの頭部・脚部・右腕・左腕のどれかパーツを賭けて行われるロボット。イツキは一万円でティンペットとパーツ一式を揃えたが、あれは例外中の例外。本来、男性型ティンペットは二万円、女性型ティンペット

は倍の四万円もする。

パーツも安くない。現在市場で出回っている一番安いメダロットは、サル型メダロットのモンキーゴングというメダロットだが、パーツ一式全価格六千円もする。

イツキの新型メタルビートルのパーツは現在の市場価格では一式五万円、高額の種類に入る。

仕入れる側にとっても決して安くない買い物。こんな高い物を勝手に仕入れてしまったのだから、ヒカルが店長に大目玉を食らうのも致し方ない。

真剣ロボトルは、子供が持つににとってはお高い物を賭けて戦うのである。なけなしの小遣い貯めた。あるいは、一、二年分の誕生日とクリスマスプレゼントを我慢するのを条件に買ってもらった物。それが、奪われてしまうのである。

そして、負けることは即ち、自分の友達や相棒と呼べる存在が無残な姿になるのを見ることになる。朽ち果てた状態の自分の愛機から、パーツをもぎ取り他人の手には渡すのは、正に苦痛と屈辱の二重苦だ。

イツキはママから罰として、一年間お小遣い抜きとなった。

自分が真剣に取り組めて、尚且つ、お小遣いを稼げる。この二つの条件に当て嵌まるのが、真剣ロボトルだった。イツキはこれまで、三人と真剣ロボトルをした。

一人目は銀行勤めの若い女性。こちらは、すんなりと蝶型メダロット・レッドスカーレスの右腕を渡してくれた。

二人目は男子高生。いかにも不良っぽく、ハリネズミ型メダロット・ソニックタンクの頭部を受け取る際、舌打ちされたのは怖かった。

三人目は同じ小学三年生の男子。泣きながら蜂型メダロット・プロポリスの左腕パーツを渡されたときは、自分がいじめっ子と勘違いされないか冷や冷やした。

余談だが、メダロットにはスラフシステムという自己修復機能が

ある。これも語ると長いので、また別の機会に語ろう。

イツキはレッドスカーレスの右腕をコンビニで下取りに出して、千五百円を手に入れた。メダロット社の規定により、コンビニやデパートではメダロットのパーツ単品買い取りシステム導入がされている。

千五百円。たった僅かな金額だが、自分とロクシヨウの力で本気で取り組み手に入れたお金。

いけないことで手に入れたメダロットだったが、イツキに本気で物事に取り組む苦労、そして、その楽しさを気付かせた。

今日と明日の休日の二日、校内ロボット大会が開催される。優勝は期待してないが、僕とロクシヨウの実力を試す絶好の機会。仮に優勝すれば、賞状と男性型ティンペット一台が授与される。

学校開催のイベントだが、参加費用には千五百円取られる。見物だけでも、一般・保護者は五百円。児童も二百円支払らなければならぬ。学校はロボット大会の行事に本腰だ。

参加には、クラス担任の教師に参加する旨を告げる。イツキは大会参加募集締切日の水曜日に担任のオトコヤマ先生に参加表明を申し出て、千五百円の参加費用を入れた封筒を提出した。

大会参加募集人数は七十人。今年は六九人と、中々の盛況ぶり。

大会は午前の部で第一回戦。一回戦が済むと、一時間のお昼休み。午後の部で第二回戦が行われ、三十分の休憩をはさんだのち、第三回戦が行われる。続く日曜日。午前の部第四回戦、二十分の休憩をはさみ、そのまま準決勝戦。昼食摂取の時間も兼ねて一時間半の休憩のあと、決勝戦が行われる。

準決勝と決勝になると応援の生徒の親が減る代わりに、一般の見物客が詰めかけてくる割合が高い。学校側は自治体と協力して、休憩時間の間に校内と周辺の見物客・交通整備を行う。

イツキパパは仕事の都合で今日は来れない。明日は休めるから、今日勝ち残ったら応援に行くとパパは言っていたが、それは無さそうだ。

イツキの一回戦の相手は、スクリューズの一番手であるカガミヤマが対戦相手だからだ。

スクリューズは三人いて、一番手カガミヤマ、二番手イワノイ、そして、キクヒメという女の子がリーダーを務める。イツキと同じ三年生でクラスが隣り合っている。イツキが羨ましそうにロボトルの光景を眺めていると、いつも決まってこの三人はイツキのことをからかった。

三人は三年生の番格であり、イツキを含むメダロットを持つ同学校の生徒は、できる限りこの三人とは目を合わせないようにしている。

スクリューズは常に三人がかりで対戦し、パーツを奪っては荒稼ぎをしているという噂がある。噂の真偽はともかく、この三人は個々の実力も高い。学校で、この三人の誰かと一対一でやりあって勝てるような生徒はあまりいない。

「ご臨終だねえ、イツキ」

声にドスを利かせて、スクリューズのリーダーキクヒメが声をかけてきた。少女ながら、声には一種の威圧感があった。茶髪に顔立ちからして、キクヒメはどこか日本人離れしていて、両親のどちらかは外国人だと聞く。

キクヒメの右側に控える腕白い細めの少年が、半笑いな目付きで小馬鹿にしたようにイツキを見やる。

「いやー。メダロットを初めて一か月も経たない初心者ごときが大いに出るなんて。ほんと、身に余る行為っすよね姉御」

焦げ茶色のジーンパン、肩のラインに沿って白筋が入った深青色の

ティーシャツ、僅かに垂れた^{まぶた}瞼と斜め上に逆立つ黒髪が目立つ彼は、スクリーユーズの二番手イワノイ。

キクヒメの左側に控える少年がイワノイの意見に同意する。任天堂の某RPGの主人公を連想させる赤帽子を被り、日焼けがかった浅黒い肌に丸みを帯びた体型、閉じているのか開いているのか分からない糸目をした少年だ。

「うん、ほんとほんと。家事炊事洗濯に慣れていない奴が、適量も分からず洗濯機に洗濯剤をぶち込んで、洗濯物を駄目にするみたい」意味不明な例えを話す彼は、スクリーユーズの三番手カガミヤマ。

近くに三人のメダロットが見当たらない。スクリーユーズは試合直前に自身の愛機を呼び出すつもりだ。

メダロットとメダロットの本体には、「転送機能」がある。電波を受信することにより、何千メートルと離れたところにあるメダロットの本体を、メダロットを通して瞬時に目の前まで送ることができるシステム。メダロットのこの「転送機能」も各分野における利用が試みられている。

「あなたがどの程度抗えるか見物だねえ。カガミヤマ、たつぷりと可愛がつてやりな」

キクヒメはそう言うつと、近くの売店へと足を向けた。イワノイ、カガミヤマも後に続く。

これまでのところ全く負け無しで自信もついてきたが、イツキは自信を無くした。今まで無言だったメタビーが、メダロット越しからイツキに呼びかける。

「イツキ、気にするなよあんな奴ら。俺たちには俺たちのやり方がある。そして、その俺たち流のやり方で、あいつらに一泡吹かせてやるつぜ」

常日頃は生意気なメタビー。だが、いざというときは元気づけてくる。

メタビーの言うつとおりだな。今は勝敗を気にせず、全力で物事にぶつかろう。

「イツキ」

チドリとアリカの二人がイツキを呼ぶ。

ママとアリカとアリカの母親、三人は伴って校門を潜った。アリカの横にプラスがいないのを見て、イツキはママの横まで来ると、アリカにそれとなくプラスがどこにいるか聞いてみた。

「プラス？先に行ってもらって、見物の場所取りをしてもらっておいたの？」

「アリカちゃん！」

遠目から、プラスが跳ねてアリカに手を振っていた。

「イツキ、あんた何よその自信無さげな顔は」

メタビーの喝で元気になったつもりだが、アリカや他から見ると、どうもそうではないらしい。本音を漏らせば、実はまだ怖い。

「あんた、一回戦の相手は確かカガミヤマだったわね。スクリューズがなによ！あんさんとメタビーなら、カガミヤマ程度なら一発ノックダウンや」

アリカが大阪弁も交えた男っぽい声でイツキを激励するのを聞いて、アリカの母親が注意した。

「こら、アリカ。せめて口調ぐらい女の子っぽくしたらどうなの」「別にいいじゃん、お母さん。じゃ、イツキ。三回戦で会いましょうね」

アリカは元気良くプラスの元に駆け寄った。アリカの母親は、やれやれと首を振った。

「ほんと、あの子ときたら…」

「いえいえ、子供はあれぐらい元気のほうがいいですわ。うちのイツキに見習わせたいくらいですよ」

ママは僕の頭を撫で回した。イツキは撫で回すママの手を煩わしそうに払い除けた。

「…ママ！こんな人前で」

「あら、いいじゃない？もしかして、これぐらいで禿げちゃうと心配しているの」

チドリがもう一度イツキの頭を撫でようとしたら、イツキは逃げるようにアリカとブラスが座るシートに向かった。

「逃げられちゃいましたね」

アリカの母親が笑顔で言う。

「ええ」

今は撫で回せる高さにあの子の頭も、そのうち、自分の頭に手を伸ばすぐらいの大きさになるんでしょね。ふとして過る感慨を消すように、大会開始十分前の放送が流れる。

イツキとアリカが二人に早くくるよう促す。

「さて、あの子たち二人がどこまで頑張れるか。見届けさせてもらいましょうか」

チドリの言葉に、アリカの母親は小さく相槌を打った。

試合台は警戒網を張ったグラウンド内部の中央。そこを、相撲の土俵のように土で盛り上げただけだった。

一分で一回戦は終了した。潜水系パーツの脚部を装着した機体に、相手はブルーサブマリンの対水攻撃パーツでこれを撃沈した。

続く一回戦第二試合、天領イツキ&メタビー対カガミヤマ。カガミヤマは既にメダロットの本体を自宅から転送していた。

カメ型メダロットのキースタートルこと鋼太夫^{こうたゆう}。カメ型だけあって移動速度は鈍いが、その分装甲が厚い。また、両腕と頭部から発射されるレーザーはかなりの威力と速度を誇る。

東はイツキとメタビー、西はカガミヤマと鋼太夫。

黒い紳士ズボン、白い半そでの紳士ティーマットに蝶ネクタイという出で立ちで、鼻と口の間立派に生やした髭を蓄えた初老の男性が、試合台中央で両者を交互に見やる。

「先ほども申し上げましたが。私、ロボトル協会公認レフェリーのミスター・うるちと申します。メダロットが機能停止、あるいはマ

スターがギブアップの意を表明した場合、一方の勝利とします。それでは、このロボットル合意と見てよろしいですか？」

「イツキとカガミヤマは一つ首を縦に振った。メタビーと鋼太夫は睨み合っている。」

「ロボットルファイター！」

開戦合図と同時に鋼太夫はいきなり左腕のレーザーを発射した。

メタビーは間一髪、右足の爪先が焦げる程度で済んだ。

レーザーやビーム系の攻撃は、次の一発を撃つのに時間を要する。更に観客は高い壁から見下ろして観戦ではないので、思い切った攻撃ができない。条件はこちらも同じだが、メタビーの右腕は単発式のライフル系攻撃「リボルバー」

威力は低い、反動が大きい左腕のサブマシンガンと比べたら危険は低く、確実に鋼太夫のみに当てられる。ギリギリのところまで避けつつ、メタビーは確実にリボルバーの弾丸を鋼太夫に命中させた。

二分後には、鋼太夫の体は凸凹だらけ。危機感を覚えたのか、一発逆転を賭けた三門レーザー一斉発射。

「メタビー！上！」

「しゃあ！痛っ！」

メタビーは避け切れず、左足が消失した。

「耐えろ、メタビー！そのまま反応弾を撃て！」

無茶な攻撃をして動けなくなった鋼太夫に、メタビーは反応弾を二発。反撃させないよう、立て続けにもう二発撃った。

「鋼太夫機能停止！勝者、天領イツキとメタビー」

マイクも使わず爆音が冷めやらぬ中、ミスター・うるちの勝利者宣言は多くの観客に聞こえた。

その後も消化試合は行われて、お昼の十二時五十分頃には一回戦が終了した。

「イツキ、メタビーちゃん。二人とも意外とやるじゃない」

「アリカ、プラスおめでとう。けどね、アリカ。あんな風になりに声で叫ぶのは、できれば控えてちょうだい」

イツキ、甘酒の両母親が自分の子供たちとその相棒の戦いぶりを褒めた。

四人はピクニック用のシートに座り込み、昼食を取っていた。今日は特別に、チドリはイツキの好物の一つであるトンカツを持ってきた。ここにカレーも加われば、イツキにとっては最高の食事である。

アリカはパセリに野菜サラダなど、意外にも青野菜系の料理を好む。

食べて、出す物も出してリラックスしたあとは二回戦へと突入。

二回戦の相手は五年生。一回戦で使用したパーツを全て別のに替えていた。

脚部がラビウオンバット、右腕は付けた機体の行動速度を高めるチャージドシーズのパーツで、残る左腕と頭部は何とソニックタンのクのパーツだった。

ソニックタンクとなら、一度手合わせたことがある。だが、この前と違ってこちらはソニックタンク一式で組み立てず、スピードがあるパーツを二つも装着している。

イツキはメタビーの左腕をプロポリスのものに替えた。

開始早々、命中など気にせずカプセルを加減して発射しまくった。

ばばばばーん！

ネズミ花火のようにカプセルが次々と爆ぜて、相手の動きが鈍る。そこを一気にミサイルで片付けた。ただ、相手は倒れる間にナパームを発射し、メタビーの左腕に直撃した。

運営委員会のメダロット、ホーリーナスとムードラゴンの二体がロクショウの腕を治療した。スラムシステムを異常促進させてパーツの自己修復機能を高めさせる、いわゆる回復系のパーツを二体は備えている。十分後にはメタビーの左腕はすっかり元通り。

といっても、次の試合では元のサブマシンガンにどうせ戻すから、治療する必要は無かったのだが。

第三回戦、これで前半戦は終了する。

対戦相手はスクリューズの二番手イワノイ。使用する機体はシアンドッグの後続機、DOG型イヌメダロットのブルースドッグ。イワノイは名前を付けず、機体名称を名前としている。

「イツキ、仇を討とうなんて思わないで。ただ、蜂の巣にしてくれるだけでいいから」

「イツキ、アリカちゃんの仇を討つのよ」

「イツキ君、適度に頑張つてね」

アリカ、ママ、アリカの母親の三人の応援はバラバラだ。

「イワノイ！あたいらの力を今度こそ見せつけてやりな」

「合点承知の助だ姉御」

キクヒメの啖呵に、イワノイはガッツポーズで応えた。前の第二試合で、プラスはイワノイのブルースドッグに敗北を喫した。

治療を施されたが、体中の弾痕跡が消えるには時間がかかりそうだ。

痛ましいプラスの姿を見て、メタビーは当然、イツキも珍しく燃え上がった。

メタビーが片膝を地面に付ける。

「何だあ？まさか、もう当て上げのポーズか？」

二人は答えない。

「あんま調子に乗るんじゃないぜイツキ。おいらのブルースドッグの実力は、そこの同機種なんかとは比べ物になんねえぜ」

イツキはイワノイの挑発に全く乗らなかつた。

例えば、ことあるごとにメダロットを持ってないことからかわれてきた。だけど、もうそうじゃない。今は、メタビーというお調子者で最高の相棒がいる。

ミスター・うるちのロボットファイトの叫びと同時に、二体は激しく撃ちあつた。

この勝負はイワノイがメタビーの取った姿勢に気付かなかった時点で、敗北は決まっていた。メタビーの姿勢は斜め上、この姿勢で撃つても観客には当たらない。つまり、遠慮なしに撃てる。

気付いた時には既に後の祭り、ブルースドッグは大量のサブマシンガンの弾丸を食らった。最後は反応弾では決めず、リボルバーで穴だらけの頭部に一発。

きゅいん！

ブルースドッグは俯せ向けに倒れた。

「ブルースドッグ機能停止！勝者、天領イツキ&ロクシヨウ」

二人の豪快な戦いぶりに、今度は数人だけでなく、多くの観客から拍手と称賛が贈られた。自分が負けたことが信じられず、イワノイは呆けた表情をしていた。

4・校内ロボット大会【前編】（後書き）

都合上、何型か記載されないメダロットがいるのはお許しください。因みに、ラビウオンバットはウサギ型。チャージドシリーズは花型です。

キースタートルの名前は小説オリジナル。ブルースドッグはアニメ版を参考にしていきます。

4・校内ロボット大会【後編】（前書き）

カプトバージョンもようやく後編を更新。

4・校内ロボット大会【後編】

尿意をもよおしたイツキは、四人に先に帰るよう言った。

「寄り道せずに帰ってくるのよ」

「分かったよ、ママ！」

イツキは一目散にトイレへと向かった。

思ったとおり、トイレはこの階も混雑していた。股で股間にある物を抑えつけて、イツキは数分間トイレを我慢した。

カシャ、カシャと、機械的な歩調。尻尾と手足が電気コードの接続部のような形をしており、真っ赤なぶかぶかなスカートと服を着たような体、頭に猫耳を付けたネコ型メダロットのペッパークャットが男子トイレにやってきた。主人である女の子でも探しているのだろうと、気にかける者はいなかった。

「ブルースドッグと鋼太夫倒したぐらいでいい気になるにや。私はあいつらとは比べ物にならない。あんたはあのカブトムシの命日でも待つておくことだにや」

イツキにさり気無く近寄ったペッパークャットは、イツキを小声で脅した。そのペッパークャットの脅しを聞いて、イツキは青ざめ辛そうな表情をした。だが、それは限界まで近づいている辛さであり、そのメダロットの脅しの台詞はとんと聞こえてなかった。

そのメダロットはそのことに気が付かず、自分の台詞で相手がびびっていると勘違いして、満足した様子で去って行った。

正門を出てすぐのところ、スクリーンズの三人が立っていた。キクヒメが例のペッパークャットに話しかけた。

「セリーニヤ、イツキとあの虫の様子はどうだった？」

「カブトの奴はいなかったけど、イツキにはバツチリ。青ざめた顔で身を震わせていただにや」

このペッパークャットはキクヒメの愛機で、名前はセリーニヤ。

「へっ！イツキの奴、明日、自分がどういいう目に遭うか分かってい

るらしいな」とイワノイ。

「ああ。泥塗れにしてやるう」とカガミヤマ。

「あたいらを舐めたらどういう目に遭うか。あいつの虫の体にしっかりと刻んでやりな、セリーニャ」

そして、スクリューズは既に勝利したかのように高笑いした。

その頃、用を済ましたイツキは児童玄関で待つメタビーと会った。

「気分は？」

「死ぬかと思っただけど、何とか間に合ったよ。でも、辛かったな。

人を押し倒してでも行こうとしたら、僕の心を読んだのかな？赤いボデイのメダロットが『待つておくことだよ』と注意したんだ。

おかげで、間違いを犯さずに済んだよ」

「…赤いボデイのメダロットといえば、さっきこの近くを通ったな。猫が見栄張って服着たような感じのが」

「猫：ペッパークャットか。まあ、あのメダロットを持っているのは他にもいるし。僕の間違いを押し止めてくれるような心優しいメダロットが、まかり間違ってもあいつらのメダロットということは無いな」

イツキとメタビーは人混みに揉まれながら、ゆっくりと歩いてくれている四人を見つけて合流した。スクリューズはほくそ笑み、イツキの気持ち爽やか。双方、互いの思惑に全く気付かず。知らぬが仏とはこのこと。

帰宅すると、ちょうどパパも帰ってきた。

夕食の時間帯、イツキとチドリママはパパに試合模様をこと細かく話した。特に、イワノイと対戦したときの心境と戦い方を伝えると、ジョウゾウはいたく感心した。

「ほう、お前がそんなことを考えて戦ったとはな。中々やるようになったな、イツキ」

父親にも褒められて鼻が高くなったイツキを、チドリは諫めた。「勝手に一万円も使って購入した物なんだし、一回戦で負けていちやしゃれにならないわ。それに、明日の

対戦相手の子はあなたより経験が豊富らしいじゃない。褒めといて何だけど、そうやってすぐ鼻を伸ばしちゃうのがイツキのわるいところよ」

ママに諫められて、イツキは明日の対戦相手が誰か思い直した。第四回戦第二試合の相手は、スクリューズのリーダーキクヒメ。僕より一年半も早くロボットを初めて、通算ロボット数はイツキとは比べ物にならない。

ママに諫められてイツキは身を引き締めたが、本音は違っていた。未熟者の僕がカガミヤマ、イワノイも倒せた。キクヒメが強いことには間違いないだろうが、何、僕とメタビーならまず勝てる。

この思考を無理に抑えていたが、ともすると、つい本音が頭をよぎってしまう。

居間のソファで寝転がって漫画を読むメタビーも、パパのお褒めの言葉を聞いて鼻が高く（無いけど）なりそうな心を、シリアスなバトル漫画を読むことによって抑えた。にしても、大人向けだけあって少年誌にはないグロさがあるな。

日曜日、校内ロボット大会後半戦。三回戦で人数が絞られて、応援席には保護者や参加生徒の友人の代わりに一般の客が詰めかけていた。それでも、昨日より幾分か空いていた。

第一試合が終わり、イツキとキクヒメの第二試合が行われようとしていた。

だが、昨日までの調子はどこへいったのやら、イツキはすっかり固くなっていた。キクヒメと相方のペッパーキャットのセリーニヤは、もう慣れているという感じ。

企業参加の一大ロボットイベントと比べれば、小規模な大会。とはいえ、メダロットを持って一か月も経たない自分が、小規模ながらよく勝ち抜いたな。

やるだけやってみるか。そう思って足を踏み出そうとしたら、思うように進まない。アリカときのほどではないが、また緊張しているようだ。見かねたメタビーが一声かけようしたら、イツキはそれを制止した。

「大丈夫…。何時間とはかけられないけど、ちゃんと前進だけはそのから」

イツキは綱を渡るようにそつとメダロッター立ち位置についた。

「じゃ、メタビー。頑張るか！」

どこかまだ引きずっているが、イツキは多くの人がいる前で澆刺とした調子で喋った。

「任せとけてばよ！」と言って、メタビーは自らの胸をどんと叩いた。

メタビーは開幕一番サブマシンガンを発射。が、セリーニャはそこにおらず、機関銃の衝撃で試合台の土埃が虚しく立ち込めるだけだった。

普通、漫画なんかと違い、こういう隠れる場所が無くて、真正面から相手と向かい合う戦いでは、とてもじゃないが口を開いている暇はないはず。それなのに、メタビーは「クソ！クソ！ちよっこまかとうぜえ！」と愚痴を叫んでいる。

メタルビートルは射撃タイプ。接近戦のペッパーキャットと比べれば幾分かは喋る余裕があるとはいえ、セリーニャがいると目測した方向に撃つ度に外れるから、メタビーは無意識のうちに焦りを落ち着かせるため、つい、口を衝いて出てしまっていた。

「つにゃにゃ！下手な鉄砲数打ちや当たると言うけど。下手な物は

所詮下手、真面目に精進を重ねた弾と違って当たるわけないにや」
セリーニヤは余裕綽々にメタビーを嘲笑う。

「んだとお、こらー！」

セリーニヤの安い挑発に乗ってしまい、更に激しさを増すメタビーの銃弾。だがしかし、セリーニヤの言ったとおり、下手な鉄砲は一向に当たらない。

「メタビー、落ち着けてば！」

イツキが大声を発してメタビーを止めようとした。

「俺だつて無駄に弾撃ちたくねえよ！けど、撃つの止めたら絶対あいつは猛烈に攻撃してくるから、撃ち続けるしかない」

メタビーは全くの考えなしに撃っていたわけではなかった。接近戦はどう考えても相手が上、戦闘経験も上、素早さも上、そんな相手に対抗するにはまぐれ当たりを期待した撃ち方をするしかない。

畜生！強いとは分かってけど、鋼太夫とかブルースドッグなんかとは比べ物になんねえや。

焦る二人を尻目に、キクヒメは酷は笑みを浮かべた。

「さーて、お遊びはここまでにしようか。セリーニヤ、やっておやり」

避けに徹していたセリーニヤだったが、ここに来て動きが加速した。セリーニヤは一直線にメタビーに向かう。

「メタビー、危険を承知で目前でミサイルを撃て」

「よっしや！」

一メートル手前、ミサイル発射。勝ったと思いきや、爆炎から無傷のセリーニヤが体を丸めて宙回転。ちょうどメタビーの背に着地し、メタビーが反応する前に両腕でメタビーの体を抱いて電流を注いだ。

あああびよびよぼへーべべまきかわちよぐじゃぎにやがぁーん！
メタビーは奇声を上げて悶えた。

このままじゃ確実に負ける。危険すぎるが、これしかない。

「メタビー、ペッパーキャットの両腕を掴んだまま逆方向を向いた

ら、反応弾を撃つんだ。そして、ペツパーキャットを下敷きにするんだ」

「何！？その前に、俺のボディが耐えられないかもしれないぞ」
メダロット越しからメタビーが抗議する。

「いいから、今は俺の言うとおりにしてくれ」
「どうなつても知らねえぞ！」

痺れる体に鞭打つてメタビーはセリーニヤの両腕を掴み、必死に逆方向を向いたら反応弾を発射した。

ちゅどーん！

二体は試合台の外まで吹っ飛ぶ。逆方向向いて撃たせたのは、そのまま撃つたら観客に被爆する恐れがあるからだ。

もうもうと煙が二体を包む。立ち上がるのはどちらか。イツキも、キクヒメも、騒いでいた観客も、ミスター・うるちも固唾を飲んで見守る。むっくりと、一体が立ち上がった。

「……にやあー。無茶する奴」

立ち上がったのはセリーニヤだった。メタビーは倒れたまま、メタビーの角はぼっきりと折れていて、背後のメダル装着部が開いてメダルが抜けていた。音の激しさにメダルが外れる音が掻き消されたようだ。

イツキとメタビーの賭けは失敗に終わった。激突する直前、セリーニヤは反転して逆にメタビーを下敷きにしたのだ。それはともかく、アリカの時を含めたら二勝一敗、自分のメダロットが機能停止する様を目撃するのはこれで二度目。ミスター・うるちがキクヒメとセリーニヤの勝利を告げる宣言に、観客の歓声も聞こえない。キクヒメが握手するふりをしてイツキに近づき、毒づいてもイツキの耳には届かなかった。

イツキがメタビーの本体を抱えると、アリカがそつと傍に寄り、イツキにメタビーのカブトメダルを差し出した。

「ナイスファイト、イツキ」

いつも違い、アリカの声音は優しかった。

イツキとメタビーちゃん、負けちゃったのね。負けたら、こんな高い物を買っておきながら負けるなんて。と、きつい一言を言おうと思っていたけど止めておこう。試合台からアリカちゃんと一緒に戻ってきたイツキの顔は悔しさと悲しさで一杯に溢れていて、メダロツチにいるメタビーちゃんに謝っていた。その態度を見たら、言えるわけが無い。

イツキは優しい子だけど、どこか中途半端というか事無かれ主義で、どんな物事に対しても、それなりにやればいいだろうという感じだった。

そのイツキが、今は一つの物事に真剣全力に考えぶつかっている。言わなくても、顔も見れば分かる。今のイツキの表情は、物事に全力に取り組んだ物しかできない者の顔をしている。

戻ってきたイツキの肩を抱こうとしたら、ジョウゾウさんが先にイツキの肩に手を置いて、「負けてしまったが、今のイツキとロクシヨウは本当にかっこ良かったぞ」と我が子の健闘を称えた。

私が言おうとしていたのに。この人、本当こついうところは抜けて目なく思える。イツキはまだ立ち直れていないようだ。しょうがない、この単語なら少しでも現実に引き戻せるかもしれない。

「イツキ、今晩は大好物のカツカレーよ」

「…カツカレー…」

カツカレーという言葉に一番反応したイツキを見て、やっぱりまだ子供だなとチドリは思った。

5 おどろ山探索記 (打ち捨てられた者) (前書き)

スカートめくり事件は要らないと思ったので、カットしました。

5・おどろ山探索記（打ち捨てられた者）

校内ロボット大会は六年生の女子生徒が優勝を飾った。キクヒメのセリーニヤはイツキとの試合での負傷がたたり、惜しくも優勝を逃した。

そのイツキとメタビーだが、校内ロボット大会以降、挑戦者が増えた。負けはしたがスクリューズの子分二人に打ち勝ち、あのキクヒメとも善戦した光景は主に小学生の見物客の口から伝わった。

ゴールデンウィークまでの間、イツキは十二人とロボットを繰り広げた。

まだまだ未熟な二人だが、十三戦して十一勝二敗した。一敗目は、学校の校長先生の愛機である侍型メダロットのナンテツとの対戦。

伊達に歳は取っておらず、イツキとメタビーはコテンパンにされた。二敗目は潜水系メダロットを持つ中学生が相手。相手の有利な川での戦闘だったから、徐々に装甲を削られて敗れてしまい、メタビーの右腕を取られてしまった。

後日、アリカが男性型アンチシーパーツを持っていたので、イツキはアリカからリバーソーサーの右腕を借りてリベンジを果たし、メタビーの右腕を取り返した。

アリカは心地よくパーツを貸してくれたが、絶対裏に何かあるとイツキは直観した。ゴールデンウィーク前日の金曜日、学校が終わったあと、イツキはアリカに自宅へ来るよう言われた。

「ねえ、イツキ。今度のゴールデンウィークさあ、おどろ山に行かない？」

甘えた声を出しながら、アリカは部屋にいるイツキを逃がさないよう詰めていた。

「何で？」

「何でつて？あんだ、私に貸しがあるでしょ。だからさあ、おどろ山の幽霊の正体を見抜く取材に同行してくれない？お父さんとお母

さん、今回のゴールデンウィークはどこにも連れて行ってくれそうにないから」

イツキは迷った。

僕のパパも今回は忙しくて、夏休みにメダロット島へ連れて行ってくれると約束した代わりに、今回のゴールデンウィークは我慢してくれと言った。どこへ行けそうにもない。と行って、ずっと日がな一日ごろごろするのもどうだろう。イツキはゴールデンウィークの間、アリカと共におどろ山の幽霊調査に出かけることにした。

「やっぱり！そこなくっちゃ」

期待どおりの返事が聞けて、アリカは喜んだ。

ロボトルにおける借りを返すためでもあるが、イツキも俄然、ここ最近のおどろ山幽霊騒動の正体が何なのか知りたかった。

おどろ山は御神籤町の数少ない観光スポットの一つ。のっぺりとした山群の連なりで、登山には向かないが、豊かな自然があふれていて、休日での家族や友人を連れての気軽なハイキングなら持つてこいの場所。

事は今年の二月に起きた。小学生の男の子がメダロットを連れて山に入り、越冬中の昆虫を採集しようとしたら、「…置いてけ…。森を汚す機械を置いてけ…。…さもなくば…。…お前の魂をいただく…。…」と、不気味な声が森に響いた。

怯えた少年は、自信のメダロットを使って周囲に声の主がいないか探させた。すると、メダロットの悲鳴が上がった。少年が駆け寄ると、自身の愛機が無残な姿で樹の根本に倒れていた。

「…出ていけ…。さもなくば…。今度はお前を喰う…。…」

すっかり恐怖した少年は、千切るようにティンペットからメダルだけを掴み、必死の思いで下山した。その日のうちに管理事務所から青年団に連絡が入り、少年の証言を下に、五名が少年のメダロットの本体を搜索したが、一切そのような痕跡は見当たらなかった。そのメダロットは旧式であり、少年がメダロット社の保険を利用して、パーツやティンペットを貰うための一芝居を打ったのではない

かと、あらぬ疑いもかけられた。

三月、大学生のグループが四名入山した。内二名はメダロットを連れていた。大学生グループがおどろ山にあるおどろ池の近くを通ると、また、あの声が四人を脅した。

四人と二体のメダロットは鼻で笑い、二人一組に分かれて声の主を探した。そしたら、徐々に辺りに霧が立ち込めてきた。その霧に包まれているうちに、四人は気を失った。目が覚めると、二体のメダロットは忽然と姿を消していた。

同月。最初の被害者である少年のクラスメイト十人が、夜、全員メダロットを連れて山に入った。

一時間後、十人は恐怖に顔を歪めて山の管理事務所に助けを求めた。

十人の話を整理すると、何でも二本の黄色い角を生やした鬼が一匹に、宙に浮かぶ白い幽霊がわらわらと姿を現し、例の脅迫台詞を言った。子供たちは果敢にメダロットを使って攻撃したが、何と全てすり抜けた。攻撃は当たらず、徐々に狭まる幽霊たち。仕方なく子供たちはメダルだけでも持って、本体を置いて下山した。これを聞いた役所も、ようやく重い腰を上げることにした。

青年団に自治体と協力して、町は一日に一回は山の巡回をさせた。また、子供一人の入山に夕方以降の入山も一時規制した。

四月。今度はその巡回者が被害に遭った。二人一組でメダロットを連れていたが、おどろ池の近くを通るとあの声がした。二人とメダロットは固まって行動した。その日は雨が降り、山は霧が立ち込めていた。二人は警戒して歩いてしたが、何故か頭が重くなり、気付くと眠っていた。目覚めると、後には何も残っていなかった。

そして、このことは「おみくじ新聞」だけでなく、ついには全国紙とニュースにも取り上げられてしまい、インターネットでも話題を読んだ。おかげで、ゴールデンウィーク前日だというのに、ハイキング客を相手にした宿泊業やお土産による売り上げが昨年より落ち込むことが予想された。悪い噂が広まり、町の安全のために買っ

たメダロットも一体奪われて、役所は椅子に座って頭を悩ますばかり。

一体の汚れたメダロットがおどろ池近くに横たわっていた。そのメダロットは騒動が起きる前からそこにあり、とある者たちはあまりの汚れ具合から、それを見つけても触るのを躊躇っていた。

男性型ティンペットとパーツィ式を付けたそのメダロットは機能停止しているが、メダルは装着されたままなので、まだ生きていた。それは、ちょうどおどろ山のごみが集積しているところにあり、山狩りの者たちも朽ち果てたその存在を無視した。

ふむ。エネルギーが無くとも、思考機能が停止しないというのは本当らしいな。それにしても、祖父殿おじが死んだ途端、用済みと言わんばかりに親族の方たちは私を捨ててしまわれたらしいな。このご時世では珍しく、祖父殿の親族には祖父殿以外にはメダロットをお持ちでなかった。あの事件のせいもあって、親族の方はメダロットに対して良き思い入れが無いとはいえ、これはあまりにも酷い仕打ち。しかし、私が彼らを憎みきれないのは、今だに亡き祖父殿の手柄に惹かれているからかな。

見えるわけではないが。今、穢らわしき身成をしたこの私を拾ってくれるようなお方はいぬかな？…ふっ…愚かな希望だな。

そのメダロットは一旦、思考世界での言動を打ち切り、心を無にした。

ママにアリカとおどろ山に行くことを話すと、ママは陽が落ちないうちに帰ってくるよう言い渡し、お弁当を渡してくれた。お弁当を渡すときのママの目が、変というか、妙に浮いているような気が

したけど、何でかな？ イツキが家から出たあとも、チドリはちょっと嬉しげに浮ついた顔をしていた。

「ふふ。イツキがアリカちゃんとデートねえ」

このとき、イツキは何故かくしゃみをした。

歩いて三十分後、イツキたち四人はおどろ山前に到着した。去年のゴールデンウィークでは、ある程度の人数が見受けられたが、今年は何れも物寂しい。イツキたち四人以外に、敬老会の人たちが八人と、山伏が数人ほど。おどろ山は意外なことに歴史が古く、何とかの高名な和尚さんが眠るといってお岩さんがあり、たまに修験者などが訪れたりする。

入山する前、管理事務所のおじさんが注意を呼びかけた。

「もう知っているかもしれないが。危険だから、夕刻までには必ず降りてくるんだよ」

四人は小さく会釈して、入山した。

「幽霊といっても、こんなまっぴるまから出るわけもないわね」

最初はジャーナリストとして身構えていたアリカも、すぐに足取りが軽くなり、プラスと手を組んで楽しげに山中の眺めを見渡していた。イツキはメタビーと手を組まなかったが、のんびりとした気持ちで歩んだ。

「何か幽霊で騒がしいとか聞いていたけど、何てことはねえ。良くある野山の景色が広がっているだけじゃないか」

イツキはメタビーの言ったことに同意した。山は日当たりが良く、木漏れ日がまた風情を醸し出していた。幽霊はもちろんのこと、とても鬼とか人魂が出そうな気配はしない。陽が落ちれば、このどかな景色も違った物に見えるかもしれないが。

先を行くアリカが振り返った。

「イツキ、おどろ池に行ってみましょ。幽霊の目撃情報が一番はつきりしているのはそこだから」

おどろ山にあるおどろ池は、山の中腹地点で曲がってずっと七百メートル登った先にある。池は大よそで直径四十メートルほどあり、

真ん中は土が盛っていて小島のように見える。湧水が出る池で、真夏日においても涼しさを感じるおどろ山名所の一つ。だが、今は幽霊騒動とは別の問題を抱えている。池を見たイツキは顔をしかめた。

「話には聞いていたけど…。ちょっと、酷いな」

綺麗な湧水の池には、ぶかぶかと空き缶にビニール袋などのごみが目立つ。おどろ山は牧歌的な山道とこの池が見所。そのせいか、こうして心無い観光客がごみを捨てていくときがある。町もこの山ばかりに金を回すわけにはいかず、ボランティアを募集して秋に年に一回の大掃除でごみを集める。それでも、こうした不法投棄が跡を絶たない。

イツキたちはここで一休みした。少しごみが気にかかるが、冷えた山頂の空気がちょうど火照った体を冷やしてくれて、心地よいイツキとメタビーは池の周囲を徘徊した。

池を半週したところは急峻。樹が懸命に張り付いているようだ。その下を見下ろすと、薄汚れた物が樹の根元にもたれかかっていた。イツキとメタビーは互いに見合った。

「あれって、メダロットかな？」

「うーん。きつたならしいけど、多分、そうだな。ありゃ」

イツキたちの様子に気付き、アリカとブラスも半週地点まで行き、下を覗いた。イツキはペンライトの光を当てた。酷い有様だが、間違はなくメダロットだ。近寄らないと分からないが、脚部の形からして飛行タイプと思われる。

「こんなところにポイするなんて！あんまりよ！」

アリカが怒り心頭のみぎり吠えた。メダロットが捨てられることは今年が初めてではない。去年も、三体のメダロットが山に捨てられていた。大抵の場合、動けないようエネルギーを抜かれて捨てられるので、可哀想なことにメダロットたちは何もすることができなくなる。

そして、今イツキたちが見ているメダロットのような末路を迎える。

「まだ、あいつ動けるかな？」

「イツキ、気持ちは分かるけど、それは止めといたほうがいいわ」
アリカはイツキが助けることに反対した。

「絶対とは言い切れない。けど、エネルギーを抜かれても微かに意識はあるらしいわ。それで、自分たちが捨てられたことも何となく分かるみたいよ。だから、仮に彼、彼女を助けたとしても、人を攻撃するかもしれないって」

メダロットの頭脳であるメダルは謎が多い。機械のボディが無ければ動けないはずなのに、メダロットはその状態でも思考による生体活動を続けられることが最近、判明した。イツキとアリカも週間メダロットの視聴者なので、そのことはよく知っているつもりだ。

イツキはアリカの言うことを理解していた。ただ、あの朽ち果てた存在を一度見た以上、手を差し伸べずにはいられなかった。

「危険かもしれない。…それでも、頼むよアリカ。今回だけ！今回だけは見逃してくれないか？」

「見逃すって…。助けたあと、あんたあの子をどうするつもり？まさか、里親でも募集するの」

イツキはしばし考えたのち、おもむろに顔を上げた。

「僕が…引き取るよ」

「でも、あんたのお父さんは許しても、お母さんは厳しいから駄目なんじゃ」

「何日かかっても説得してみせるよ」

イツキは真つ直ぐにアリカを見据えた。いつものイツキらしからぬ真剣な眼差しに、アリカはなにか自嘲気味に首を振った。

「じゃあない。協力してあげる。もしかしたら、幽霊騒動の犠牲者の線もありうるし」

「ありがとう、アリカ」

そうと決まったら、次にどう救出するかだった。取っ掛りは多いが、所々ぬかるんでいるので安全ではない。

「なあ、イツキ、アリカ。あいつを引っ張り上げる役目は俺とブラ

スに任せてくれねえか？皆で皆、一遍に降りたらちよつとまずいだろう？」

今すぐ来ないだろうが、他の観光客が訪れない保障はない。メタビーの言うとおり、全員で降りるところを目撃されたら、言い訳に時間がかかる。というわけで、メタビーとブラスの二体であるメダロットを引つ張り上げることにした。

「ねえ、皆さん。あの櫟かしわに絡みつく蔓は使えるかもしれないわ」

ブラスの見る方角には太めの櫟があり、ちょうどイツキの小指ぐらいの太さの蔓が絡まっていた。何とかして傷つけまいとしたが、ブラスとメタビーは銃弾で樹に穴を穿いてしまった。メタビーは決まり悪げに頭を掻く動作をした。とにかく目的の物を手に入れたので、メタビーは四つん這いになって急峻を降りた。

その降りる姿ときたら、まるで本当のカブトムシに見えなくもなかったが、アリカは違うようだ。

「何か…一瞬、ゴキブリに見えちゃった」

「だあーれがゴキブリだ！人が真面目にやっているときだってえのに！」

メタビーは案外地獄耳だった。メタビーはアリカの羽虫のような小さな呟きを聞き取り、怒号した。

「ごめん、ごめん！謝るから、頑張つてちょうだいメタビー」

メタビーはぶつくさと小言を漏らしながら、例のメダロットに蔓を巻きつけた。

イツキ、アリカ、ブラスが例のメダロットを引き上げ、メタビーが朽ちた体を後ろから押し上げて、樹などにぶつからぬよう補正した。

「皆、ありがとう」

イツキは心を込めて礼を述べた。

イツキ、アリカは生えた植物を手で払いのけ、池で濡らしたタオドルでメダロットの体を拭いた。大体検討は付いていたが、そのメダロットは間違いなく不死鳥型メダロットのデスフェニックスだった。

デスフェニックスは継続系攻撃のメダロット。継続攻撃を得意分野とするメダルは「フェニックス」だから、普通に考えたらフェニックスメダルが装着されているかもしれない。

イツキは背部の歪な形になったメダル装着部のハッチを開き、メダルが装着されているか確認した。想像どおり、フェニックスメダルが装着されていた。しかも、メダルは一段階進化していた。

イツキたちは下山した。途中、他の人や管理事務所のおじさんにとがめられたら、調子に乗ってはしゃいでいたら、樹などに体を打ち付けて機能停止したと誤魔化した。

5 おどろ山探索記 (打ち捨てられた者) (後書き)

ティンペットとメダル入手方法に、入手メダルが原作と異なります。次回から、ゲーム本編でも活躍するあの二人と二機が初登場します。

また、スカートめくり事件は何らかの形で挿入したいと考えています。

6 おどろ山探索記二（少年と少女）

イツキたちが下山してから一時間経ったあとのこと。

管理人の男性が山の様子を見に行こうとしたら、女の子が助けを求めて事務所に駆け寄ってくる。

「君、どうしたのかね!? 君?」

管理人は少女に声をかけた。少女は涙ぐんで管理人の傍まで寄り、いじらしげに顔を上げた。管理人の男性は目を見張った。ピンクの洋服シャツを着た少女は一言で表せば、美しい。程よく丸みを帯びた顔立ちに、ふんわりと柔らかいオレンジがかったツインテールの金髪、少女漫画のように澄んで潤んだエメラルド色の瞳。そして、全身から漂う儂げな雰囲気、管理人に少女を守ってあげなければという気持ちを湧き起こさせた。管理人はガラス細工でも持つような手付きで、少女の肩に優しく手をかけた。

「もう大丈夫。ここは安全だ」

「本当ですか?」

両手を握り締め、ゆっくりと潤んだ瞳で見上げる動作がまた可愛らしい。

「ああ、おじさんは嘘をつかない。ところで、君の名前は?そして、一体何があつて助けを叫んだのかい?」

「…ナースちゃんが…。ナースちゃんが…連れ去られちゃったんです」

「ナースちゃん?」

管理人がオウム返しに聞くと、少女はメダロットですと答えた。

「君はそのとき、謎の声とか変な物を目撃したかい?」

「いえ、変な物は見当たりませんが、変な声なら…。少し、落ち着きを取り戻したましたから、詳しくお話ができそうです」

「そうか。では一旦、中で座って落ち着いてからにしよう」

管理人は事務所の中に少女を招き、椅子を差し出した。事務所内

は小型の液晶テレビや小型冷蔵庫、他、里山のパンフレットに本など幾つか細々とした物が置かれていた。

「さ、あまり綺麗なところではないが。ひとまず、座りなさい」

「ありがとうございます」

少女は丁寧に謝辞を述べて着席した。その座る動作からして、管理人に少女が深窓生まれの者と悟らせた。

少女は順を追って、自己紹介とここに駆け付けた経緯を話した。

「私の性は純米、名はカリンと申します。御神籤町のお隣のメダロポリスに暮らしています。ここにきたのは、以前から一人で山に登るといっものはどんなものか知りたくて、この近隣のおどろ山に来ました。山の中腹地点近くまで下山したとき、がさごそと、茂みから物音が聞こえました。ナースちゃんが茂みの裏の様子を見に行くと、ナースちゃんが悲鳴を上げたんです！私、急いでナースちゃんの身を確認しようとしたら、突然、この世の物とは思えない声で『置いてけ…。森を汚す機械を置いてかなければ…お前の魂を喰らう…』と言われました。…でも…ナースちゃんは私の友達です。私は勇気を出して茂みの裏を覗くと、そこにはナースちゃんの姿がありませんでした。もしたら、今度は同じ声で不気味な笑い声が出たもので…。私…」

カリンという少女はまた涙ぐんだ。管理人はせかさず、少女が自ら話を再開するのを待った。少女は震える手でハンカチで涙を拭くと、小さく咳払いした。

「…こほん。すみません。…私、怖くてナースちゃんを置いて逃げてしまったのです…」

カリン少女はそこで言葉を切った。色々詳しく聞きたいが、一つ言えることは、幽霊騒動における新たな被害者が出た。

今日もまた、イツキ、アリカ、メタビー、ブラスの四人はおどろ

山に向かった。拾ったメダロットは昨日、帰りにメダロット研究所に立ち寄り、事情を話すと、メダロット博士はあのメダロットの修復を快諾してくれた。

「ティンペットまで傷ついておるのう。わしも忙しいからな…。そんな不安そうな顔するな。今日の夜にはちゃんと終わらせておくから、日を改めて迎えにきなさい」

明日か。今になってイツキは少々不安になった。両親の前に、あのメダロットが僕を受け入れてくれるかどうかが問題だ。だが、引き下がる気はない。こうなった以上、何としてでも彼、彼女を迎え入れたい。ただの偽善かもしれないけど…。

「イツキ、どうして落ち込んでいるの？」

アリカが心配そうに僕の顔を覗いていた。自分でも気付かないうちに、顔を下に向けていたようだ。

「何でもないよ」

「あのメダロットのことでしょう」

イツキは思わず背筋を伸ばした。それを見て、アリカはやっぱりと言った。

「今更、悩んだところでしょうがないでしょう。あんた一人で説得が無理なら、私も拾うのを協力したちゃったし。いざというときは、それなりに手伝ってあげる」

アリカのこういう積極的な面はときとして疎ましくも思うが、こういうときには頼り甲斐がある。ただ、今回のことは自分が撒いた火種。イツキは出来る限りアリカの手を借りないよう心がけた。

四人はおどろ山まで来て、いざ入山しようとしたら、管理事務所のおじさんに止められた。

「駄目駄目。せめて、大人の人も連れてきなさい」

「昨日までは入って良かったのに、どうして!？」

「そうだ、そうだ!それに、幽霊なんざ俺がとっちめてやらあ!」
アリカとメタビーがおじさんに聞いた。

「いやな。実は昨日、小学生ぐらいの女の子が被害に遭ったんだ。

昼間から幽霊なんて出やしないだろうが、安全の為、ゴールデンウイークいっぱいまでは高校生以下は保護者同伴じゃなきゃ入れないことになった。というわけで、今度から保護者と一緒に来てくれ」

イツキはアリカが噛み付くと思ったが、意外にもアリカは大人しく引き下がった。おじさん一安心していたが、イツキは絶対にアリカはこの程度のことじゃ諦めないことが分かっていた。イツキはアリカに連れていかれるまま、おどろ山周囲を歩いた。アリカが足を止めた。入山口から二キロ離れたところ、見回りの人もいなくて、辺りに人家もなく人気が無い。フェンスはよく見かける緑色のもので、上に沢山の棘が付いた鉄条網も巻かれていない。

イツキはアリカにおずおずと尋ねた。

「アリカ、まさかだけど、ここから入山する気？」

アリカは満面の笑みで答えた。

「ええ、そうよ」

「アリカちゃん、それはしていけないことじゃ……」

ブラスはアリカを止めようとしたが、アリカはもうブラスの言葉にすら耳を傾けなかった。

「ジャーナリストたる者、この程度のことでも根を上げてちゃやってられないわ。仮に見つかっても、まだ子供だから、小一時間お説教されるだけで済むわ」

「…僕は根を上げてほしい……」

「…俺もそう思う……」メタビーはイツキに同意した。

「イツキとメタビーは来なくていいわ。これは、私一人の問題だから」

アリカはそう言って、フェンスを越えた。

「しょうがないわね」

ブラスはまるでわがままな妹に手を焼くお姉さんのようだ。ブラスも遅れてアリカの後を追った。

「どうする、イツキ？あの二人を追うか？」

「…うん、行こうと思う。アリカには昨日の恩があるし、それにブ

ラスだけだと、幽霊たちに襲われたとき対処できそうにないし」

イツキとメタビーも、仕方なしにフェンスを越えての入山をした。しばらく山を登ると、何とスクリューズと出くわした。スクリューズの三人は血相を変えていた。スクリューズが口を開く前に、アリカがいち早く喋った。

「ちよつと！あなたたちが何で山にいるわけ！」

「それはあたいらの台詞だよ」

キクヒメはポケットから櫛を出して乱れた髪を整えた。スクリューズとそのメダロットの様子はおかしかった。イワノイ、カガミヤマは自身の愛機のブルースドッグと鋼太夫を背に抱き、キクヒメの愛機、セリーニヤはぼろぼろだった。

「一体何があつたの。ていうか、あんたら何の目的があつてここに来たの」

「だから、それはあたいらの台詞だつて言ってるでしょ」

イワノイが口を挟んだ。

「姉御、無駄話している暇ありやせんぜ。あいつが来るかもしれませんが」

「あいつ？」

「お前らー！」

そのあいつが高らかに叫んでスクリューズを追いかけてきた。キラリとしたきつく歪められた意志の強そうな二重の瞳と、端正な顔立ちにヒカルとよく似た髪型をしたイツキたちと同じ年ぐらいのその少年は、怒りも露わにスクリューズを睨んだ。少年の後ろには、メダロットが控えていた。

「あれは……！！」

イツキ、アリカは目を奪われた。名も知らぬ少年のメダロットは、サーベルタイガー型メダロットのスミロドナッドだった。昨年、改良型メタルビートルと同時期に発売された格闘タイプのメダロット。装甲、戦闘能力のバランスが取れており、パーツ一式だけでも現在の最低市場価格で十五万円、メタルビートルの三倍もする。セレブ

ご用達と言つても過言ではない超高級品。その分、扱いが難しく、
玄人向けのメダロットでもある。

「イツキは思い切つて少年に聞いてみた。」

「その、まさか。それ一体だけでこの三人を…？」

「何だお前は」

高飛車な物言いにむかつときたが、イツキは名乗り上げた。

「僕、天領イツキ。ギンジョウ小学校の三年生。で、隣に居るのは
メタビー。…えっと、それで君…は、こいつらに何をされて怒つた
の？」

「イツキといったな。ひよつとして、こいつらの関係者が親玉か？」

「僕がこいつらの親玉？」

「お前ら！さつきから、俺らのことをこいつら、こいつら呼ばわり
しやがつて！俺ら、泣く子も黙るスクリューズっていうんだぞ」

イワノイが呼び捨てに耐えられず、横槍を入れた。二人とも、イ
ワノイは無視して話を進めた。

「で、君はスクリューズに何かされたの？」

謎の少年は、じつとスクリューズとイツキたちの様子を見た。そ
して、少なくともイツキたちとスクリューズとやらは、そこまでの
仲ではないことだけは理解した。

「コウジさーん！」

また、誰かがこちらに来た。

「またくるの？」

アリカはいい加減にしろという感じで言った。イツキもまたかと思
つたが、その誰かが視界に入った途端、その思考は彼方へと消え
た。ピンク色のシルクの洋シャツを着た、オレンジがかつた金髪ツ
インテールの美少女が、謎の少年のものとかわしき名を呼びながら、
一触即発のこの場に来た。

「カリン！しまった。頭に熱が上つて、君を置いて行ってしまうな
んて…何たる失態！」

コウジという少年は自分の失敗を悔やむように拳を握った。少年

の後ろに控えるメダロットが、初めて口を開いた。

「コウジ、私もカリンのことをすっかり忘れてたから、お互い様だ。次からは、互いに注意しような」

「…ラムタム…」

若干、わざとらしさを感じると展開と会話のおかげで、四人は少年がコウジという名前、彼の愛機の名がアーチエ、そして、カリンという美少女がコウジという少年の関係者だということを知った。

アリカは問い詰めるようにキクヒメに視線を据えた。

「キクヒメ。ひよっとして、あんたたちあの女の子にまた卑怯な勝負を挑んで、彼を怒らせたんでしょ」

「やっぱりそうなのか！」

荒ぶるコウジ少年。コウジ少年に同調するように、ラムタムというスミロドナツドも右腕の鉤爪状のソードをスクリューズに向けた。キクヒメは観念して、両手を上げてぶらぶらと動かし、降参の意を示した。

「わーった、わーった。こっちの負け。理由も話すから、それで勘弁」

コウジは荒ぶる気持ちを抑え、スミロドナツドも剣を収めた。だが、いつでも抜刀できる姿勢を崩さなかった。

スクリューズの話搔い摘むと、三人は幽霊騒動におけるパーツの隠し場所を探しにきた。正義のためとかではなく、あくまで自分たちの物にするためである。そして、コウジとカリンの二人に出会った。互いに何があつてここに来たか聞きあい、だんまりを決めて行こうとしたら、コウジが聞こえよがしに下らないと言ったのが癪に障り、勝負を挑んだら返り討ちに遭った。

「イツキもそうだが、アリカにコウジも心底呆れかえっていた。メタビーも、お手上げという風に両手を広げた。」

「挑まれた勝負は受けて立つ！それ以上に、俺はそいつらの火事場泥棒のような行為が許せねえ」

「そんなに叫ばないでよ。もう懲りたから、これで勘弁」

「待て。そのリーダー機のペッカーキャットはまだ機能停止してないぞ」

キクヒメは困ったように頬を掻いた。そして、イツキを見て怪しげにほくそ笑み、イワノイ、カガミヤマに視線を送り、二人は無言で了解した。

「あーっ!!!後ろー!!!」

三人は同時に叫び、コウジとカリンの後ろを指した。思わず、スクリューズ以外の者は振り返ってしまった。気付いたときには遅し、スクリューズの三人はメダロットのパーツを自宅へメダロットに収納にし、とんずらをこいていた。

「じゃ、後は任せませいイツキ」

キクヒメの捨て台詞が虚空に響く。イツキ、アリカ、ブラスは肩を落としたが、コウジとラムタムはその気のような。二人はイツキとメタビーににじり寄る。

「俺はどつちでも構わない。イツキといったな。お前がやる気なら、俺は受けて立つぜ。安心しろ。さっきの奴らには援護役としてももう一機も戦わせたが、お前との戦いでは、このラムタム一機だけだ」

「お前がその気なら、俺は受けて立つぜ！」

イツキが断ろうとしたら、今度はメタビーが自ら戦いを申し出た。メタビーの性格をかんがみれば、この挑戦も致し方ない。それに、援護役を付けたとはいえ、スクリューズ三人三機を二機で追い返したほどの相手だ。やる気満々のメタビーに対し、ラムタムはどこ吹く風だ。

今日は何となく嫌な予感がしていたが、その予感は当たっていた。しょうがない。一度乗りかかった船だ。やるだけやってみるか…。

「コウジさん」

展開についていけないカリン少女はコウジを止めようとしたが、コウジは「カリン、大丈夫。俺は負ける気はないから」とカリンの制止を先に止めた。

「はいはい!私、審判やる」

審判役を買って出たアリカは、いきなりロボットルファイトと言った。イツキは吹っ切れた。

ええい、ままよ！もう、やけくそだあ！矢でも幽霊でもなんでもこい！

ばばばばば！

メタビーはサブマシンガンを発射。が、いとも容易くスミロドナツドは避けた。実力には差があることは分かっていたが、こうまで開きがあるとは思わなかった。メタビーは撃ちまくるが、やはり当たらない。

コウジが指示を出し、スミロドナツドのラムタムは左腕のストロークハンマーでメタビーの右腕をへし折った。早くも形成不利。メタビーもやられっ放しではなく、ラムタムのハンマー攻撃のあと、一発だけ左足に当てることができたが、ダメージの値に差がある。

扱いが難しいスミロドナツドのパーツを使いこなさせているのだから、コウジのメダロットとしての腕前は本物だ。

「ラムタム！樹の後ろに隠れろ」

何か狙っている。だが、メタビーは慎重に行けという指示を無視し、回り込んで右腕のリボルバーで攻撃した。ぼん！と、メタビーの右腕が吹き飛ぶ。

「痛っあー！」メタビーが右腕をさする。

「しまった！スミロドナツドの頭部は対射撃トラップだった」

「んだとあ！？最初から気付けよ、イツキ！」

メタビーとイツキが口論している隙を見逃すはずもなく。ラムタムはメタビーの背後をソードで叩き切った。酷いダメージを受けたということとは、音で分かる。

メタビーは壊れた右腕を振るい、マシンガンをかむしゃらに発射にする。

コウジが余裕そうに呟く。

「へえ。今の一撃でも動けるとは、致命傷だけは避けたようだね」
姿を消したらトラップ。姿が見えなくても攻撃は当たらず、思ったときに攻撃される。こうなれば、危険だけどあの手を使うしか。でも、あれはメタビーを傷付けることになる。イツキが迷っていると、メダロツチにメッセージが送られた。

あの猫と戦ったときの手を使え。

イツキは決意した。メタビーはラムタムに背を向けた。

「試合放棄かい？」

「試合は続行だ！」

ラムタムの右腕の凶刃がメタビーに襲い掛かる。速度からして、避けれる術もない。瞬間、メタビーは足元に反応弾を発射した。コウジも、飛びかかったラムタムもこれにはたまげた。

「ごつちーん！！と痛烈な響き。メタビーとラムタムは、仰向けに倒れた。引き分けかと思いきや、メタビーの手足が微かに動く。一方、ラムタムは無反応だ。

「なんて無茶な戦い方を……」

驚く二人にお構いなく、アリカはイツキとメタビーの勝利を告げる。

「イツキ、メタビーおめでとう！にしても。あんたら、懲りずにまたその戦い方？」

イツキはぽつり、ぽつりと語った。

「……うん、よくない戦い方だつてのは承知している。今後は、よっぽどのが無い限り、こんな無茶な手は使わない。何より、メタビーがこれ以上、無駄に傷付く姿を見たくないし……」

「お取込み中悪いが、これを受け取ってくれ」

冷静さを取り戻したコウジが、イツキにスミロドナツドの右腕を差し出した。

「形はどうあれ、君は俺に勝った。真剣ロボットの決まりとして、俺は君にこのパーツを渡したい」

「えっ？いいの？今の別に真剣ロボットしたと決めたわけでもないし」

「いいんだ。この分だと、君らのはあの三人と無関係のようだし。迷惑料も兼ねてだ。さあ、受け取ってくれたまえ」

直接戦ったのはメタビーのほうだし、やると言い出したのもメタビー。つまり、メタビーの取り分である物を自分が断るのは、コウジにもメタビーに対しても失礼だと思い、イツキはパーツを受け取ることにした。

アリカがコウジ、カリンに聞こえるようイツキに耳打ちする。

「熱い友情の最中悪いけど。人がきそうよ」

全員、耳をそばだてた。

「ここいらだな？銃の音とかが聞こえた場所は」

「ああ。多分、どつかの馬鹿がロボットでもしているのかもしれない」

四人は顔を見合わせて、イツキとアリカはメタビーを。コウジとカリンはラムタムを抱え、二手に別れた。

「コウジ君と言ったわね。機会があれば、合流しましょ。私、修復系パーツを一つ持っているから」

「何故？」

「あなたたちの目的も幽霊でしょ。だから、情報交換も兼ねて、ね」
コウジとカリンはその場から去った。何も言わなかったが、アリカは親指と人差し指で丸を作り、「片目瞑ってオーケーって返事した。おきざなこと」と言った。そういえば、慌てていたので、まだスミロドナツドのパーツを貰っていなかったな。

6 おどろ山探索記二（少年と少女）（後書き）

ようやく、カリンとコウジ登場。バージョンが違うので、ウォーバニットの出番はなし。話の都合上、カリンの愛機であるセントナーズの出番も無しです。

何というか、今のところ、話の筋はどちらも似たり寄ったりの状態なので。どちらか先に出来上がったら、必然的にそちらのほうが読者が多くなってしまう。

というわけで、いつもはクワガタバージョンが先でしたが、次話からは試しにカブトバージョンから先に投稿します。

7 おどろ山探察記三(謎の集団)(前書き)

一話でまとめるためとはいえ、とんでもない文字数になってしまっ
た。

誤字脱字が目立つかもしれません。

7・おどろ山探索記三（謎の集団）

イツキたちはどうにか山頂まで着いた。おどろ山は緩やかな傾斜だから、子供の足でも普通に登る分にはあまりきつくない。だが、見つかりと面倒なので、急ぎ足で登ったイツキたちは汗だくで肩で息をしていた。少し遅れて、コウジ、カリンも到着した。

全員、人に見えず、尚且つシートが無くても座れる木陰がある場所を選んだ。コウジが腰のベルトに付けたストラップ型の水筒入れに入れたペットボトルを取り出し、一口飲んでから、用件を切り出した。

「アリカと言ったな。さっきの約束どおり、情報交換だ。あと、イツキ」

「うん？」

見ると、コウジがラムタムの右腕を差し出した。

「さっき渡せなかったから、今この場で受け取ってくれ」

イツキはこくりと頷き、ありがたくラムタムの右腕を戴いた。陽に当たるメタビーが、やっぱりいと嬉しそうに指を鳴らした。

「ねえ、コウジくんと言ったわね？修復はしなくていいの？」

アリカがさっきの約束の件を聞くと、コウジはスミロドナツのラムタムを転送した。ラムタムは、ほぼ無傷な形でそこに立っていた。

「回復パーツ…じゃなくて、予備のパーツも持っているとか？」

「ああ、そのとおりだ。二セット予備がある」

「じゃ、計三セット！」

イツキとアリカはずっこけそうになった。超高価なスミロドナツのパーツを持っている時点でコウジが金持ちだということは分かったが、予備の一式が二セットもあるとはかなりのぼんぼんと考えられる。

カリンは以前から一人で野山に出かけてみたかった。愛機の看護師型メダロットのセントナースをお供に近郊のおどろ山に向かい、例の幽霊と思しき者にナースが連れ去られた。コウジは連れ去られたナースの心配もしたが、それ以上にカリンを怖がらせた者に怒り、カリンもナースを連れ戻したい一心で山に向かった。しかし、子供だけの入山は事務所のおじさんに止められてしまい、仕方なく裏側のフェンスを越えて入山した。そして、ことは前回起きた顛末にまで繋がる。

一方、イツキとアリカから話せることは特になく。ニユースなどで既に語られているようなものばかりで、コウジはやや不満気だった。

「お前たちの情報はそれだけか。それなら、昨日、ネットで調べた情報とあんまり変わらないな」

「ごめんね。一方的に話させちゃっただけみたいね」
アリカが珍しく詫びた。

探索は振り出しに戻り、一同、落胆したとき。機械じみた声が聞こえた。

「ヤナギー！ヤナギー！ドコにイルのー？いるなら、カンちゃんもイルからお返事してちょうだい！」

四人と三機は隠れて様子を窺った。色んなパーツを付け合せた飛行メダロットが、「ヤナギ」という人物へ懸命に呼びかけていた。そのメダロットの近くには、「カンちゃん」と思しき腰の曲がった老婆がいた。

四人と二機は小声で会話した。

「お子様でしょうか？お孫様でしょうか？」とカリン。

「男にも聞こえるけど、女に聞こえないこともない」とイツキ。

「試しに聞いてみる？」とアリカ。

「子供だけで来ていること突っ込まれるかもしれないから、もう少

し様子を見てからのほうがいい」とコウジ。

「誰かしらねえ？」

プラスにいきなり話を振られて、ラムタムは首を捻るしかなかった。隠れて様子を見るといいう暗黙の了解の中、一人、堂々と姿を現すお馬鹿がいた。

「えーと…。その空飛んでる奴と、そのばあさん。ヤナギって誰？」

「メタビー！」

イツキは思わずメタビーの名を叫んでしまった。

コウジは溜め息を吐き、アリカは手の平で顔を押さえ、カリンはきよとんとした表情。

「…まあ。いずれ、姿を見せるつもりだったし」

アリカはそう言っ、姿を見せた。

「カリン、ラムタム、行こう」

アリカに続くように、コウジ、カリン、ラムタムも白日の下に身をさらした。

イツキは言葉にできず、申し訳なさそうにうつむいた。一方、当のメダロットとおばあさんは驚きを隠せないようだった。

「あれまあ！お前さんたち、今は子供だけで山に入っちゃあかんぞ」

コウジの言ったとおり、おばあさんそのことを指摘した。

「おばあさん。私、友達を連れ戻しにきたんです」

「何！？どういうことぞな」

イツキ、アリカがどう言い訳しようか思考していたら、カリンが正直に事を話した。

「ふむふむ。なるほど、なるほど。お友達のメダロットを助けるために来たとな」

「一つ聞いてもよろしいでしょうか？おばあさん」

「娘さんや。私を呼ぶときは、できればカンちゃんと呼んでおくれ」

「分かりました。では、カンちゃんさん。先ほど、そのメダロットさんがヤナギという方を捜しておられました、ヤナギとはどなた

ですか？」

カリンの質問に、カンちゃんというおばあさんにメダロットも押し黙った。

「すみません……。聞き入ったことをお尋ねしまつて」

「……いや……。いいんさ。どうやら、娘さんとそのお友達がここに来た動機と私の動機は同じようだし。役に立つどうか分からんが、お前さんたち、一つこの老婆の話を聞いてくれないかい？」

カリン以外の者は顔を見合わせて同意し、このカンちゃんという人の話を聞くことにした。カンちゃんばあさんはビニール製のシートを敷き、座るよう促した。

「あ、どうも」と、人もメダロットも一礼を述べてからシートに座った。正座をすると、カンちゃんは「あー、かめへん、かめへん。足伸ばすなり、股広げるなりかまへん」と、自ら正座を崩した。それに倣ってカリン以外の者は皆、楽な姿勢を取った。

「ほれ、飲みんさい」

カンちゃんには全員に冷たい麦茶を配った。冷たい麦茶は不安と一緒に喉の奥まで流れ込んだ。子供たちの気持ちが悪くなった頃を見計らい、カンちゃんは語り出した。

ここでは、カンちゃんの語りを要約する。カンちゃんはメダロットたちと一緒に暮らしているが、どこかで孤独を感じている。だから、偶然とはいえ久しぶりにじっくりと人と話せることが嬉しくて、本題とは無関係なことまで話してしまう。正直で純なカリンは喜んで耳を傾けたが、それ以外の者は、ためらいがちに語りを本題へ戻すように言った。

カンちゃんにはナツコという孫娘がいる。ナツコは高校生のときに両親が他界し、祖母であるカンちゃんが引き取った。

多感な時期に両親を亡くし、ナツコは度々苛立ちを周囲にぶつけ、よくトラブルを起こした。そんなナツコを支えたのがカンちゃん以外にもう一人いた。それが、機体名称がミスティゴーストという幽霊型メダロットのヤナギ。カンちゃんとヤナギの支えもあり、ナツ

コは頑張つて大学に進学し、一流のキャリアウーマンとして成長した。

そのナツコが長期海外転勤して二日経った日のこと。ヤナギが忽然と姿を消した。それから程なくして、巷で話題の幽霊騒動を耳にした。カンちゃんは悪い予感がして、毎日拾った野良メダロットたちに搜索させて、自身も週に三日、おどろ山へと足を運んだ。

「ヤナギは間違つてもこんなことをする子じゃないよ。ヤナギもきつと、どっかの幽霊だかを使った奴らに去らわれたに違いない」

カンちゃんはヤナギも被害に遭ったに違いないと言っていたが、反面、ヤナギが一枚絡んでいるのではないかという不安も読み取れた。

イツキたちは小半時ほど雑談したのち、カンちゃんたちと別れた。意外なところで有力な情報を得た。最初の被害者、あるいは、ヤナギというメダロットが加害者の可能性がある。

おばあさんが警察に連絡しないのは、どちらか判別しかねているからだろう。メタビーはそんなカンちゃんを気遣った。

「あのおばあさんの年齢だと。山登りもきついだろうし、精神的にも負担は大きいだろうな」

「はい、注目！」

アリカが先頭に躍り出た。

「何だよ、アリカ？」

イツキがアリカの意図を聞いた。

「あのさあ、私の推測を聞いてほしいんだけど」

「時間の無駄にならないか」

情報交換の件を気にしているのか。コウジの腕を組んだ態度から、アリカの推測を拒んでいることが知れた。

「そう言わないでコウジくん。拝聴の価値はあると思うわ」

イツキやコウジに有無を言わず、アリカはまくしたてるように推測を並べた。

「いい、第一の犯行から昨日の犯行まで、全ておどろ池とそこに通じる道でおきたわ」

「だから、そこに行こうと…」

「イツキは黙ってて。あと、コウジくんも。そこで、私思ったんだけど、もうおどろ池とその周辺では幽霊は出ないと思うの」

「何故ですか？」

カリンの質問に、アリカはグッドタイミングな突っ込みと言わんばかりににやついた。

「単純なこと。犯行現場として、おどろ池は目立ち過ぎるからよ。

本当の幽霊ならどうしようもないけど、人が関わっていたとしたら話は別。私が犯人なら、昨日のカリンちゃんを目途に移動するわ」

「じゃあ、ナスちゃんは…もう…」

「気を落とさないで。おどろ池周辺での犯行はカリンちゃんが最後であって、おどろ山での犯行は後一回か二回ぐらいする可能性がある。考えられる場所はおどろ沼よ。山頂もありうるけど、あそこだとあまりにも人の出入りが多い上に、見晴らしもいいから実行するにはリスクが大きい場所。でも、湿地帯であまり人が寄り付かないおどろ沼は別。あの周辺で犯行はまだ起きていないし、それに、来るとしたら物好きな子供や昆虫採集とかを目的にした人だけだと思う。あくまで推論だけど、犯人は後一回か二回、おどろ沼の周辺で犯行に及ぶかもしれない。あと、市場で強奪されたメダロットが出回っていないところを見ると、犯人はある程度まとまってからどこかに売りさばくつもりかも」

名探偵気取りのジャーナリストアリカの推論に、イツキ、コウジ、カリンは納得した。

「あくまで推測の域を出ていないが、理に適っているな。それにしても、よくそこまで考えられるもんだ」

「そりゃー、こう見えてもジャーナリストの端くれよ。良い記事を

書くには、一定の想像力も必要よ」

コウジの言葉にアリカはちよつと得意気だ。

「では、これからどうするのですか？」

「ええと、まずはおどろ池に行つて軽く証拠探し。そのあと、夕方までおどろ沼に張り込みましょう」

「ちよつと待てつてばよ！」

メタビーがいきなり叫んだ。

「ひよつとして、俺らが囷になるといふことか。この流れだと」

ブラス、メタビー、ラムタムに見つめられて、アリカはこくと首を折つた。ブラス、コウジ、ラムタムは渋々ながら同意した。メタビーもイツキ、アリカ、カリンの三人に説得されて、ようやく囷になることに同意した。

「そう怒らないでよ。危険な目に遭うのは私たちも同じなんだし」

コウジは不安そうだ。

「これで奪われたりでもしたら、ご近所どころか末代までの恥だな」
イツキも同じことを言いたかつた。子供だけで上手くいくどうか丸つきり自信が無いし、仮にパーツとティンペツトを奪われて、しかも子供禁制のときに勝手に入山したことがばれたら、どんな大目玉を食らうか予想できない。

人目を避けておどろ池へ行き、その後、おどろ沼へと向かつた。

おどろ池は山の中腹地点の右のほう。おどろ沼は、中腹地点より百メートル登り、左に曲がつて少し登り、まっすぐにきつめの傾斜を降りたところにおどろ沼がある。おどろ沼へ向かおうとした途中、山伏ご一行のメダロットにあやうく姿を見られそうになったときは、生きた心地がしなかつた。

おどろ池と違い、おどろ沼は整備が行き届いていない。あつちこつちに草が生えて、手付かずな自然の状態。そのおかげで、おどろ

沼と周辺の湿地帯にはトンボにカエル、ゲンゴロウ、タガメなど、数を減らした水生生物が生息しているから、たまに訪れる人がいる。アリカの推測を頼りにここで張ったが、夕方の五時以降になっても現れない。皆、早く出ないかと待ちくたびれていた。

これなら、家でのんびりゲームでもしていたほうが良かったかな。イツキは陽が沈む西の方角を見た。見たところで何も起きないが、他にやることがないから見た。うん、今日も夕陽は綺麗だな。そう思って夕陽を眺めていたら、黒い一点が夕陽に浮かんだ。鳥か目の錯覚かなと思っただが、黒い点は明らかにこちらのほうへとやってくる。

だんだんと距離が縮まり、黒い物体の正体が判明した。

メダロットだった。イツキはそれに見覚えがあるような気がした。イツキの異変に気づき、近くのメタビー、アリカも西の方角を見上げた。

「あれ…昼間あつたばあさんのメダロットじゃねえか！」

そうだった。樹上の枝葉が邪魔をして見えにくいのが、あのメダロットは昼間会ったカンちゃんというおばあさんのメダロットだ。ヤナギというメダロットを捜しにきたのかな？その割には、様子がおかしいようにも思える。

「人のこと言えないけど、何でこんな時間帯に飛んでいるのかな？ちよつと、一声かけてみようか」

イツキ、アリカ、メタビーは、あらん限りの大声で叫んだ。声は彼の耳に届き、彼はすーっと、沼の近くまで降りてきた。

「何でこんなところまで飛んできたの！？ヤナギとかいうメダロット捜しにきたの？」

イツキが彼に尋ねると、彼は首を振り、子供のような涙声で危機を伝えた。

「うっ…。あのね…幽霊が…幽霊がね…僕ら…僕らというのは、僕と同じカンちゃんに拾われた仲間のこと……」

「それで、君の仲間がどうしたの！？」

イツキは先を話すよう促した。

「…うん。それでね…幽霊たちがね、僕らとカンちゃんを襲って、仲間を連れ去っちゃったんだ…。僕は何とか助かって、急いで救いを求めたんだけど。君たちに声をかけられて、方向を間違ったことに気が付いたんだ…」

わーん！と、彼は堰を切ったように泣き出した。

「落ち着いて！君の来た方向は西だよ！じゃあ、ここを真っ直ぐ降りれば、カンちゃんの居るところに行けるの」

「ひつく、ひつく…。うん、そうだよ。…でも、酷い悪路だから人の足だと最低三十分もかかるし、僕一人じゃ、とてもじゃないけど君ら全員を運べないよ」

三十分。とてもじゃないが、間に合わない。かといって、このまま見捨てることもできない。コウジ、カリン、ブラス、ラムタムが彼らのとこまで寄り、コウジが良い提案があると言った。

「イツキ、アリカ。飛行パーツは持っているか？」

アリカは女性型の一つあると答え、イツキは無いと答えた。

「そうか。なら、イツキには俺の飛行パーツを貸してやる。そして、えーっと。君の名前は？」

彼は「タロウ」と名乗った。

「よし、そうと決まりや善は急げ！まず、カリンはラムタムに乗る。それで、アリカはブラスにイツキはメタビーに乗って、俺はタロウに乗る。ちょうどメダロットが四体もいるわけだし、その四体で一人ずつ運べばすぐに着ける」

そうして、彼らは細かいことは一切言わず。すぐに準備を整えた。怖いと言っている暇はない、イツキは覚悟してメタビーの背に乗った。

案内人として最初にコウジとタロウが飛び立ち、次にアリカとブラス、イツキとメタビー、最後にカリンとラムタムが飛び立った。カリンが最後なのは、スカートを履いているためだから。

三十分もかかるところを、五分程度で目的地に到着した。タロウ

がおどろ沼に来るまでの時間、会話と準備時間によるロスタイムを差し引いても、十三分。犯人がいる場合、まだそんなに遠くには行っていないはず。

樹に囲まれた平らな土地に立つ二階建ての古風な民家に降り立ち、四人と四体はカンちゃんの名を呼んだが、返事が無い。

「もしかしたら、連れ去られたメダロットたちを追いかけたのかも！」

アリカはすぐにプラスの背に飛び乗った。

再び、彼らは上空を行く。

「カンちゃんの声が聞こえる！」

先頭を飛ぶタロウが下降した。森の中を、カンちゃんらしき人がさらわれたメダロットたちの名前を懸命に呼んでいた。四体は乗った人間が枝で傷付かぬよう降り立ち、四人と四体はカンちゃんの後を追った。

時を同じくして、イツキたちとはまた別に、連れ去られたメダロットの救出を試みる者がいた。その者は現在では使われなくなった廃工場にメダロットが保管されていることを知った。廃工場の中をこそこそと怪しげな者たちが入りし、メダロット運搬の準備を計っていた。

物陰から、謎の集団の動きを観察するその者のメダロットに文章が送信された。

K少年とその友達たちが、集団と交戦する可能性有。

その者は困った。自分はこの持ち場を担当するだけで手一杯。しかし、監視役メダロット一体だけではどうにもならない。そこでその者は、ある人物に連絡した。

「ほい、もしもし。わしじゃ」

陽気なしわがれ声を聴くだけで、その者の緊張感がほぐれた。そ

の者は手短に監視役メダロットの電文を伝えた。

「分かった。お前さんはそのまま任務にあたれ。わしは、彼が拾ったあやつを救援にあてる」

電話先の人物は極秘の特別回線を切り、早速、隣部屋にいるメダロットを訪ねた。

「ご機嫌はいかがじゃ？」

「ええ、特に異常はないです。メダロット博士」

彼はメダロット博士に会釈した。そのメダロットは昨日、イッキがおどろ池周辺で拾った不死鳥型メダロットのデスフェニックスこと、きんえもん金衛門。金衛門という名は、修復中に彼自らがその名を告げた。今は故人となつた前マスターから賜わつた名前らしい。

彼は誰かに拾われることを望んだ。だが、こうして再び起動してみると、心は喜びよりも、喉に物が詰まったような正体不明のえも言われぬものが覆つた。果たして、本当にまた人を抛り所にしていいのだろうか。それよりも、上手くやっていけるだろうか。

そんな彼の気持ちなどお構いなしに、メダロット博士は至急、金衛門に地図で示した地点へ行くよう指示した。金衛門は訳を尋ねたが、肝心のところははぐらかされてしまう。

「わしが何故知っているかよりも、君の新たな友達となる少年が窮地に陥るかもしれんのじゃ。君自身の整理がついてないときに悪いが、今は黙って彼とその友達を救うほうが先決じゃ」

金衛門はいざというときには明白をつけられる性格だった。引つ掛かるところはあるが、金衛門は新たなマスターとなりうるイツキ少年を救いに行くとした。

飛び立つ直前、メダロット博士はある物を金衛門に渡した。

「こんな物を使って問題にならないのですか」という金衛門の問いに、メダロット博士は笑顔で返した。「大丈夫！しかるべきところには話を通しておる。きつと、これが役に立つはずじゃ。さあ、行ってきたまえ！」

首にある物を巻くと、金衛門は迷い振り切るように夕暮れへと向

かってひとつ飛びした。

イツキたちはすぐにカンちゃんに追いつき、タロウにカンちゃんを任せて、イツキたちは前に行く者たちを追いかけた。

「あれって、どうみても幽霊じゃないじゃん！」

前に行くのは、白い金魚鉢のような形をしたヘルメットを被り、同色のスーツを着込む四人組と、黒いゴムスーツを着た二本の黄色い角を生やした大柄な者が、メダロットたちと一緒にカンちゃんのメダロットを抱えて走っていた。

「こらー！あんらた待ちなさい！」

アリカの叫びに謎の集団は振り返り、金魚鉢頭の一人が声を出した。

「ロボ！？ババアが若返ったロボ！？」

「くおらあ！誰がババアよ！！」

「ひえっ！おっかないロボよ」

「ていうか、お前ら何者なんだ！？」

コウジの指摘に、二本の角を生やした黒いゴムスーツを着た大柄な者が立ち止った。

「全く…何故にわしの嫌いな子供がこんなにおるのだ」

金魚鉢四人も立ち止り、イツキたちと対峙した。大柄な男が口を開いた。

「ふん、どうせ今日でこんな寂れた場所とおさらばするし。最後の手土産にガキ共のメダロットを奪うのもよからう」

アリカは集団のリーダーらしき男に食ってかかった。

「あんたらが幽霊騒動の犯人なの！」

「ふおふお。威勢のいい小娘じゃ。そのとおりといえばそのとおりであるが、実行犯はほれ、こいつじゃ」

大柄な男は肩に抱えたロボロボのメダロットを指した。そのメダ

ロットはミステイゴーストだった。ミステイゴースト…？まさか！
「ヤナギ！君はひよつとして、ヤナギなのかい！」

イツキは男に抱えられたメダロットに呼びかけた。ミステイゴーストは酷い損傷をしており、機能停止しているかもしれない。だが、ミステイゴーストはゆつくりと反応した。

「誰…？僕の名前を呼ぶのは…？カンちゃん？」

やはり、このミステイゴーストは例の「ヤナギ」であった。メタビーが大柄の男の足元を撃ち、ラムタムがヤナギをキャッチした。ヤナギは体を震わせながら、独り言のように謝罪した。

「皆…カンちゃん…ごめんね。…ごめんね。皆とカンちゃんを酷い目に遭わせて…ごめんね」

「ヤナギとやら、一体何があつた？」

そつとヤナギを地面に置き、ラムタムがヤナギに聞くと、邪魔するかのよう到大柄の男が叫ぶ。

「こらー！そいつを放さんか！そいつは、ちよいとわしらの仕事を知りすぎた」

「もう、さつきからあんたたちは何者なのよ！」

大男は不敵な笑い声を上げ、金魚鉢たちも怪しく笑った。

「知らないなら教えてやろう。聞いて驚け！そして、恐怖するがい！我らは、悪の秘密結社ロボロボ団。わしは、そこで幹部を務める者だ」

「ロボロボ団！」

メタビー、ブラス、ラムタム。メダロット以外の者は驚愕した。

ロボロボ団といえば、十年前。メダロット史上最悪ともいわれる「魔の十日間事件」を引き起こした組織。単なる悪戯集団かと思われていただけに、この事件は世間をおおいに揺るがした。しかし、事件の幕引きと同時に組織は忽然と姿を消した。

以来、組織は自然解体したと考えられたが。よもや、まさかこんな形で幻となりつつあるロボロボ団と出くわすとは、イツキたちの予想を遥かに上回っており、四人は思考を停止した。

「ふおふおふお！腰が抜けてしもつたか」

幹部と名乗る男はイツキたちの態度に満足したようだ。

人間と違って、三機のメダロットには特に驚きが見られなかった。メタビーが幹部の男に話しかける。

「んで。そのロボロボ団が、何でこんな山奥でコソ泥まがいのことやつてんだ」

「な、何だとうロボ！」

金魚鉢の一人がコソ泥という言葉に反応した。

「反応しているところを見ると、自覚しているようですね」

ブラスが無愛想に突っ込む。地団駄を踏む金魚鉢を押さえ、幹部の男が返した。

「ふん。秘密結社が毎回派手なことやるとは限らない。大願を果たすには、こうした人材を集めるための地道な活動もしなければならぬ」

「大願だと？」

ラムタムが口走った疑問に、大男は先ほどより更に不気味に微笑んだ。

「我らの大願：それは、世界征服だ！！」

一同、しーんと静まった。大男に金魚鉢たちは、心底震えあがっているなど内心とても喜んでいた。だが、そうではなかった。アリカは吹き出しそうになる口を強く押さえた。

「ア：アリカ、こんなき、緊迫したときに寄せつて」

そういうイツキもこみ上げる感情を抑えるのに必死だ。この緊迫した場でいきなり世界征服と言われては、笑わずにいられなかった。どうせなら、普通に資金源調達とか言われたほうが良かった。

笑いを堪えるアリカ、イツキをよそに、カリンはぷつと吹き出していた。

「お、お前ら何が可笑的い」

これが返答だと、コウジがわざとらしく高笑いした。

「あーはっはっはっは！どんな動機かなと思いきや。まさか、世界

征服とはね」

今度は幹部の男が地団駄を踏んだ。

「おのれい。だから、子供は嫌いなんじゃ！えーい！お前たちメダロットを転送せい」

ロボロボ団五人はメダロットチからメダロットを転送した。計十五体のメダロットがイツキたちの眼前に出現した。すつとんきよんな雰囲気は去り、シリアスな空気が再び漂う。

メタビー、ブラス、ラムタムはさつき全速力で空を飛んだことにより、エネルギーを消耗していた。飛行系パーツはエネルギーの消費率が他の脚部より高い。その上、相手は数だけでもこちらの五倍以上。

「不味い状況になったわね」

あのアリカが弱音を吐いた。

自分たちを逃がさぬよう、ロボロボ団は囲いを広げ、徐々に縮めてきた。

ピピィ。

イツキのメダロットチに電文が送信された。こんな状況に誰だ。イツキは素早くメダロットチの電文を黙読した。

スタングレネード（閃光弾）を上空から落とす。至急、地面に伏せて、目と耳をきつく塞げ。by・修復完了のフェニックスメダル閃光弾！？フェニックスメダル！？瞬時にして沢山の疑問が浮かんだが、イツキはこの電文の送信者を信用することにした。

「皆、地面に伏せて目と耳をきつく塞ぐんだ」

どうしてという質問も意に介さず、イツキはとにかくそうしてくれと頼んだ。

「どうなってもしらないぞ！」

文句を言いながら、コウジは率先して目と耳を塞いだ。イツキ、アリカ、カリンも地面に伏せた。メダロットたちは、一時的に視覚・聴覚機能をシャットアウトさせた。

「それは降参という合図か？今更遅いわ。やってしまえ、者共！」

時代劇のような掛け声を上げて、ロボロボ団が襲ってくる。そのとき、強烈な閃光と音が辺りを覆った。続いて、熱風を肌感じて、イツキは飛び上がって目を開いた。五人のロボロボ団員が転げまわり、二体のロボロボ団メダロットが炎に包まれていた。

燃えるメダロットたちの背後から、デスフェニックスが飛翔し、イツキらの下まで飛んできた。

「あなたがイツキですか？」

イツキは頷いた。

「私の名は金衛門と申します。以後、お見知りおきを。新たな主人であるイツキ殿の火急に馳せ参じ参りました」

生意気なメタビーとは逆の、何ともお堅く感じる性格であった。

「金衛門か。こんな状況でなんだけど、よろしくな。それで、ありがとうな」

「こちらこそ。それよりも、他のメダロットも動かしてください。」

今のうちに叩いたほうがよろしい」

イツキが起こす前に、コウジ、アリカは行動していた。ラムタムは五感機能が麻痺した近くのメダロットを一刀両断。もう一体、ブルーソードグの左腕を付けたアーマーパラディンが援護射撃し、ブラスが空を飛ぶゴーフレットを撃墜。イツキもメタビーを起動した。メタビーも負けじとサブマシンガンを撃ちまくり、ミサイルも発射。金衛門は樹を燃やさぬよう、火力を調整して相手を燃やした。ばったばったと、ロボロボ団メダロットが薙ぎ倒されていく。

態勢を立ち直す頃には、五対五の同数になっていた。それなのに、幹部の男はまだ余裕そうだ。

「ふおおお……。閃光弾とな！こりゃ、たまげたわい！だがのう、雑魚をいくらやったところで、わし自慢の三体を倒せなかったのは惜しいな」

その三体とは恐らく、猪型のダッシュボタン、大王イカ型のアビスグレーター、クラゲ型のプルルンゼリーのことであろう。一体に付き、各自一体をぶつけあう正攻法での戦いとなる。

防御型のダッシュボタンが前に進み出た。何かしてくる。コウジがいち早く察した。

「火薬系をぶっ放してくるぞ！」

頑丈なダッシュボタンを盾として、アビスグレーター、プルルンゼリー、キラビットの脚部を付けたマジカルピエロが大量のミサイルを放った。コウジのアーマーパラディンが盾となり、背後のメタビー、ブラスが数発のミサイルを破壊した。

「わぁー」

後ろから、タロウが悲鳴を上げた。タロウの横には息を切らしたカンちゃんもいる。二発のミサイルがタロウとカンちゃんに飛ぶ。助けられそうにない。

誰もがそう思ったとき、ヤナギが最後の力を振り絞って宙に浮いた。

「カンちゃんー！！！！」

どどおおおーん…！！

爆音のあと、ぼろ屑となったものが叢に落ちた。

「カンちゃんとタロウは！？ヤナギは？」

身を縮こませたカンちゃんとタロウは無事だった。だが、身を挺して二人を守ったヤナギは、パーツとティンペットまでも爆発の影響は及んでいた。がくがくと震えながら手を伸ばすヤナギ。その手がティンペットごとにもげた。

「ヤナギー！！」

イツキとカンちゃんの悲痛な叫びが重なる。アリカとカリンは目を逸らし、コウジはイツキたち会ったときよりも激しい怒気を含む目でロボロボ団を睨む。

「お前ら何を悲しんでおる？メダロットはメダルさえ無事なら動ける。たかが、パーツとティンペットが壊れたぐらいで何を嘆いておる」

かちん。メタビーの何かが切れた。ここ最近の幾多の戦闘を経て、メタビーのメダルは確実に成長していた。ロボロボ団の目的とか、

ヤナギを唆した方法など知らない。ただ、今、ヤナギの取った行動とその姿。そして、そのヤナギに対するロボロボ団の発言がもう一步で成長するメタビーのメダルを進化させた。

できる。何ができるか分かんねえけど、とにかくできる。

夢遊病者のような足取りでロボロボ団に近寄るメタビーを見て、コウジ、ラムタムが止めにかかった。

「何を考えている？一人で勝てるわけないだろう」

メタビーは乱暴に二人の手を払った。イツキも止めにかかったが、メタビーは優しくイツキの手を止めた。

「俺に任せてくれ。何だかしんねえけど、多分、一人でできる。今、滅茶苦茶良い気分なんだ」

メタビーの雰囲気がいっつもと異なる。口調こそそのままだけど、猛獣のように燃えたぎる戦闘意欲としっかりと獲物を見据えた狩人が同居したようだ。

ロボロボ団もメタビーの異変を感じ取っていた。幹部の者が命令する。

「…お前たち、何をぼさつとしておる。いい的ではないか。次はあのカブトムシを一斉掃射で片付けろ！」

ロボロボ団メダロットがミサイルを発射しようとする。メタビーは落ち着いて、銃口を向けた。

「ふおふおふお…。せめて、ダッシュボタンだけでも道連れにしよーうという腹積もりか。甘いぞい。メタルビートルの弾丸がいくら強力でも、わしの特別チューンナップのダッシュボタンの装甲はそんな生半可な戦法じゃ破れんぞ」

幹部の男の号令と同時に、メタビーの体が輝いた。

「な、何だ？」

双方が同じように驚いている次の瞬間、耳をつんざくばかりの轟音が森に響き渡る。凄まじいまでの轟音に、イツキたちは耳を塞ぐしかなかった。

どのくらい経ったのだろう。轟音の激しさに頭がおかしくなりそ

うになつて、時間と方向感覚が狂つた。感覚が正常になると、イッキは眼前の状況を見て唾然とした。

五体のロボロボ団メダロットは、パーツが粉々に砕け散るほど蜂の巣になつていた。メタビーは、どういわけか体があちこち溶けていた。

部下に支えられて立つた幹部の者も、これには驚きを隠せずにいられなかった。

「な、な、何だ！何だ！何だぁー！？何が起こつた！」
支える部下が答えた。

「よ、よく分かりませんが。光つた次の瞬間、体の許容量を超えるほどの無数の弾丸が撃たれたロボ……」

「本当か！」

訳の分からぬうちに味方メダロットを大量に失い、謎の光と力、更に幹部の大男に凄まれて、部下のロボロボ団は怯えきつた声で「ほ、本当ですロボよー」と言った。

慌てふためくロボロボ団に、コウジが居丈高々に出た。

「さあ、どうする？お望みとあらば、まだ戦つていいぞ」

ラムタムが身構え、ブラス、アーマーパラディンがロボロボ団に銃口を向ける。ロボロボ団は一步ずつ後ずさり、幹部の男が懐から何か取り出した。

「覚えておれよー！」

ぼん！もうもうと黒い煙がわきたつ。

「煙幕か」

コウジがラムタムに攻撃命令を出させたが、ロボロボ団はとつくのとうに森の奥へと姿をくらましていた。イッキが土下座姿勢のメタビーに駆け寄る。

「メタビー、どうしたんだよ一体？何をしたんだお前？」

イッキが所々溶けたメタビーの体を抱きかかえる。ダメージをつけていないのに、パーツから洩れた装甲下の配線が目につく。メタビーは掠れた声を絞り出した。

「分かんない。今から機能停止するけど、安心しろ。…ただの…エネルギー切れだから」

メタビーのカメラアイから光が失われた。

「メタビー！」

イツキの二度目の悲痛な叫びが木霊する。こたたま

ロボロボ団との交戦後の始末は大変だった。僕たちはカンちゃん、タロウを家まで送り、すぐに旧式の黒電話で警察へと繋いだ。同時に警察へ匿名の電話が入り、おどろ山近辺の閉鎖された廃工場に強奪されたメダロットたちが保管されていたようだ。

廃工場内では、何とロボロボ団が既に何者かに捕えられていた。セレクト隊も事情聴取に関わり、ロボロボ団の話から、廃工場のロボロボ団を捕縛したのは怪盗レトルトだと判明した。

怪盗レトルトはメダロットを主に盗みの対象とした神出鬼没の大泥棒。その大泥棒がどのような事情があつてロボロボ団と戦い、しかも、保管されていたメダロットたちを奪わなかったのか。警察とセレクト隊は共同で捜査を行っているらしい。

僕たちといえば、もうそりゃ、大目玉を食らった。警察の人の長々とした事情聴取、その警察の人たちからのお説教に、両親からの雷をおおいに貰った。ママはもちろん、パパの静かに怒りが籠もった声音は一生に耳に残りそうだ。罰として、ゴールデンウィーク中は許可が無い限り絶対外出禁止。そして、もう二度と自分たちだけでは山に登らない、ちゃんと親に話せという誓約書まで書かされた。最後にメダロットたちについて。

メタビーはセレクト隊の看護メダロットの介護もあつて、翌日には自宅に届けられた。

次にカリンちゃんのメダロット。

カリンちゃんのメダロットも廃工場に保管されていたようだ。修

復と聴取が済んだ次の日には、自宅に届けられた。ゴールデンウィーク五日目、土砂降りの雨の日に真つ白なベンツが僕とアリカの家の中間に止まった。カリンちゃんとセントナース、それと、礼装服の男性がお礼に訪ねてきた。

突然の大金持ちの訪問にママに僕もびっくりした。カリンちゃんと執事の人を見て、ママに僕もかしこばった挨拶を送るしかなかった。カリンちゃんの愛機、セントナースのナースは主人と似て物腰柔らかく。

「イツキさん、メタビーさん。このご恩はお忘れしません」

人間でいうところの可愛子ちゃんにこう言われて、メタビーは調子良さげに返事した。

次にヤナギについて。

ヤナギはあまりにも損傷が深く、介護メダロットはこの傷は治せないと言った。肩落とす僕たちに、トツクリという眼鏡をかけたセレクト隊の人に「大丈夫ですよ。彼はメダロット博士のところに送りますから」と聞かされて、僕らは一安心した。

もう一つ、ヤナギがロボロボ団に協力した理由。

無垢なヤナギはロボロボ団に騙されたのだ。カンちゃんの孫娘のナツコさんが海外に転勤してから二日経った日、ヤナギはロボロボ団とばったりと出会い、捕まった。捕えられたロボロボ団の話によると、リーダーの男。本名かどうか分からないが、シオカラというあの大男がヤナギを使った幽霊騒動を思いついた。

ナツコは海外転勤ではなく、会社での失敗を拭うために、否応に海外へ飛ばされた。シオカラはこんな嘘をヤナギについた。

ヤナギとて、少しは疑ったりした。だが、シオカラは何らかの脅しも加えてヤナギを納得させて、ヤナギを幽霊として仕立て上げた付け加えれば、ヤナギ自体は脅迫の声に捕えたメダロットの運搬を手伝っただけで、メダロットを直接攻撃したのは専らロボロボ団のようだ。

ついでに、スクリューズ。警察に話すと、当然奴らも呼び出され

て、親から然るべき処罰を与えられたとのこと。

ゴールデンウィーク最終日。

僕は両親に許可を貰い、ママが運転してあるところへ連れて行った。「時間がきたら、電話しなさいよ」

ママと車を見送ってから、お土産を持ってメタビー、金衛門と歩いた。おどろ山の登山口から離れて西側。そこをずっと歩いた先に、目的の古風な民家が見えた。

声をかけても返事がない。イツキは横開き式のドアを開けて、中を覗こうとしたら、

「ひーひっひっひっひ。…勝手に入るのは誰だあ…」

と、この世の者とは思えない声だ。イツキ、メタビーはやれやれと首を振り、「勝手に入って申し訳ありません。さようなら」と帰ろうとしたら、声の主は慌ててイツキたちを押し止めた。

「ごめん、ごめん！ちょっと、悪ふざけが過ぎちゃった」

家屋から、新品と見紛うほど綺麗になったミステイゴーストのヤナギが現れた。

「悪ふざけはよせよな。全く」

つつけんどんなメタビーに、ヤナギは何度も謝った。

「ところで、カンちゃんは？」とイツキ。

「カンちゃんなら、アリカちゃんと皆と一緒に山菜取りに行ったの。それで、僕はお留守番しているの」

イツキ、メタビー、金衛門もヤナギのお留守番に付き合うことにした。小一時間後、元気一杯にアリカがただいまと帰ってきた。アリカの長靴は泥だらけだった。

「イツキたちも来ていたのね。ほら、楽しんでたんだからあんたらも外に出て、山菜洗うの手伝いなさい。これから、お昼にするから。あと、ヤナギ。カンちゃんがヤナギに見せたい物があるんだって」

外に出ると、ブラスの他に五体のメダロットたちがそこにいた。カンちゃんの手には手紙が握られていた。カンちゃんが嬉しそうに手招きして、ヤナギに手紙を見せると……。ヤナギは喜びのあまり、天に召されんばかりの勢いで高く宙に浮いた。

手紙には、ナツコさんが七月の下旬には日本へ帰ってくる事が直筆で書かれていた。

その日、イッキはママが迎えに来るまでの間、カンちゃんにカンちゃんのメダロットたちと楽しい時を過ごした。

7 おどろ山探索記三（謎の集団）（後書き）

ここで、ロボロボ団初登場。そして、おどろ山編は終了。

次回はゲーム本編にはない話を二、三話盛り込んでから、また、本編（原作）のストーリーに入りたいと思います。

8・異国からの転校生

ゴールデンウィークの事件を当事者視点から執筆した三部構成の記事「おどろ山探索記」は、ギンジョウ小学校の歴代新聞記事で最も高い評価を受けた。実際の評判もあり、お陰でアリカ、イツキは一躍学校で有名人。

二週間。アリカ、イツキの話題もそろそろ薄れる頃、校内はまた別の噂でもちきりになった。

「ねえ、イツキ」

隣の席のアリカが話しかけてきた。

「海外からの転校生の話だけださ。何でも、ロシアの出身らしいわ」

「ロシアって…。日本と千島や樺太の領有権で争っている、寒い北国だっけ？」

「私も詳しくは知らないけど、大大イツキの言うとおりね」

「それで、そのロシアの人がどうしたの？」

「んもう！ちよつとはメダロット以外のことも興味持ちなさいよ！そのロシアの人はね。私たちと同じ年で、転入先のクラスは私たちの三年一組だつて」

イツキは適当に相槌を打つといた。メダロットのことしか考えてないと言われて否定はしない。ただ、好きな物に熱中する類ではなく、この場合は考えるざるをえないと言ったほうが正しい。

メダロポリスから来たというカリンちゃんとコウジ。突如、活動を再開したロボロボ団。そして、そのロボロボ団を謎の力で瞬殺したメタビー。一つ目と二つ目は理解できるが、三つ目はどう考えても分からない。インターネットで検索しても分からない。メダロット博士にも聞いてみたが、あの博士すら、メタビーの発した力につ

いては分からないと答えた。

「メダロットのメダルの謎は解明されておらん。君のメダロットが発したその力を解明すれば、メダルに隠された数々の秘密を解き明かすことができるかもしれん。イツキ君、その当時の状況を詳しく教えてもらえんか」

そう言われても、あの慌ただしい状況では何が起こったか当事者にも判別しかねた。イツキは光ったことと、ロボロボ団の一人が言ったことを博士に伝えた。

イツキの空想を打ち破るように、朝のホームルーム開始を告げる、筋骨隆々なジャージ姿のオトコヤマ先生が野太いバリトン声ではようと挨拶した。

「既に知っている者もいると思うが、ナイジェリアの子がギンジョウ学校に転校してくる。そして、転入先のクラスは我が三年一組だ。因みにその子は男の子らしい。今週金曜日の終わりのホームルームに来るから、皆、歓迎の準備をしておくように」

その後、簡単な連絡事項と挨拶でホームルームは終了した。

イツキは特に準備はしなかった。どうせ、挨拶は先生にクラス委員長が代表として言うし、来たばかりの彼に深く尋ねるのもどうか。イツキは簡単な挨拶だけを考えて。

オトコヤマ先生は、歓迎の時のみ自分のメダロットをメダロットチから出していいと言っていた。

当日、三年一組のクラスはホームルーム前だというのに、二つ離れた教室に賑わいが届くほど盛り上がっていた。それもそのはず。元気一杯の子供たちに加えて、今日は皆のご自慢のメダロットたちまでいるのだから、はしゃがないほうがおかしい。

メタビー、金衛門は他の生徒の愛機と混じっていた。エネルギーの消費が激しく日常においては支障をきたすから、普段、金衛門は

飛行系パーツ以外の脚部を付けて生活している。

両親についてだが、意外にもすんなり金衛門の存在を受け入れてくれた。礼儀を心得た金衛門の性格も関係しているだろうが、イッキを助けにきたという点が一番の理由だそうだ。

オトコヤマ先生が教室の扉を開けた。

「こら、お前たち！メダロットを連れてきてはいいと言ったが、二つ先の教室に届くほどうるさく騒いでいいとは言っておらんぞ！」

オトコヤマ先生の一喝で教室は静まり返った。

「よろしい…。ゴホン！それでは、どうぞ入ってきてください」

オトコヤマは外で待機する人に入ってくるよう促した。そろそろと、黒いをスーツを着てパーマメントをかけた麦藁色のショートボブの女性がクラスの皆に会釈して、かしこまった姿勢で小さな手を握りながら教室に入った。女性に手を繋がれて入った女の子は、かの有名なロシア人形マトリョーシカのモデルにしたような女の子だ。ロシアっぽい民族衣装を着れば、正に実写版マトリョーシカ。母親と同じ金髪青眼で、ロングヘアの上にちょこんと載せた水玉模様入りの赤リボンが可愛い。しかし、服装はジーンズにピンクのパーカーを着ていた。

女の子と母親。クラスメイトに担任、メダロットも、皆一様に押し黙った。学校側の配慮と向こう側の都合で、まずは金曜の終了ホームルームに顔出しして、来週月曜日の朝礼で初めて彼を全校生徒に紹介する手筈になっている。

同じで人間であることは間違いない。が、国籍に雰囲気、そもそも外見からして違う人種に生徒一同はどう応じれば内心、戸惑い気味だ。このままではまずい、オトコヤマ先生がまたわざとらしく咳払いした。

「エッホン！えー…では、バルスコフさんたち自らにご紹介をしてもらいましょう」

バルスコフと呼ばれた女性は機転を利かし、すぐに愛想ある笑顔を浮かべた。

「みなさん、こんにちわ。私、マイア・バルスコフと言います。ドウゾ、娘のことよろしくお願いします」

片言ながら、マイアという人は聞き取れる日本語で自己紹介した。委員長がよろしくごじいますと挨拶して、他の生徒も委員長に続いて挨拶した。

マイアは女の子の耳元で囁いた。恐らく、母国語であるロシア語で娘に早く挨拶しなさい、とでも言っているのだろう。

女の子はぎくしゃくと黒板に向かい、白墨で文字を書き始めた。

お世辞にも綺麗とは言えない。本人もそれを理解しており、小さな手で懸命に文字を大きく書いた。

タチャーナ・バルスコフ。黒板にはそう書かれた。

女の子が前を向いて、片言な日本語で挨拶を述べた。

「エー……。ワタシ、コクバに書いた文字のトオリ。タチャーナ・バルスコフという名前です。みなさん、短い間ですが、お願いします」

後半の挨拶が流暢だったのは、日常用語に関してタチャーナはある程度習得しているらしい。委員長の短い代表挨拶をし、クラスメイトは歓迎の拍手をタチャーナに贈った。タチャーナはイツキの後部座席に着席した。イツキは心の中でラッキーと歓喜した。

そして、今日は終了のホームルームの間だけ学校にいて、終わると母親と共に下校した。

後で聞いたところによると、タチャーナの父親は貿易関連の大企業に勤めていて、二年前の四月から日本に滞在している。何でも、引越はこれで三度目のようで、今年の八月の初旬には祖国ロシアに帰国するらしい。父親的には色んな文化を経験させたほうが良いと考えているようだが、子供にはそうではないようだ。

タチャーナが来てから六日。クラスで誰彼隔てなく話を取れる奴に、ちよびつと下心を持ってイツキもそれとなく話しかけたが、表面的な社交辞令で終わってしまう。イツキに他のクラスメイトもタチャーナと仲良くしたいとは思っているが、タチャーナ自身が周囲に近寄らせないバリアーのような物を作り、日本人とかけ離れた外

見も相まって、タチャーナはまだクラスで友達と呼べるような者は一人もいない。

ママとパパにそのことを話すと、パパが発泡酒を一口含んでから、当然だろうと言った。

「そのタチャーナちゃんも本当は話したいんだ。ただ、来たばかりで不安でしようがないんだ。それに、日本にいた間だけで三度も引っ越しして、八月にはロシアへ帰国するのだろう。ひよっとしたら親しくなったときの別れを思うと、怖くて寂しいから、そのせいで上手く付き合えんのもかもしれん」

パパの言ったことは最もかもしれない。国内であれ、年に何度も引っ越ししてはあまり落ち着いていられないだろう。そう理解しても、イツキは後部座席のタチャーナと上手く話せないまま、あつという間に一週間経った。

その日の午後、帰りがけの途中、イツキは宿題のプリントを学校に置き忘れたことを思い出した。引き返そうとしたら、親切にも金衛門が取ってくると言った。

「イツキは先にお帰りください。私めが取ってまいります」

「ありがとう、金衛門」

イツキは金衛門の脚部パーツを元のデスクフェニックスに戻し、金衛門は学校へ向かって飛んだ。

金衛門は迂回して、三年生の教室がある校舎裏側まで飛んだ。教室内を見ると、タチャーナが一人、ぼつんと教室に座っていた。金衛門は窓際まで近寄り、タチャーナに一声かけた。

「その娘さん？すまぬが、ちと、用があるので開錠してもらえぬか」

窓の外から、いきなり侍口調の飛行メダロットに話しかけられてタチャーナは動揺していた。

「驚かしてすまん。私のことは覚えておらんか？あなたの前の座席に座っているイツキ殿のメダロットです」

タチャーナは机に蹲った。そして、どうやら思い出してくれたよ

うだ。タチヤーナはスカートを押さえて立ち、窓を開けて金衛門を教室に入れてやった。

「感謝する。イツキ殿がプリントを忘れたから、私が代わりに取り来た次第なのだ」

金衛門はイツキの机を探り、プリントをしつかりと掴んだ。そんな金衛門のことをいつこう気にせず、タチヤーナはただ、時計を見つめていた。家庭での会話でタチヤーナの事情を何となく知った金衛門は、一つ、物は試しにタチヤーナとの対話を試みた。

要らぬ世話焼きかもしれんが。

「…タチヤーナ嬢？お伺いするが、母を待っているのか？」

タチヤーナはおもむろに振り返って光太郎を見やり、小さくうなずき返した。

「迎えを要するほど遠いのか？」

少し間を空けてから、タチヤーナははにかみながら口を開いた。

「歩いて…につじゅぶんぐらゐのところ。歩いて帰ると、他の人の目が気になって…。それが嫌だから、ママにお願いして、迎えにきてもらっている…」

「につじゅぶんとは、「二十分」のことだな。

「ふむ。まあ、確かに肌の色からして皆と違う。だが、毎日母者とだけ帰って楽しいか？短い期間でも、皆と帰ったほうが楽しいように思えるが」

「あなた、金衛門だよな？イツキのメダロットだよな？」

「そうですか…」

「イツキ、ワタシに声をかけてくれる。だけど、ワタシ、八月には帰国することになる。ホントは皆と話したい。けど、何だか分からないけど、話そうとしても話せないし。話しかけられても、何故か返せないの…」

金衛門はタチヤーナのような子供を何人か見たことがある。生前のマスターといるとき、周囲と合わせようとせず、こちらから話しかけても、それを拒むような子供がいた。そういう子供はやはり、

地道に付き合う努力が必要。

あまり影口を叩きたくないが。爺殿は立派な人で、互いに肩を支え合ってきた。親族な方は逆で。一人、魔の十日間事件で死にそうなる目に遭ったのは同情するが、まさかそれで自分を捨ててしまうとは。爺殿と同様、鳥好きの人がおればなあ……。いかん、いかん。今更、気に病んでもしょうがない。今は今、昔は昔。しばらくイッキのところでは住まわせてもらおう。金衛門はタチヤーナに意識を戻した。

「タチヤーナ嬢。いつでもいいから、イッキや同性の子を誘ってみないか？八月に越すとはいえ、このまま一人でぼんやりと佇んでいるだけの毎日はつまらんだろ？」

「どうして？」

要らぬお節介は不要だと、タチヤーナは金衛門を厳しく問い詰める口調だ。

「どうして、ワタシにかまうの？」

「これは例え話だが。近くで人が転びそうになって、ちょうどその人を支えられたり体を掴める位置にいたら、お主ならどうする？」

「…手を伸ばす…」

「それだ。付け加えれば、私は常に誰彼の世話を焼くタイプではない。偶然とはいえ一度君という存在に手を伸ばした以上、その手を放して転ばす真似なぞ出来ない。ただ、その手を振り払うのは君の自由だ。私もこれはお節介と自覚している」

頃合いだな。金衛門はそろそろと、教室の開け放たれた窓へ向かった。太陽熱の残りか、校舎の周りで吹く風はほんのり熱気が宿っている。タチヤーナは金衛門を見上げながら、窓を閉めた。どう転ぶか知れた物だが。二日の休みもあれば、落ち着いて考える時間は十分にあるはず。予定外のこと遅くなり、イッキが心配するかもしれないので、金衛門は真っ直ぐ天領家の方角を目指した。

タチヤーナはただ一人、教室で母を待つ。

夕食を済ませた夜、母親と会話した。ただし、使用言語はロシア

語。ここでは、ロシア語を訳した形で記す。

「ねえ、母さん^{マチ}。私が友達と帰ってきたら、母さんどう思う？」

母親のマイアは瞬きして息子の質問に目を丸くするも、周りの白い調度品とマツチングした緑色のソファに座る愛しいタチャーナに、マイアは微笑む。

「私としては嬉しいわ。だって、あなたが進んでお友達を連れてくるのは、ナイジェリアにいた時以来だもん。ようやく、ジャポンで親しい子が出来たのね」

思えば、この子には苦勞をさせたものだ。二年前は苛めに遭い、半年で転校。二校目ではそれなりに上手くやっていけたが、夫の都合で転勤。この終わりが無いと思えた長い転勤生活も今年の八月、本国に帰国にすることにより、やっと腰を落ち着けられる。

それでも、折角二年間も海外に滞在したのに、子供が良い想い出もなく日本を去るのは親としては少々悲しい。母や姉には考えすぎと言われたが、このまタチャーナが俯いたまま祖国に帰還しても、移転先でこの子が自ら人と付き合えるか不安だ。なんせ、今度の帰国では、前居た街とは違う街に引越すから。

「それで、その子は何て名前なの？」

「まだ、連れてくると決めたわけじゃないよ」

タチャーナは宿題をすると言い、二階の自室に籠もった。マイアがソファに座り込むと、タムムシ型メダロットのアンビギユアスことリュビーチが紅茶を運んできた。リュビーチは去年のクリスマス、夫がタチャーナにこわれて買ったメダロット。リュビーチとは、「虹」という意である。内気なタチャーナも、リュビーチには少し心を開いている。

マイアは紅茶を受け取り、僅かに啜るとガラス張りのテーブルにティーカップを置いた。一人で自室にいるタチャーナ。タチャーナは、友達ができない自分を母親が心配していることを当然知っていた。

並大抵のことでは自分を変えられない。その自分に、イツキのメ

ダロツトはチャンスくれた。悩むタチヤーナの背をリュビーチが呼んだ。

「タチヤーナ。そんな風に腰を曲げていたら、早くから腰だけお祖母さんになるよ」

「余計な一言よ」

タチヤーナは窓の外に顔を向けたまま喋った。

「リュビーチ。迷っているときに誰かが手を差し伸べたら、お前ならどうする？」

「そうですね…。世の中色々な考えの奴がいるから、人によっては手を振り払ったほうがいいかもな。信用できると思うのなら、相手が待ってくれている間に手を伸ばしたほうがいい」

リュビーチはお菓子を置いて部屋を出た。タチヤーナはすぐに手を付けず、外の景色を眺めた。

二日間、タチヤーナは深海で空気を求めて彷徨うように悩んだ。

そのタチヤーナを、マイア、父親、ラデュガは見守った。

月曜日。終礼が済んでとっとと家へ帰ろうとしたら、イツキはアリカに呼び止められた。

「イツキ。今日、暇？」

「…特に予定はないけど」

「良かった！あのね、今から取材に同行してくれない？」

「ここ最近、周辺で事件性があるものとかはないけど」

「ジャーナリストが必ずしも事件を追うとは限らない。ときには、地域や身近な物を題材に取材したら、意外な事実が見えてくることもあるし、己が視野を広げることにも繋がる。というわけで、鞆を置いたら商店街に行きましょう」

迷うイツキに、タチヤーナが儚さ漂う声をかけた。

「……ズドラー^{こんにちわ}スチエ、イツキ、アリカ。今日、一緒に帰れる？」

イツキ、アリカは目を剥いた。今の今までクラスから浮いていたあのオニエカチ君が。話しかけてもお世辞めいた返事しかなかった。タチヤーナが、自ら話しかけてきたからだ。イツキが喜んで良いよと言つ前に、アリカが身を乗り出した。

「タチヤーナは、今日予定とかある？」

「暇よ」

「そう！じゃ、良い機会だから、私たちと一緒に商店街の取材に行つてみたい！？タチヤーナは行ったことある」

「車で何度か通つたことあるだけ。私、行ったことない。でも、前から一度行つてみたいと思つていた」

「決まりね！」

三人で待ち合わせ場所を決め、イツキ、アリカ。それと、タチヤーナはまだちよつと引きずる感じで肩を並べて校門を出た。金衛門からタチヤーナについての事を打ち明けられていたメタビーであるが、あえて口を出さず、メダロツチ越しから成り行きを黙つて見ていた。

タチヤーナの家から一番近い場所、広いグラウンドがある五丁目公園が集合場所。

タチヤーナは何故か金衛門も連れてきてほしいと頼んだので、イツキはメタビー、金衛門のメダルをメダロツチに挿入した。商店街を取材し回るから、イツキ、アリカは自転車に乗つて五丁目公園に向かった。六分もして、植林樹と高いフェンスネットに覆われた五丁目公園が視野に入る。入って右奥のベンチ、タチヤーナが座つていた。二人はタチヤーナに手を振り、気付いたタチヤーナも同じく手を振つた。

イツキがタチヤーナの手前で自転車を止めた。

「お待たせ！」

「オウツ！バイクで行くんだ。ちよつと待つて、すぐに取りに戻るから」

タチヤーナが自転車に乗って公園に戻ると、アリカを先頭に取材陣は出発した。

これまで、この五丁目公園に周辺を散歩しただけのタチヤーナにとつて、アリカの取材同行は正に未知の世界への切符を手にしたみたいだ。アリカは学校に許可を貰い、毎週商店街の店一件を取材し、記事にしている。イツキもしばし同行させられているから、イツキ、アリカは商店街の顔馴染みとなっている。今回は裏角のお団子屋さんの取材。待っている間、三人はみたらし団子を一本貰った。三人はそれぞれ礼を言ってから、ありがたくみたらし団子を食した。スパーで売っている物とは違い、出来立てはやはやで、砂糖醤油の葛飴にお店の秘密の調味料を加えた団子はほっぺが落ちそうだ。

タチヤーナも、おずおずと一口、パクリ！ 齢五十のおじさんが味はどうかと聞くと、タチヤーナは満面の笑みで「美味しい」と答えた。取材後、イツキ、アリカは気を利かし、オニエカチ君に今まで取材したお店とその店員の人を紹介した。商店街の人たちは皆優しく、変な目付きもせず、タチヤーナを普通の子供として扱った。更に二人は、本当は近寄ることすら禁じられているおどろ山までタチヤーナを連れた。

公園から出るまでまだどこか引きずっていたが、今やすっかりそんな気持ちは消え去り。タチヤーナはひたすらイツキ、アリカとの時間を楽しんだ。メダロットの時計が五時を告げる。集合場所に戻り、解散しようとしたら、タチヤーナがイツキの金衛門に会わせてくれとお願いした。

断る理由もなく、イツキは金衛門を転送した。

転送された金衛門に、タチヤーナは一言「ありがとう」と呟き頬に接吻をした。

「イツキ、良いメダロットを持っているね。大切にするね」

タチヤーナはイツキの頬にも接吻をした。突然のことに頬を染めるイツキ。二人を鋭く睨むアリカの頬にも、タチヤーナは接吻した。困惑する二人に、タチヤーナは満面の笑みで言った。

「ロシアでは、親しい人に対する挨拶よ。じゃ、バイバイ！」

アリカは惚けた顔でさようならと言い、イツキはにやつきながら手を振り、金衛門はしゃちほこばった口調で「達者でな！」と別れを述べた。

自宅前で、イツキは金衛門にタチヤーナの態度の変化を問うたが、金衛門は「あなたの周りの子は皆いい子ばかりだよ。たまたま会ったタチヤーナ嬢にこう言っただけです」と、上手くはぐらかした。唯一人、タチヤーナとは別に事情を知るメタビーは、何故かしめじめとメダロツチの中でほくそ笑んだ。

8・異国からの転校生（後書き）

今回はできる限りロボット関連の話題を避けた。

前回は、メタビー、ヤナギなどに存在感を奪われた金衛門を目立たせるように心がけた。しかし、見返したら、メダロット側の主人公^{メタビー}が一言もしゃべらなかったので、次回からは気を付けます。

後、ロシア語などの発音が正しいか不安。間違っていたら、指摘してください。

ついでに。クワガタバージョンの転校生はロシア人ではありません。

9・メダドッジ

メダロットに関するスポーツといえば、ロボットが代表的。だが、自分の愛機が無用に傷付く姿を見たく無いという人も多い。そこで、数年前からメダロット版障害物競争のメダロードレースが誕生した。障害物がなくとも、一定の距離を走れる場所があるならば、メダロードレースはどこでもできる。メダロードレース誕生により、ロボットせずともメダロットは体を動かせる機会を得た。

五年前、社員の一人がロボット以外のメダロットのスポーツ拡大を夢見て、メダロットによる球技運動の企画書を提出した。

メダロット社社長の二毛作タイヒは理解がある野心溢れる人物で、この企画書にゴーサインを出した。

まず、最初にメダベースボールなるものを試みた。だが、メダロットによっては手が無かったり、足が無かったり、そこにメダロット用のグローブやボールにバットを作るとなれば、一チーム分作るだけでも莫大な費用がかかるので、メダベースボールは企画段階で終了した。

二つ目はメダサッカー。これもまた、上記と同じ理由により、企画段階で没。中々、メダロット向けの球技が見当たらない。

一年間の紆余曲折を経て、遂にメダドッジ案に他一つが通った。

早速、腕しかない飛行型と浮遊型メダロットに低空飛行でドッジボールをさせたところ、五機ずつに分かれた試合は意外な白熱ぶり。十分間の試合の末、推進力がある飛行メダロットチームが勝利した。決して圧勝ではなく、飛行型チームも残るは一機だけだった。

メダロットによる球技、略してメダボールのルール制定などにあたり、二毛作タイヒがこんな意見を出した。

「メダロットらしい物も取り入れたらどうだ？ただのドッジボールなど、面白味に欠ける」

二毛作タイヒは単に腕を使うのではなく、メダロットのパーツを

使って試合してもどうかと言った。しかし、二毛作社長の意見に反対する者は多かった。投げるだけなら、問題無い。だが、メダロツトのパーツによる攻撃ルールを加えたらロボトルと何ら変わりなく、ドッジボールの球が持ち堪えれそうにない。

「君たち、もう少し頭を捻ったらどうかね？それなら、耐えられるボールを作ればいいだけの話だ。メダボール用のボールを作り出せば、きつと利益になる」

細かなルール制定に、メダボール用のボール開発も同時に進められた。半年の歳月をかけてルールを作成し、そこから更に一年と三ヶ月も費やして、念願のメダドッジ専用ボールが完成した。

メタルビートルのサブマシンガンを跳ね返し、ヘッドシザーのソードを物ともせず、ロールスターの頭部の強烈なレーザーにボールは耐えた。

メダロツト社はメダロポリスの名門小学校花園学園に、メダボール宣伝のための公開試合をしてくれないかと依頼した。一件目での返事は無いと思われていたが、学園長は一つ返事で良いと答えた。

花園学園は二毛作社長の出身校であり、現学園長は社長の学友であったからだ。文部省の役人に沢山のマスコミの立会いの下、花園学園六年生所有のメダロツトによる二種のメダボール球技が行われた。試合後日、全国からメダボールルールブックにメダボール専用用具の注文が殺到した。二毛作はすぐに発売はしなかった。文部省からの通達がないからだ。二週間後、文部省の通知が届いた。社長が皆の前で通知の手紙を開く。

ざつと文面を読むと、社長は重役の一人に尋ねた。

「注文件数は？」

「学校関連だけでも、既にボール二千個分以上の予約注文が来ております」

社長が不敵に微笑む。社員一同は文部省の通知を読まずとも、社長の表情だけで書かれていることを理解した。

「一ヶ月後の発売にも併せて、工場はフル稼働だ！これから忙しく

なるぞ！」

社長と社員による一斉啖呵がメダロット社中から木霊する。こうして、メダロットの世界がまた一つ拡がった。

ギンジョウ小学校ではメダロット関連の行事が二つある。一つは、四月中旬に行われる校内ロボット大会。そして、二つ目はメダロットの運動会だ。

メダロットによるスポーツといえば、メダロードレース、メダボール球技の二種のみ。ギンジョウ小学校にはメダラクロス用の道具にルールブックは無く、メダロットによる球技はメダドッジしかない。そのメダドッジ用のボールも、学校には四つしかない。

どの学年がどのスポーツをやるかは、学校教員の会議で決まる。体力面を考慮し、一、二年生は六月末、三、四年生と五、六年生は七月の初旬に行われる。

真夏にスポーツ大会はどうかと思われるが、するのはあくまでメダロット。人間は応援役兼監視者。それに、ソーラーシステムを組み込まれたメダロットたちにとっては秋の曇り空よりも、日差しが強い真夏日のほうがかえって調子が良い。

今年の三年生はメダドッジに決定した。原因はオトコヤマ先生と畠田先生の二人に起因する。

普段は表に出さないようにしているが、二人は昔、バスケット部に所属していた。二人は全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会（ウィンターカップ）で合間見えた。その試合でオトコヤマの母校は負けた。月日が経ち、オトコヤマは教員としてギンジョウ小学校に赴任。そのとき、なんの運命の悪戯であろうか、畠田先生も赴任してきた。以来、二人は同学年になる度に、運動会などで火花を散らしあうようになった。

その畠田先生クラスには、かの悪名高いスクリーンズがいる。い

つもなら、二人の闘争心に辟易するが、今年は事情が違う。

番格的存在で、特にメダロット関連で痛い目を見た三年生は、せめてメダスポーツぐらいでもスクリーンズをぎゃふんと言わせてやりたいと燃えている。そんな訳で、今年のメダロット運動会の三年生は一部を除き、担任に生徒も大いにやる気満々。

校内ロボット大会で辛酸を舐めさせられたイツキ、アリカ、メタビーも雪辱を果たす絶好の機会がきたと浮き立った。

七月三日月曜日。三年生によるメダスポーツ大会。

校内ロボット大会と比べれば、いささか盛り上がりには欠けるが、幾人かの保護者の姿が見受けられる。

「メタビーちゃん、頑張つてね」

応援するイツキママの右横には、タチヤーナの母親マイア婦人もいた。タチヤーナは特別許可を貰い、タمامシ型メダロットのリユビーチをメンバーとして連れてきた。因みに、リユビーチとはロシア語で「虹」という意味である。

一回戦の対戦相手はガリ勉イメージが強い三年二組。だが、メダロッター自身の運動神経は大したことはないが、それとメダロットの扱いは別だ。二組の腕前は全くの未知数。

公平をきして、メダロットは両クラス二十体ずつと定められた。

メダドッジのルールとして、各チームのメダロットは頭部、右腕、左腕パーツのどれか一つの使用が可能である。そして、出来る限り相手メダロットに当てないよう注意しなければならない。相手を傷つけてしまった場合、故意と判断されなければその機体は試合続行が可能。

メダロットの扱いが上手いと見られたイツキは、メタビー、金衛門の二体を出場させることになった。イツキは金衛門の両腕頭部をポイズンコピーに替えた。

「皆、頑張つてね！」

補欠のタチヤーナとリュビーチが声援を送る。メタビーが余裕のVサインをみせる。

「メタビー、勝つてからにしろよ」

イツキがメタビーを諫める。

オトコヤマが審判として外野中央に立つ。

「スポーツマンシップに則り、まずは正々堂々挨拶からだ。メダロツトとて、それは変わらない」

互いのメダロツトが挨拶を交え、オトコヤマのホイッスルで試合開始。

ガリ勉というだけあって、きつとメダロツトたちは巧みに動き回ると予想していた一組であったが、そんなこともなかった。

ペットは主人と似るといいうが、二組のメダロツトで動きが良いと呼べるのはちよつとしかいなかった。二組のメダロツトは次々とボールを当てられてしまい、双子が持つ二機のモンキーゴング、蛙型メダロツト・フリッグフラッグの脚部と右腕を付けた土偶型のハニワミラーが最後まで抗ったが、ハニワミラーは金衛門の石頭頭突きシュート、モンキーゴングはマクドスネイクのがむしゃらパンチ、外野ブラスのシュートショットでアウトとなり、試合時間十一分、制限時間まで四分残り、一組の圧勝。

メダロツトたちに応援するメダロツターたちも、互いの手をタツチした。この分だと、四組スクリューズ相手にも勝てる。

イツキ以外はそう考えた。だが、四組対三組の試合を見て目を疑った。スクリューズはロボットル以外でも強かった。セリーニヤ、ブルースドッグ、鋼太夫。この三機が当然四組を牽引する形となり、三組の試合に挑む。

結果、一組より早い二分早い九分で試合終了。外野鋼太夫のパワーシュート、ブルースドッグの的確なシュートと守り、セリーニヤのすばしっこい動きで相手はタジタジ。

「……ロボットル以外でも強えなあいつら。やっぱ、難しいかな」

「そんなこたあねえ！聞くんた、皆」

耳ざとく聞きつけたメタビーが反論する。一組の生徒とメダロツトがメタビー、金衛門の周りに集う。

「そんなこたあねえって…。根拠はあるのか？」

「あるさ。お前ら、試合をよく見ていたのか！？」

「何って…スクリューズが中心となって活躍していたなって」

「じゃあ、他の奴らは？」

メタビーの言うことがまだ分からない者もいたが、大体の者は気が付いた。

「…そういえば、セリーニヤ、鋼太夫、ブルーस्टッグ以外の奴は、あまり動きが良くなかった」

「そう言われれば、そうだな」

「あと、勝ったとき残っていた機体はいつらの三機と、運良く残った感じのが二機ぐらいだったわ」

「では、我らは？」

金衛門の問いに、鈍い者もようやく悟った。イッキが応える。

「僕たちは外野六機、内野十四機の内。アウトになったのはたった三機」

「そういうこつた！」

メタビーが満足げに叫ぶ。

「いくら強くても、あいつら三機を一つとすれば。四組はただのワンマンチーム。しかも、四組はスクリューズに従っている感じで、チームワーク自体は取れてない。つまり…」

金衛門がメタビーの台詞を先取る。

「つまり、相手がどのように強力なワンマンチームであろうと。こちらは普通にチームプレイすれば、勝てない相手では無いということだ」

「俺の台詞取るなってばよ！」

試合前の敗色雰囲気を、メタビー、金衛門は掻き消した。一組一同のやる気が点火。その光景を見て、「青春だー！」と感涙でむせ

るオトコヤマ先生。

「応援してるよ、リユビーチ」

「任せてください」

この試合では、リユビーチを出場させた。機体構造的にリユビーチのほうが交代選手より優れているせいもあるが、日本最後の想い出として、タチヤーナたちを出場させて、優勝を飾ろうという一組の想いもある。

「あらあら、小綺麗なメダロットね。傷付かないよう注意することだね」とキクヒメ。

「へっへ。俺らがロボットしかできないお思いなら、そりゃ勘違いも甚だしいさ」とイワノイ。

「うんうん。洗濯ミスだね、ほんと」とカガミヤマ。

そのスクリューズの野次に対し、タチヤーナは挑戦的に三人をねめる。四組と試合開始！

メタビーの開幕シユートでまずは一機を場外送り。負けじとセリーニヤがボールが掴み、一組チームの一体を場外。それから、両クルス七分の間は平行線。互いに一歩譲らぬ試合。流れを持ち込んだのは、金衛門の左ストレートシユートでブルースドッグを場外。

「うにゃー！子分の仇」と、セリーニヤは金衛門にボールを当てた。だが、主力一体が抜けたことにより、試合展開が大きく流れる。セリーニヤ以外は連携アタックで次々と屠られた。しかし、伊達に三年生の番格をはってない。セリーニヤは一組のボールを避けながら、いざというときには思い切ってボールを取り、二機ほど場外送りにした。

四組チームの三機が内野に戻る。そこから、試合はまた平行線を進む。

試合時間残り一分、このまま行けば、人数の差分で一組の勝利。だが、イッキ、メタビーはその勝利に納得してない。この試合でセリーニヤにボールを当ててこそ、真の勝利である。

「タチヤーナ、ちょっと……」

イツキはタチヤーナに耳打ちした。タチヤーナは指でオーケーを示した。

ボールが一組外野陣地にくる。それをリュビーチがキャッチし、なんと頭部反応弾でボールをセリーニヤに向かって飛ばした。セリーニヤは大ジャンプで難を逃れる。二組外野の誰かがキャッチして、一組内野に投げる。

メタビーが反応弾と叫び、一発はボールに当たってセリーニヤにぶち当たり、一発はセリーニヤに命中した。

「反則だ！」

キクヒメが高らかに抗議を申し出た。試合は一時中断。イツキ、メタビーに、一組、四組は固唾を飲んで見守る。担任同士の協議の結果、メタビーは退場。だが、セリーニヤはボールを受け止めきれなかったのも事実だから、セリーニヤは外野送り。退場にはなってもまったが、ロボットル大会での仇を討てたので、イツキとメタビーは満足した。

その後、反応弾の影響で外野のセリーニヤは殆ど役立たず。内野に残る機体も逃げの一手で、外野と内野でボールをパスし合う形となり、試合終了。九対三で一組の優勝。

同三年生たちに、試合を観戦していた他の学年からも拍手喝采が贈られる。四組の生徒からも「あいつら齒軋りしていたよ。一度、あいつらをぎゃふんと言わせてやりたいと思っていたんだ」と言う者が出る始末。応援席のメダロットとメダロットたちがやんや、やんやと歓喜する。

一方、オトコヤマ先生と畠田先生。オトコヤマ先生は畠田先生を小馬鹿にするようなことは一言も言わず、黙って互いに握手を交わした。

「次の人間による運動会では負けませんぞ」

「こちらとて」

爽やかなスポーツマンシップに則った行動の裏では、互いに火花を散らしていた。

る真四角な形の白い家だ。窪みの上は窓、区切るように小さな雨避けがあり、その下に表玄関がある。黒く塗られた鉄柱門越しから、香しい匂いがする小さな白い花卉を付けたカミルレが所狭しに咲き、通路状に沿って向日葵が植えられていた。

アリカがインタホーンを押した。どなたですか？と、少々年配らしき女性が応じた。タチヤーナの母親、マイアだろう。

「バルスコフさんですか？私たち、タチヤーナのお友達です。今日、タチヤーナに誘われてきたのです」

「タチヤーナのフレンド！…タチヤーナ！お友達が来たわよ」

インタホーンの向こうから、どたばたとタチヤーナらしき足音が階下を降りる。ガチャリ、タチヤーナが扉を開けて、勢いで段差も飛び越した。タチヤーナはささっと門に寄り、門の鍵を開けた。

「ハアイ！ダブロ パジャーラヴァチ ヴャポーニユ（ようこそ、我が家へ）。イツキ、アリカゆっくり寛いでね」

二人を招き入れたら、タチヤーナは門を施錠した。

「する必要あるの？」

「日本は安全だけど、ママやパパは用心に越したことはないからって」

三人揃って玄関戸口に入ると、マイア夫人と艶やかなエメラルド彩色のタمامシ型メダロットのアンビギュアスがイツキ、アリカを歓迎してくれた。タチヤーナが夫人とメダロットを紹介する。

「もう知っていると思うけど、こっちはマイアママ。そして、この子の名前はリュビーチ！リュビーチは、日本語で虹という意味よ」

「こんにちわ！タチヤーナから話は伺っていたよ」

リュビーチというアンビギュアスはぺこりとお辞儀した。リュビーチの声は一切ノイズが含まれておらず、声だけ聴けば、きつと爽やかな青年を連想されていただろう。イツキ、アリカはマイア夫人とリュビーチと挨拶を交わした。

二人はタチヤーナと共に二階に上がる。親しくなったとはいえ、女の子部屋に入るにはやや緊張する。イツキはアリカより一歩遅れ

て入った。部屋は整理整頓が行き届き、青空に塗られた部屋にピンクや黄色など、様々な色の物がバランスよく配置されていた。所々ダンボールで梱包された荷が置かれている。

「何して遊ぶ？」

部屋を見回しながらアリカがタチャーナに聞く。

「じゃ、ゲームでもしよっか」

タチャーナは液晶テレビ台の下から、渋茶の布を被せたゲーム機を引っ張り出した。ゲーム機は、新型のプレイステーション4だ。タチャーナはストリートファイターなどの格闘ゲーム関連のソフトを三本床に置いた。そうして、三人は格闘ゲームに興じた。

「なあ、俺にもやらせてくれってばよ！」

メダロツチ越しから、メタビーが声を発した。

「タチャーナ、いいかな？」

「全然オーケーよ！そうだ！アリカもメダロツトを転送したらどう？大勢でやったほうが楽しいわよ」

イツキはメタビー、アリカはプラスを転送し、タチャーナはリュビーチを呼んだ。六組に分かれてのバトルロワイアルとなった。第一試合でタチャーナはプラスを下し、リュビーチはプラスに負けて、イツキは見事なまでにメタビーにやられた。続いて、タチャーナVSアリカは接戦を見せたが、アリカがマイア夫人に注意ほどの闘を上げて、勝利した。最終試合はメタビーとアリカ。二人共、並みならぬ気迫で試合に挑んだ。

かかかかかっ！高橋名人真っ青のボタン連打。アリカとメタビーの目には何も映っていない。あるのは、互いに一步も譲らぬ闘争心のみ。一対一で引き分け、この三回目の手合わせで勝敗が決する。「どっち勝つかな？」

わくわくとした表情でタチャーナがイツキを見つめる。甘い吐息がイツキの耳にかかる。タチャーナはイツキの隣に座り、いつの間にかイツキの手を握っていた。

「…え…さあ」

イツキはどきまぎして、試合を直視せず、まともな答えも言えなかった。

「これで、終わりよ！」

アリカの操作する、上半身裸の肉体美逞しいキャラクターが必殺技を放つ。メタビー操作の女学生のキャラクターは壁蹴りし、必殺技を避けて強烈なジャンプキックを男の顔に入れた。男の絶叫が轟く。うつそーと、アリカが悔し紛れに寝転ぶ。

「よっしゃあー！！！」

メタビーはコントローラーを置いて立ち上がり、右手の人差し指を天に向けて自らの勝利を宣言した。タチャーナも惹かれるように拍手しながら立った。

「凄いね、メタビー！通信プレイで世界のプレイヤーとも戦えるほどよ」

「そう？もつと褒めて、褒めて！」

メタビーは調子良さげに胸を張る。イツキは、心の中でちえと舌打ちした。二人には、もう一分か二分ぐらいゲームに夢中になっていて欲しかったな。イツキはタチャーナの感触が残る手を一回握り、開いた。

ふと、視線を上げると、仰向けに寝転ぶアリカと視線が合う。アリカが不気味に笑う。

「お邪魔しましたか？」

「お…お邪魔って何！？……な、何のことだか知らないなあ」

「あっ！恍ける気！」

アリカが上半身だけ起こして、イツキのほうを向くと、タチャーナ、メタビー、プラス、リュビーチの視線が二人に注目する。メタビーが傾げた。

「何してんだ？」

「なんにもないわ…。えっと、ちょっと負けた愚痴を漏らそうとだけよ」

「そっか」

メタビー、タチヤーナ以外はそれで納得した。

ゲーム大会はメタビーが優勝。遊びなので商品はでないが、メタビーが一番になれただけで満足のようだ。マイア婦人が、クツキーとオレンジジューズを持ってきた。イツキ、アリカはありがたくそれらを頂戴した。メタビーがじつとクツキーを見やる。

「どうした、メタビー？」

「いや…もし、俺が人間の場合。さっきのゲームに優勝した権利として、クツキーを他の奴より多く食べられたかもな。そう思っただけ」

「イツキのメダロット変わっているね」

タチヤーナの言ったことに、イツキは否定も肯定もしなかった。確かにメタビーは変わっている。自由奔放な性格のメダロットは他にもいるが、入手経緯及び、ゴールデンウィークでの一騒動で見せた不可思議な技とか、普通のメダロットは明らかに異なっている。イツキがまた思考世界に浸ろうとしたとき、アリカが次は何すると誰にともなく言った。

タチヤーナが外に出ようと提案した。

「先に出ているいいよ。私、これ持って行くから」

タチヤーナはお皿にコップをお盆に載せて、台所がある階下へと降りた。アリカが悩むイツキの頭を小突く。

「何難しい顔しているの？外に行くわよ」

アリカがブラスを伴い部屋を出る。

「早く行こうぜ」部屋から出たメタビーが顔を覗かせる。よっころしよ、イツキは重い腰を上げた。

「何して遊ぼうか？」

「かくれんぼ」とイツキが言う。

「かくれんぼ！いいわね、やりましょ」

タチヤーナが賛同する。遊ぶ前に、イツキは御神籤町と周辺地域の、地方独自のかくれんぼのルールを説明した。

イツキの住む地域では、六人までは鬼は一人、六人を超えるとき

は場所と人数に応じて二人、あるいは三人ほど鬼役になる。また、これも状況と人数によるが、基本六人の場合、鬼は二人を見つけたらどちらかを鬼にする選択肢が与えられる。だが、二度鬼になった子は、次捕まっても鬼になる必要がないという救済措置もある。鬼が十数えている間に他は隠れ、皆で一斉にもういいよと叫ぶ。

なお、鬼が捜している間に他の子が捕まった子に触れれば、逃げられる。その際、大声や鬼に直接出会うことでそれを知らせる。それを知った鬼は、その場でまた十秒数えなければいけない。

他にもかくれんぼの細々とした基本ルールを伝えたら、アリカが鬼役を買って出た。

「金衛門、大空飛んで隠れるのなしね」

イツキは金衛門の脚部を相性の良いポイズンコピーの物に替えた。アリカが公園の樹に顔を伏せて、数を数え始めた。

ブラス、メタビー、金衛門はばらばらに。イツキ、タチヤーナは連れだって隠れた。

二人つきりで隠れたとき、タチヤーナが投げかけるような潤んだ瞳をイツキに見せた。イツキはどきりとした。イツキの表情から自分が泣きかけていることを知り、タチヤーナは軽く首を振り、すぐに笑顔を浮かべた。

この状況が続けばいいなと願うイツキの想いを打ち砕くように、アリカがひっぴと怪しく笑いながら忍び寄ってきた。

「…ひっぴひっぴ。悪い子はいねがあ、悪い子はいねがあ」

まるで、やまんばやなまはげではないか。イツキ、タチヤーナ、近くに隠れるメタビーは震えてなまはげと化したアリカに見つからないことを祈った。

こうして、陽が暮れかかるまで、三人と四機は精一杯貴重な時間を遊びに注いだ。

帰り際、タチヤーナはそれぞれの顔を見つめ、

「短い間だったけど、私、楽しかった…。また、会えるといいね」
タチヤーナは最後にもう一度、ロシア風のお別れのキスをした。

夏休み前日のお別れ送別会の次の日、夏休み初日。タチヤーナ家は早朝、ロシアへ向かってフライトする。

今まさに車で飛行場へ行こうとする一家に、数名の一組生徒が最後のお別れに来た。正真正銘、タチヤーナは最後のお別れの挨拶を交わした。直前、イツキがタチヤーナにダッシュボタンの左腕をタチヤーナに渡した。

「アンビギユアスは高威力を得る代わりに装甲を犠牲にしているから、これがあれば少しはましになると思うよ」

「ありがとう、イツキ…。大切にするね」

車のブラインドから、タチヤーナが手を振る。車が見えなくなり、他の者が帰っても、イツキ、アリカに、二人の愛機三機はしばらくそこに立ち尽くした。

アリカは、イツキがタチヤーナにダッシュボタンのパーツを渡したのは、単なる親切心ではないのを気付いていた。

アリカはそれを口にせず、目と鼻の先まで顔をイツキに近づけた。

「な…何だよ」

「じゃ、ラジオ体操でも行こー!」

「えー…!面倒臭いよ。帰って、寝よ」

「何言ってるの!どんなときでもスタートと健康は肝心よ。さ、行きましょ行きましょ!」

そう言って、アリカはイツキの腕を引っ張って強制的にラジオ体操へ連れて行く。メタビー、プラスは相変わらずだと苦笑し、金衛門は子を想う親に似た気持ちで二人の背を見た。

9・メダドッジ（後書き）

ある意味、完全オリジナル回だから、スランプと諸事情も重なり完成に時間がかかりました。

正直な感想、自分でも、前半のメダドッジの下りはそこまできるかなど思いました。

次回からは、「メダロツ島編」に突入します。ロシア人の女の子の話では、ほぼロボット（戦闘シーン）が無かったので、メダロツ島編からは、ふんだんにロボットを盛り込むようにします。

10・メダロット島（初日）

彼はある人からの指令を請けて、メダロット島へ向かう。

常に微笑む白い仮面を付け、ばさりと漆黒のマントを翻し、彼は愛機と共にメダロット島へと出発した。

金魚鉢ヘルメットを被り、全身白いアンダースーツを着込んだいかにも変質者な風体の人物が、こそこそと下水道を移動する。見張りらしき者に合い言葉を伝え、下水内部の更に下、密会所があるマンホールに潜る。

ロボロボ、ロボロボ、ロボロボ！

わいわい、がやがやとは騒がず、金魚鉢集団は男も女もロボロボと騒いだ。そう、ここは悪の秘密結社ロボロボの秘密の集会所。上座の太いアホ毛を伸ばした男は団員が集合したのを見やり、立ち上がった。簡単な挨拶を述べる。その男を含む上座に座る四人だけ、何故か全身を黒いアンダースーツで身を包み、頭には先が丸っこい二本の角を生やしていた。

四人の中でも一際大柄の男は傍目から見ても、明らかに気を落として見ることが見て取れた。大柄の男は、おどろ山にてイツキたちと交戦した、ロボロボ団幹部シオカラであつた。おどろ山での失態を、シオカラはリーダーに同格の幹部たちから酷く糾弾されたのだ。おっほん！アホ毛の男が気取った咳払いをする。

「諸君も既に周知のとおりであろうが。今宵、我々ロボロボ団は例のマル秘大作戦を実行するときが来た。そして、今回の陣頭指揮はサラミが取る」

四人の中でも一番背の低い、おしゃぶりをつけたせいぜい五歳から七歳ぐらいの男の子が壇上に立つ。サラミと思しき男の子は、幼

い声ながらアホ毛の男以上に気取った喋り方をした。

「手筈は整っておる。後は、諸君らは作業員として乗り込むだけだ。目下のところ、私は諸君らの報告を受けるだけだ。だが、急を要するときは私自らが手を下す。それは即ち、幹部であるボクちゃ……私が自ら現場に赴かなければならないほどの非常事態である。できれば、諸君らの迅速かつ優秀な働きにより、私自らが手を下さなければならぬ事態が起きないことを願う。…では、散開！健闘を祈る！」

掛け声と共に、白い集団はゴキブリの如き速さで密会所から一斉に移動した。

タチヤーナと別れて五日、軽い失恋でショックのイッキに追い打ちをかけるように、夏休みのメダロット島旅行に行けそうにないとパパは言った。

「言い方が悪かった。正しくはメダロット島には一緒に行けないだけだ」

「どういうこと？」

「パパはちょうどイッキたちが行く前日には、仕事でメダロット島へ出張するんだ。毎日は無理だが、イッキがママと滞在している一週間のどこで暇を作るよう上司に頼んだことから、滞在期間の間に三日間ほどぐらいなら、一緒に遊んでやれるぞ」

食べている時にも関わらず、イッキは嬉しさのあまり飛び跳ねて椅子からこけてしまい、チドリママに叱られた。

話を聞いていたメタビーが金衛門にこっそり尋ねる。

「なあ、お前どうどう！？」

「どうとは？」

「何言ってるんだ！俺も前からCM見てメダロット島の存在を知ってたな。こっ、早く行けるとは思いも寄らなかつたぜ」

無邪気で子供みたいな奴と、金衛門は苦笑した。

メダロツ島出港当日。イツキはお気に入りの漫画数冊、携帯ゲーム機、母親に読むように言われて無理矢理詰められたズッコケ三人組に十五少年漂流記などの児童文学小説二冊など暇つぶし用の荷物が入ったバッグは自分で担ぎ、ぶうたれるメタビーの意思を無視し、着替えのバッグはメタビーに担がせた。ソルティは、ご近所の萩野さんに預かってくれた。

イツキは、チドリ、メタビーの三人は、萩野おばさんが運転する車で送ってもらった。

メダロツ島の夏休み一般便の出港時間は、朝の八時四五分、十時五十分、十三時二十分の三便に分けて出稿する。イツキたちは最終便の一三時二十分発に乗船する。

「萩野さんありがとうね。お土産ちゃんと買ってくるわ」

チドリ、イツキ、メタビーは萩野さんにぺこりとお辞儀をした。港に着いた大抵の人は船を見上げた。船の大きさもあるが、鯨をモデルとした青く奇抜な船型が珍しいからだ。メダロツ島運航船、かのシャーク号とはこれのこと。チドリは思わず携帯のカメラで撮影してしまった。

今日はいにくの曇天。天気予報では台風の恐れはないらしく、船は通常どおり運航。また、一週間の間は概ね晴れと予測された。

チドリはうきつきとする我が子の手をしっかりと握り、船員に乗船券を見せた。

「どうぞ、ごゆるりと船の旅をお楽しみください」

船員のマニュアルどおりの挨拶を受けて、三人は乗船した。

「イツキー！あんたもきたのね！あつ！おばさんもこんにちわ！」

船縁から身を乗り出して元気よく声をかけたのは、アリ力だった。そのアリ力を、背後から甘酒おばさんが注意した。

入船すると、イツキは、お前らは！と大声を上げそうになった。それは、お前らと言われそうになった者たちも同じだ。

キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。あのスクリューズの三人も乗船していた。スクリューズに挟まれて、眼鏡をかけた気の弱そうなイワノイの父親がいた。イワノイの父親は天領親子の存在に気づき、挨拶をした。

保護者同士が穏やかに挨拶を交わす中、当の子供たちとそのメダロットの間では、一種の緊迫感が漂った。

そこへ、また懐かしい二人が乱入してきた。

「よう、イツキ。久しぶりだな」

「あら？皆さんお久しぶりです」

右側通路を見たら、カリンちゃんとコウジ、そして、見知らぬ男性と執事っぽい男性がカリンとコウジに付き添っていた。さらにさらに、アリカと甘酒おばさんも加入した。

保護者や一部の者を除き、子供たちの多くはメダロット島で一波乱起きることを予想した。

ただ一人、メタビーは船先に佇んでいた。おばちゃんたちもいるから取っ組み合いにはならず済んだのよは良かったものの、どうも嫌いな予感がする。メダロットを使用した犯罪を警戒して、セレクト隊もメダロット島警備に就くと、ママから聞かされた。

スクリューズの奴ら、金持ちの嬢ちゃんと坊っちゃん、セレクト隊。もしも…だが…これで、ロボロボ団に怪盗レトルトまで現れれば、役者が勢揃いすることになる。

考えすぎだな。俺って意外と心配性なのかな。メタビーが船先からとつくのとうに遠のいた御神籤町を見つめていたら、イツキ、金衛門もきた。

しばらく、じっと遠のく景色を眺めた。これから、一週間はメダ

ロツ島でバカンスを過ごす。イツキや子供たちは楽しみでしょうがなかったのに、こうして町から離れると、何やら物寂しい感情も湧いた。

メダロツ島バカンス初日は、曇天ながら快適な旅立ちだった。シヤーク号のけたたましい気的が鳴る。

10・メダロット島(初日)(後書き)

クワガタと同じこと書くけど、登場人物の視点がころころと変わりました。

11・メダロット島（初日・二日目）

波にゆらゆら五時間、天領一家の居る部屋からでもメダロット島の島影が見えた。

メダロット島はシーズン毎に客を分けていて、天領家を選んだ夏休み第一シーズンでは、スタッフを含む総勢一二万人もの大衆が、最小二日から最長一週間メダロット島に滞在する。夏休みのシーズンでは、外国人のゲストを招いた大規模なメダロットの大会を開催するので、毎年、十万人超えは当たり前。

シャーク号が港に着くまで、子供たちはメダロットとともに甲板や船内を探索し、親はのんびりと船室で寛いだ。一時間ほど前から小雨が振り出さしたので、イツキは携帯ゲーム機に興じ、金衛門は瞑想に耽り、メタビーはイツキの漫画を読み、チドリは小雨が降る四十分ぐらい前から仮眠していた。

そうして時間を潰していたら、船内アナウンスが後二十分で船は港に着くと放送した。

チドリはむつくりと起き上がり、船室内の洗面付きトイレで洗顔して目を覚ますと、イツキに下船の支度をするよう伝え、自身は身近な物をバッグにまとめた。

ぼー！ぼー！

シャーク号は二回汽笛を鳴らし、船内アナウンスが残り五分で港に着くことを告げる。

天領一家に甘酒親娘は下船口近くのカフェで荷物を置いて待機していた。

体感からして船が止まるのに気づく、イツキは何となく外を見やる。中世ヨーロッパの城下町城門を思わせる作りのメダロット島遊園地入場口が聳え立っていた。チドリは目覚めのコーヒー代金の支払いを手早く済ませ、天領一家は一拍遅れて甘酒親子の背を追う。船上からでも、既に膨大な人間が港やメダロット島で動き回る姿が確認

できる。

イッキたちが泊まる予定のホテルは、港から海沿いを歩いて二時間ほどのところにある。歩くには遠いので、各施設から送迎用バスが送られる。

混雑した中ではぐれぬよう、チドリとイッキは互いの手をしっかりと握り合った。移動の邪魔になるかもしれないので、メタビーと金衛門はメダロツチに収納、おかげでイッキはメタビーに割り当たった荷物を持つことになり、重いから早く送迎バスに乗れることを願った。

「メダロツ島タカサゴホテルお泊りのお客様の方々はいらっしゃいませんか？タカサゴホテル送迎バスはこちらです！」

四十代の男性が人混みの中、ざわめきと各施設の添乗員に負けぬぐらい大声を張り上げていた。

二組の親子は群衆を掻き分けて、送迎バス停まで何とか行けた。急ぎ、大荷物だけをバスに詰め込み、イッキは肩が楽になれた。

二組の親子が乗ってから数分後、添乗員の男性が人数を確かめると、バスは発射した。移動の間、イッキは雑談を交わしつつ、シャーク号と港、そしてバスからの景色を眺めた。

十五分ぐらいで、バスはタカサゴホテルに到着した。タカサゴホテルは四階建ての和洋折衷な建築物。天井は屋根瓦、下は薄い水色と賑やかな点々模様が塗られた近代的なビル。

パパが四月頃から、ついでに甘酒母子の分も予約していたホテル書入れ時に合わせて、ホテルはシーズン対応の大サービス格安宿泊期間を設けた。本来、一週間の宿泊料は親子二人（メダロットは荷物扱い）で十一万二百円もするが、サービス期間に付き、家族学生割引で六万円である。パパは会社が用意したところで眠るから、ジヨウゾウパパの宿泊代については実質ただである。

その分、食事やお土産に宴会で元を取ろうという魂胆がある。

雨が本降りとなり、ホテル前の海辺で遊ぼうにも遊べず、ロボットもできない。天領一家は三階の305号室、甘酒親子は一つ隔て

た307号室。まずは荷物を置いた。外は予報どおりの雨。どうせ濡れるから、イツキはすぐにでも海水パンツを履いて海に行こうとしたが、チドリは波が荒れているので危険だと止めた。

部屋の窓から海を見ると、確かに波は荒れていた。が、船が転覆するほどのものでもない。イツキは波に揺られたかったが、母親とメダロッチ越しから金衛門にも止められてしまい、諦めた。

一室の広さは十四畳の広さがあり、二人と二機で過ごすには十分過ぎる空間だった。

テレビで刑事物ドラマの再放送を見ていたら、メダロッチから転送したプラスも連れて、アリカは天領家の部屋に訪れた。ママはアリカが部屋に入ること喜んで許した。

「イツキ、今暇でしょ？だからさあ、一緒に持ってきた宿題片付けない」

「あら、良いアイデアだね。アリカちゃん」
ママもアリカの言ったことに賛同した。他にすることが無いので、イツキはアリカと宿題をすることにした。ママは甘酒おばさんに用があると言って、部屋を出た。

イツキが持ってきた宿題は一番嫌いな算数の宿題、夏休みの宿題はこれの他に、社会、国語、日記、歴史などがある。イツキは算数、日記、社会の宿題を持ってきた。アリカは社会と歴史に日記。

アリカの場合、嫌いというより好きな部類の宿題を持ってきた。金衛門、プラスが教師役として時に助言を与え、二人の宿題を手伝った。メタビーはイツキの代わりにと、ご親切にもゲームしてくれていた。イツキはてんで駄目で、完全に金衛門とプラスが教師役となり、アリカに「どっちがマスターか分からないわね」と笑われてしまった。

二日目、昨日のうちにバケツをひっくり返した天気は日本晴れ。

九時には早速、メダロット島遊園地行きのバスに乗った。

イツキ、それとアリカは、この日のために受けられる限りの真剣ロボットを受けた。目的は実力向上とメダロット島での限定品を買う為である。

ゴールドンウィーク三日前、メダロット研究所に寄った時、ナエさんから一早く情報をもたらされた。メダロット島夏休み第一シーズンにて、ヴァルキュリア型メダロットのプリティプライン三十式、人魚型メダロット・ピュアマーメイドの後続機メイティン四十式がティンペットと抱合せで計百体が限定販売されるという情報だ。

両機体は今年の一月に新発売されたメダロット。値段は高く、プリティプラインは八万円、メイティンは七万円、それに四万円もする女性型ティンペットも買えば、実際は十二万円と十一万円のお値段が付く。

その両機体が、今年の夏休みメダロット島夏休み第一シーズンにて、七万円と六万円という破格の値段で売られる。

抽選予約は一万名、インターネットで受付中とのこと。自宅に帰るとイツキ、アリカは即行で抽選予約を済ませた。イツキはママとパパにこのことを話した。両親はイツキが二機目のメダロットを持つことを承諾した。ロクショウが一家の一員として馴染んでいたのも、両親が承諾した理由だろう。

そんなとき、ゴールドンウィークで光太郎を拾ってしまった。ママとパパは悩んだが、一万名の応募があるので当たる訳がないだろうと思った。

だが、両親の思惑は外れ、何という強運。イツキはメイティンを買える権利が当たり、アリカはプリティプラインだった。今更捨てると言うわけにもいかず、チドリとジヨウゾウはイツキが買うこと許した。

「…しょうがなわいね。でも、そろそろ人間の家族が増えてもいいなと思わない」

このとき、ママがパパに対して意味ありげな視線を送り、パパが

赤面をして誤魔化すように新聞で顔を隠したのを今でも覚えている。あれはどういう意味なのかな？

開園前だが、昨日以上に混雑を極めていた。今日の一四時から開催する国外ゲストを招いたロボット大会の席取りを目的とした客が大半だ。イツキ、アリカは限定商品予約の際にこのロボット大会の参加申し込みを済ませていた。ゲストの権利として、一枚無料観戦チケットが進呈される。そのため、チドリと甘酒母親の表情は余裕だ。

イツキがチドリの顔を見上げる。

「ねえ、ママ。大会まで自由に動いていい？」

「そうねえ……。アリカちゃんと一緒なら構わないわ」

アリカもイツキと同じように母親の顔を見た。

「母さん、私も大会が始まるまでは自由に動いていいでしょ？」

「イツキ君と一緒にならね」

二人の親の承諾を得て、イツキとアリカは改札口はくぐると、まずは一直線に売店を目指した。人を掻い潜り、押しつけられながら、目的の売店に辿り着こうとしたそのとき、ヘイユーと何者かが二人を呼び止めた。

他の誰かを呼び止めたのだらうと思ひ、先を急ごうとしたが、またしてもヘイユーと叫んだ。

「一体誰なんだよ？姿を表したらどうなんだ」

イツキの要望に答え、謝りながら混雑を掻い潜る人影。

一見、西部劇の黒服を着た悪者ガンマンのような格好をした、キラリとしたブラウン色の太いゲジ眉、妙に睫毛が伸びたぱっちりお目目、スポーツ刈りで、口回りをどっかの泥棒みたいに髭を生やした、三十代ぐらいの外国人がイツキとアリカの前に立ち塞がった。

「そのアナタ！時間は取らせないから、ちよいとミーとロボットするねえん！ワタシ、テキーラだよ！」

「あの、何を言っているのですか？今、急いでいるんだけど」

年上なので、イツキはそれなりに丁寧な話し方をしたが、相手は

聞く耳をもたなかった。

「ノンノン！マンの言葉に一言は無い！これ、武士道の精神。てなわけで…、カモーン！」

テキーラという男性はイツキとアリカに見せるように掲げたメダロットから、メダロットを転送した。テキーラのメダロットチから転送されたメダロットは、見たことが無い。両腕は回転式の機関銃、脚部は四本の植物の根っこの先に車輪が付いていて、頭はサボテンにカウボーイハットを被せたような、主に緑の配色で染められたメダロットだ。

イツキが何か言おうとする前に、謎の男テキーラが先んじて二体のメダロットに指令を出した。

「イツクワヨー！トゲトゲアターック！！」

テキーラが命じるまま、二体の謎のメダロットは右腕のガトリングを乱射した。地面を抉る弾丸が土埃を発生させて、イツキとアリカはむせた。

「いったーい！危ないじゃないの！」

「アグリイガールはお黙りなさい！」

「アグリイガールって何？」

アリカがプラスにアグリイの意味を尋ねた。プラスは素知らぬふりをした。本当は意味を知っているが、それを言ったらアリカがどういう行動に出るのか測りかねるので、あえて口に出さなかった。

uggyとは、醜いやブスという意味の英単語である。アリカがイツキの背中を押した。

「やっちやいなさいイツキ！」

「え…！そんなぁ…」

「ナニヲごちゃごちゃと…！メダロット、ヒューマンにダメージ与えることしないね！だから、どんどん安心して喰らいなさい！」

今度は左腕のガトリングが土埃を立てた。周囲は危ないぞ、他所でやれと文句を言いつつ、血気盛んに暴れるお姉口調の気味悪い外国人を止めようとする者はいなかった。

メダロットチからロクシヨウと光太郎が声を発した。

「イツキ、俺と金衛門を出せ！あの馬鹿、どう聞いても話しが通じるようなたまじゃない」

「メタビーの言うとおりだ」

仕方なく、イツキはメタビーと金衛門を転送した。テキーラが不敵に微笑む。

「ウフフフ…。私のワンダフルでエキセントリックな技を浴びる覚悟はできたようね、アミーゴヨ…」

「…出来てないって…しかも、アミーゴって…」

テキーラはさらりと受け流した。

「ウフフ！これで、止めヨ！ローリング・トゲトゲ・ボンバー！！」

「無茶苦茶だあー！」突っ込むイツキ。

胸部の銃砲も開口したテキーラのメダロット。応戦の構えを取るメタビーと金衛門。

「こらー！やめなさい！！」

この騒動を仲介にきたセレクト隊員。全ては、同時に起こったことだった。テキーラがホワイと呟いて振り返り、二体のメダロットも振り返った。どうやら、テキーラのメダロットはリヨウと同じ行動を取る、つまり以心伝心なのかもしれない。イツキもセレクト隊員を見た。だが、メタビーと金衛門はもう攻撃の手を止められなかった。

一体のメダロットはサボテン頭をリボルバーで一発、一体は金衛門の左ストレートで顔を殴られ、二体は同時に機能停止した。

全ては一瞬の出来事だったので、当事者たちには何がなんだか理解不能だった。

たった一つ理解できるのは、形はどうあれ、イツキのメダロットがテキーラのメダロット二体に打ち勝った一点だ。

「ほら、これ以上、面倒事に巻き込まれちゃかなわないわ」

アリカがイツキの腕を掴んで人混みに紛れた。テキーラはシヨックで立ち尽くしていた。現場に駆け付けたセレクト隊員がテキーラ

を羽交い締めにした。

「こら！こんな場所で騒ぎを起こすなどけしからん奴であります！設営支部まで一時連行するであります」

そして、二体のセレクト隊御用達メダロット、アタックテイラノが器用に二体の倒れたメダロットを回収した。と、テキーラがもがきながら喋った。

「大会場で待っているわ！」

「さっさとこい」

群集の隙間から、テキーラが羽交い締めのまま引き摺られていく姿を見届けた。トラブルや余計な証言を避ける為、二人は二十分程度売店から離れた。売店近くのゲームセンターに入り、百円でゾンビを撃つシューティングをプレイ、それからゲームセンター内を適当にうろつき、売店へと向かった。

こちらは外ほどではないが、係員が客を整列させていた。二人は引換券を見せて、列に並んだ。どうやら、自分たちが最後尾らしかった。主に若者やファミリーを中心に、プリティラインとメイティンのパーツが入った箱、ティンペットBOX、メダルの三点セットを持って店から出てくる。胸が高鳴ってきた。三人目にして、最後の仲間を迎えられる。

メイティン一式を買うために、戦利品であるパーツの多くを切り売りするのは惜しまれたが、その惜しさも目的を目前にして消えた前に並ぶアリカがパーツ、ティンペット、メダルの三点セットを先に購入。自分も引換券とお金を渡し、さあ、ご対面。そのはずだったが、世の中そうそうイッキの思い通りにはならなかった。

女性店員が非常に濟まなそうな顔で言った。

「誠に申し訳ございません。さきほどの方でメダルは品切れとなりました。次回までの入荷は未定となっております」

「そんなあ。パーツやティンペットも？メダルも一緒じゃないの」

「いえ、パーツやティンペットはお売りいたします。ですが、メダルは別売りとなっております」

「えー！普通、そういうのも一緒に渡す物じゃないの」

アリカがイツキの肩に手を添えた。言わずとも、今は無用なトラブルを避けると言いたいのが分かった。イツキは渋々、大人しくメイトインのパーツとティンペットだけを受け取った。

アリカは嬉しげにシノビをメダルを陽にかざしたが、イツキは溜め息をついた。折角入手しても、メダルが無ければただの人形。動いて会話できてこそ意味があり、そうでなければ意味が無い。かと言って、このまま手放すこともできない。

メダロットの時計を見た。十時中頃を指していた。こうなれば、僕ができることは一つしかない。

「何がなんでも入賞しなきゃね。確か、三位はメダル、パーツ一式、ティンペットのどれか一つを貰えるんだよね」

アリカはイツキの思考を読み取った。イツキは一応聞いてみた。

「勝たせてくれるの？」

「まつさかー！前は負けてあげたけど、今度は手抜きなしよ。優勝はこの私とプラスと……えーっと、何て呼べばいいかな？」

「どこか落ち着ける場所で組み立てから、名前を決めましょ」とメダロットからプラス。

「そうね。というわけでイツキ。大会の間は、ライバル同士よ」

そう言って、アリカは何処へと去っていった。残されたイツキはただ一人、途方に暮れた。…なんだかなあ…。まつ、愚痴を言ってももう手遅れか。こうなれば、やるだけってみるしかないよなあ…。やるのは、メダロットたちのほうだけど。イツキは俯いまま言った。

「メタビー、金衛門。頼んだよ」

メダロット関連の大会を行う場所は、外観は東京ドームそっくりだった。

受付で身分を証明して、選手控え室に入った。控え室内は、黄色

人種、黒人、白色人種と、人種の坩堝るじほと化していた。指定ロッカー
ルームの鍵を開けて、買ったばかりの二点セットや財布などの貴重
品を置き、中に敷かれたトーナメント表を見てびっくりした。出場
選手の多さにもそうだが、一回戦第一試合の相手は何と、柔らかな
金髪ツインテールが印象的な、美少女メダロットカーリンちゃん
が相手だった。

反面、コウジやスクリーブズのイワノイ、カガミヤマとは大分離
れており、幸か不幸か、アリカの一回戦の対戦相手はコウジだった。
キクヒメとは、キクヒメか自分が勝った場合の話だが、二回戦で当
たる。コウジとは、準決勝で相見えることになりそうだ。

ドームスピーカーが、天領イツキと純米カリンに出場を告げた。

11・メダロツ島(初日・二日目)(後書き)

タカサゴホテルの由来は、日本酒の「高砂」からきています。
テキーラの出現時期が原作とは異なります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5683v/>

メダロット2 ~カプトversion~

2011年9月25日01時50分発行